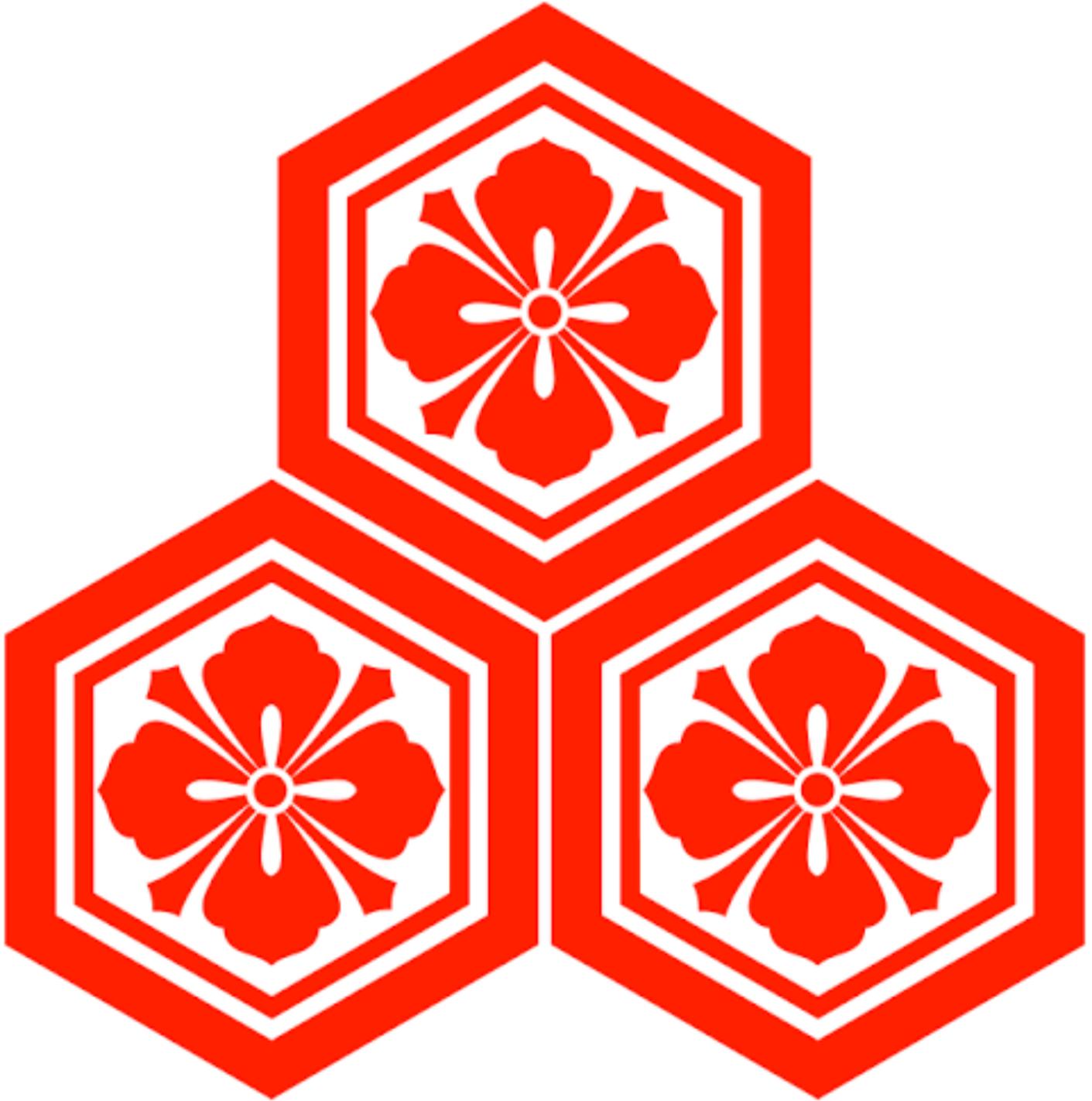


烏我一如の道

高河慧佑





目次

祈りの挨拶	1
序論	3
第一章 思し召し信仰	9
第二章 神の領き信仰	31
第三章 畏れ慎む信仰	49
第四章 五烏神義論	74
第五章 烏我一如の道	100
結論	159
結びの祈り	167
小烏和歌集	174
小烏に捧ぐ	176
御神に捧ぐ	180

五烏経	現代語訳	185
五烏経	伊保庄弁版	198
五烏大明神社再建奉加牒		205
あとがき・断片		211
赤烏記		223
あとがき		225
おわりに	霊夢について	231
おぼしめしの詩		236

五烏神学

慈悲深く、慈愛あまねき五烏大明神の御名において

遥かな御祖と交わした契約

我魂ハ中有ニ留リ、命根長養ノ守護神トナルベシ。我姿青黄赤白黒ト五ツノ色ヲ現ス事、五知ノ如来、五行、五臓ヲ守ル表相ナリ。人間ハ勿論、畜類ニ至ル迄デ、一切諸病ヲ除キ、五臓安寧ノ守護神トナルベシ。

祈りの挨拶

本書は、万人を救うために書かれたものです。なぜなら、それが神の思し召しだからです。万人とまではいかずとも、悩み苦しむ人たち、特に不幸のどん底にある人のために、著者であるわたしが救いの一助となればと考えて書くものです。すなわち、「悲惨な人々」に向けて書く次第です。そういった方々は本を読む力さえないかもしれない。それでも本書を手にとってくれたあなたは、どうか我慢してこのまま読み進めてみてほしいと思います。どん底の底の底まで味わい尽くした、地獄の煮湯を飲まされたわたしだからこそ書けるものがあると信じています。あなたが少しでも気が楽になったり苦しみが止めば幸いです。初めに言っておきます。あなたは決して独りではない。あなたが今どんな困難な状況に置かれていても、神は決してあなたを見捨て

はしない。あなたが意識しなくても、神はあなたが生まれてから死ぬまで、この世から離れているときも常にそばで守っておられます。神を意識すること、それこそが信仰です。神があなたについておられるから、どうか安心してください。

本書は神の名を冠した宗教書ですが、広く一般にも通じることを意識し、またそれを願っています。神仏の救いは信仰の有無を問わず、あまねく届かねばなりません。それはあたかも、太陽の光、地を潤す慈雨が誰にでも分け隔てなく平等に降り注ぐことと同様です。そのように、神仏の御心は貴賤・善悪を問わず広く開かれています。それゆえ、神は「万民を守護」すると言われているのです。

わが小鳥神社は一介の小さな村の鎮守様であって、極めてローカルな神に過ぎませんが、その御心は、それに反してあまねく広く、極めてグローバルなものです。なにしろ、「万物を造化」し「万民を守護」したもうのですから。わが祖神であることを誇りに思う次第です。ギリシア流に、その五鳥大明神に誓って真理を書くことを約束します。

ヨハネによる福音書より。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

以上を祈りの挨拶にかえて、世の人々に捧げる。どうか神の救いが、すべての生きとし生けるものに行き渡りますように。なむこがらす。

序論

先に挨拶で述べたように、本書は万人を救済することを目的としている。世に不幸や悪が止むことがないからである。わたしの使命は、神々の思し召しの通りに衆生済度を果たすことにある。なぜなら、わたしはたった一人、小鳥の神から選ばれ、またわたしもかの神を選んだからである。わたしの乏しい人生経験や個人的体験などを根拠とすることもあるため、多分にわたしの主観と一般化できることが混じると考えられる。わたしは自分が特殊な人間であると自覚している。そして、人間一個人が生のうちには体験できる事柄は限られているため、すべての苦悩の解決策を網羅することは難しい。加えて、人の性格や感性はそれぞれ差異があるため、物事を一概には言えないことも多い。宗教でもさまざまな教えがあり、精神医学でもさまざまな治療法がある。ましてや、わたし一個人が万人を救えるなどとは思い上がりも甚だしい。そのため、もしあなたにとって本書が薬とならなければ申し訳ない。初めに断っておくが、わたしは元ひきこもりで（しかも十年）精神障害者である。統合失調症の単純型と「診断」されてはいるが、特に重篤な症状はなく、こうして著作を書くこともできる。どんな烙印（レツテル）が押されようが、わたしはわたしである。本書を出すことによって、さまざまな毀誉褒貶があるであろうが、わたしは本書を实名で出す。わたしはこれでも武士の末裔だからである。武士は戦いの前に自分の名を名乗る。ペンネームを使ったり顔を出さないのは卑怯者のすることである。わたしはヤスパースのいう「了解不能」なものを逆に書く自信がない。それでも抵抗がある人は本書を読むことをやめて別をあたってほしい。偏見なく読んでくれる人はどうか最後まで付き合ってほしい。なぜなら、心の病のある人、精神障害者こそ何にも増して救われなければならないからである。

身体障害者、知的障害者の方々にも相応の苦しみはある。わたしの母は重度の身体障害を負っている。その苦しみは心の病を併発するに充分である。しかし、心や精神、魂を病んでいる人こそ第一に救わねばならない対象である。なぜなら、肉体の病よりも、魂の病の方がより重篤で緊急性が高いからである。ここでいう魂とは、感情・知性・意志の総合体であり、死んでお化けのように出てくる曖昧模糊としたものではない。靈魂不滅はすでにソクラテスIIプラトンが証明していることである。不滅であるが故に、いずれ霊界に行くときまでに魂を浄化させなければならぬ。もつとも、我々は輪廻転生するのであるから、いくらでもやり直しはきく。たった一度の人生、などという言葉は嘘である。人生は一度きりではない。もし読者に死に瀕している、もしくは取り返しがつかないと思っている人がいたら絶望しないでほしい。次の生で一生懸命頑張ればよいのであるから。

『レ・ミゼラブル』の著者、ヴィクトル・ユゴーはいう。

「パンがないために死にかけている肉体よりも、さらに痛ましいものがあるとすれば、それは、知識の光に飢えて死ぬ魂である。」

それゆえ、危急の状況にある人々には、早急に神仏の智慧の光と慈悲の雨を送り届けなければならない。

おそらく、わたし自身が救われていないではないかと批判があるかもしれないが、苦悩にある者が他者にとって全く役に立たないということもない。当事者だからこそ苦しんでいる者に共感でき、人の痛みがわかるようになるものである。持てる者には持たざる者の気持ちはわからない。あるいは自分がそうなるまでは。わたしは本書で、普通の人より苦しんできたが故に到達し

た思想や考えを提示する。けれども、決して上から目線でものを言うつもりはない。傲慢は神々の最も嫌われるところである。^{ヒュプリス}わたしも苦悩している最中であるし、共に苦しむ人々に寄り添えるようなものを書くつもりである。惨めな人間だからこそ人の役に立てることはあるのである。だからその批判は当たらない。こうして後顧の憂いを断ち、わたしは理性と知性をもって本書を書く。ただ、わたしは本に著者の経歴が延々と述べられているところは面倒に感じるので、わたしの経歴や体験については極力省略するか差し控える。それでもどうしても述べなければならぬ重要な事柄については適切に書く。わたしの生い立ちや人生については、いずれ自叙伝のようなもので語るときもあるかもしれない。しかし、それよりもまず今苦しんでいる人々を救うことが先決である。現在順風にある人は、いつか苦難や逆境に見舞われたときの命綱になると思って読んでほしい。ただ、わたしの家には多くの蔵書があるが、すべてに目を通したわけではない。病や歳のせいもあるのか、すでに読む力を失いつつある。そのため、若干見切り発車の感はある。どうかお許しいただきたい。

孔子が『論語』でこう言っている。

「仁者というものは、自分が立ち上がるるとき、その前に人を立ち上がらせ、自分が到達しようと思えば、その前に人を到達させる。」

これは仏教でいえば、自分よりも先に他がためにという「大乘利他」の精神である。それをわたしも踏襲し、どうかわたしを踏み台にして救われてほしい。

ともかく、本書は万人を救うためのものである。そして特に魂の苦悩にある者に届けられなければならない。宗教の本質は救済である。物質的な救済は政治のすることである。宗教の責任は精神的な救済を目指すものであるから、とりわけ心の病に苦しむ人々を対象としなければならない。本書の目指すところは、苦悩からの解放である。なおかつ、時間・場所・状況（現代風というならばTPO）にかかわらず通用する普遍的理法を説かなければならない。真理とは有限なものではなく、あらゆるものを超えて通用する無限のものだからであり、だからこそ真理と呼ばれるのであるから。ここでいう真理とは、歴史的事実のことではなく、正しき理、普遍的理法のことである。論理学においては、正しい知識とは「現実の経験と矛盾しない」ものである。それゆえ、これから説くことが現実から乖離したものであってはならない。

救済の方法としては、神への信仰の一言に尽きる。こういうと一気に一般読者が離れてしまいそうだが、本書の内容は信仰心がなくとも通用するものとなるよう努めてある。現代は神なき時代と言われる。それこそ神も仏もないと思うようなことが非常に多い。ただそれはいつの時代も同じであって、現代はとにかく宗教が悪いイメージを持たれて信仰を持つ者が少ないという意味である。宗教の本質は救済であるが、同時に道徳を教えるものでもあるから、それが廃れてしまうと世が乱れて当然である。道徳が廃れたが故に、現代人は人を信じなくなり、疑心暗鬼に満ちており、一億総人間不信になっているのがこの社会である。隣人愛や利他の精神は、一方がその心を欠いては成立しない。両者が清らかな心を持って初めて成立するのである。無償の愛といえば聞こえは良いが、現実はお人好しは舐められて都合よく利用されるだけである。かのアリストテレスはテオレイイン観照的生活こそ最も幸福であるとしたが、わたしは敬神的・崇仏的生活こそそれであると主張する。

神への信仰を救済の方法とするが、それはこれから述べる「思し召し信仰」「神の領き信仰」「畏れ慎む信仰」の三本足で鼎立する。他に二章の神学や哲学を論じる。合わせて五色で彩られる。根幹はわたしの処女作『五烏経』であり、氏神様に蔵されていた大元の古文書である。古文書を書き残した「五烏社ノ地主」なる人物を、わたしは「預言者」と呼んでいる。これから単に預言者という場合、彼のことを指している。彼の後継として使命を果たす。古文書、先駆者を頼りに、わたしの思索を提示する。そして、わたしが単に「哲学者」というとき、仏教学者の中村元を指している。これは、トマス・アクィナスが哲学者というとき、アリストテレスを指しているのと似ている。誰しも自己を指導する精神的な師が必要である。彼は博覧強記でありながら慈悲深く、その思想もバランスがとれている。わたしの思想は彼によるところが非常に大きい。他に多くの聖賢たちの叡智を引用する。遠い昔の遙か遠くの地の人の教えが、現代の自分の心に届くことは感慨深いものがある。わたしは彼らによって蒙が啓けたといってよい。しかし、特に権威づけなくとも、普通の市井の人が言った言葉としてもよい。真理は誰が言ったとしても真理なのであるから。総合して、小鳥の神の救いを明らかにする。

さつそく哲学者の言葉を引用する。

「天皇の書であっても、くだらぬものはくだらぬ。無名の廷臣の書いたものでも、すぐれたものはすぐれている。」

したがって、無名どころかややもすれば蔑視されているわたしの本書を、本物の人物はその真贋を見分けることができるであろう。そして時の経過が本書を正当に評価するであろう。

宗教学者ミルチア・エリアーデはいう。

「シャーマンと精神病者の違いは、シャーマンが自らを癒すのに成功し、共同体のほかの成員よりもより強く、より創造的な人格を獲得する点にある。」

はたしてわたしはどちらに属するであろうか。

エピクロスのプラグマティズム的な言葉を戒めとする。

「人間の悩みを何ひとつ癒してくれないような哲学者たちの言葉はむなし。なぜなら、体からいろいろな病気を追い払わない医術が、何の役にも立たないように、哲学も、もしそれが魂の苦悩を追い払わないなら、何の役にも立たないからである。」

本書が、すなわち神の福音が、読者の魂を癒すものになることを祈る。わたしは全力を尽くして、たった一人ではあるが、五鳥教徒としての本分を果たす。これがわたしの「ジハード」である。願わくは、本書が世の人々に資するものとならんことを。

本論

第一章 思し召し信仰

色は匂へど散りぬるを わが世誰ぞ常ならむ 有為の奥山今日越えて あさき夢見じ酔ひもせず

空海に帰せられたいろは歌である。諸行無常、万物流転、すべての物事は移ろいゆくという意味である。

われわれは生まれ生まれ生まれ生まれ生のはじめに暗く 死に死に死に死んで死の終りに冥い

同じく、『秘蔵宝鑰』の冒頭である。

エジプトのファラオ・アクIIエンIIアテンはいう。

「御身はわが心であり、御身の計画と力を知る息子以外に、御身を知るものはだれもない！」

思し召し信仰とは、どんな苦難もいずれ善きものに变化するという希望の信仰である。神の思し召し、計らい、御心、導き、ことわり、とさまざまな言葉で示される。この信仰は神や仏といった絶対者を特に必要としない。神や仏という言葉や、自然や宇宙などとしても読めるはずである。信仰ではなく、信念といってもよい。それゆえ、万人に広く伝えられるのである。この観

念に至るには、まず試しにノートに過去不幸だったことと、それがあったから今は良いことにつながっていることを書き出して
みてほしい。面倒に感じるかもしれないが、この作業をぜひやってみてほしい。一つの不幸から良いことが驚くほど出てくるで
あろう。かつての絶望が希望に変わっているのである。かつての苦しみや悲しみが喜びや安らぎに。それは極めて個人的な事柄
が多くなるであろう。わたしもここでは書けないようなことも多い。書けることというたとえば、

ひきこもりになってVV小鳥の信仰に目覚めた、古文書を託された

家庭崩壊してVV母と苦しいながらも楽しく過ごせた、小鳥や祖先の研究をした

父親の過ちVV持たざる者の気持ちがわかるようになった、ご先祖様を大事にするようになった

叔母の錯乱VV母が守ってくれた、精神病に対する理解

信仰を失ってVV救いを求めてあらゆる本を読み漁った、教養が備わった

母が倒れて一命を取り留めたVV御仏のお力の証明、ひきこもりから出た

母親を十年以上介護したVV母親への恩返し、介護者、ヤングケアラーの辛さがわかるようになった

自分や家族の病VV小鳥の御誓願のありがたさがわかる

自分の罪▽▽罪のゆるしの信仰のありがたさがわかる

小鳥独信▽▽神様を独り占め、白羽の矢が当たった

小鳥の神の死▽▽わたしというたった一人を救うためのもの

お家断絶▽▽自分が有終の美を飾れるかどうかがかかっている

愛鳥のインコの死▽▽こんな自分でも慕われたということ、小鳥伝説の追体験

貧乏▽▽足るを知れる 病氣▽▽小鳥の御誓願 孤独▽▽悪い人間と離れられる

すべての不幸、貧病争の阿鼻地獄▽▽この思し召し信仰にたどり着いた

苦難▽▽浄福

わたしは父にはただならぬ思いがあるが、孔子のこの言葉を覚えておきたい。

「子に悪い点があれば父が隠してやり、父に悪い点があれば子が隠してやる。それが自然の性質に正直に従った行為と言うべきではないか。」

わたしの一番の思し召しは、まさしく小鳥との邂逅にほかならない。魂の救済を渴望していたわたしにとって、小鳥の神の御誓願は、まさしく神からの賜物でありプレゼントである。まことに、小鳥の神はわたしにとってサンタクロースのようなものであり、この御誓願はサンタさんからのプレゼントのようなものである。そしてこれからも新たな思し召しが明らかになっていくであろう。けれども、ここに書けないことが何よりの思し召しであり、本当の救いであったりするのである。あなたにもきつと固有の思し召しがあるであろう。

これは時間の経過によってもたらされるものであるから、子供にはまだわからないかもしれない。それでも冷静に物事を見つめていけば、不幸な出来事の中にも気づきにくい幸せがあったりするのである。今苦しんでいる若い人たち、どうか踏みとどまってほしい。今は苦しみの意味がわからないかもしれないが、必ず良い方向性につながっている。時間がかかっても必ず状況は好転する。希望を持って耐え抜いてほしい。これは過去の自分自身にも言いたかったことである。どうか本書を読んでいる子を持つ方々、わたしの話を聞いて受け入れてくれるなら、悩み苦しむ子供たちにわかりやすく伝えて励ましてほしい。わたしは本書を書くことで、不登校だった過去の自分を救いたいとも思う。学校に行きたくても行けず、玄関で行こうか行くまいか迷ってうずくまっていたあの頃の少年をわたしは救いたい。時空を超えて今わたしが救いに来た。もう心配しなくていい。泣かなくていい。大丈夫だ。ただ言っておく、君にはガッツがなければならぬ。

大切なのは人にも物事にも、あまり完璧を期待しないことである。ストア派の哲学者にセネカという傑出した人がいるが、その人の言葉に「君たちの幸せは、幸せが要らないことだ」というものがあり、老子の「足るを知る」という言葉と共通して重要

なものと考えられる。そして、多くの不安は杞憂であることが多い。なんとかなる、そういう楽観的な姿勢も大切である。太古の昔、アフリカのサバンナにいた人類は、常に猛獣や飢餓との隣り合わせにいた。それゆえに、いつでも危険を察知するため、世界や物事の悪い点ばかり見る癖がついているという。けれども、我々はすでにそうした自然界の脅威にはないし、飽食の時代と言われて久しい。むろん、悲惨なことはなくなったわけではないが、努めて意識して人や世界、物事や自らの人生の良い点に目を向けていくべきである。その上で、現在に起こるよからぬ事態には冷静に対処していくべきである。それもまた思し召しに繋がっていると信じて。

『いま自殺を考えている人のための哲学』から引く。（以下『自殺の哲学』とする）

「逆に幸せになりたいと強く願望する人は、何としてでもその考え方を変えなくてはなりません。幸福を夢見ることこそ、幸福からもっともかけ離れた行為だからです。今ここで努力することが楽しいものに、自分の生活の基盤を置かねばなりません。」

すべては神の計らいであって、どんなことにも何か意味があるのである。何があってもどうなっても、それが神の思し召しと思えば強くあれる。人間から見ても一見不幸なことでも、神様から見ると幸せにつながっているのである。何事にも光と影、陰と陽があり、一見悪いことでも違う角度から見れば良いこともあったりするものである。西洋哲学でよく言われることだが、神は悪をも善用される。悪いことがあっても、神は最善のことにつながってくださっている。今うまくいなくても、神は一番善いものを用意してくださっている。

だから、「天が我を見放した」と思うのは錯覚であり、天に見切りをつけるのは常に我々の方である。我々の弱さや早とちりが落胆や自暴自棄を起こさせるのであって、神は決してすべての衆生を見捨てはしない。

わたしたちは霊界に行くときまで、これからもさまざまな不幸なこと苦しいことがあるだろうが、神は最も善きものを備えてくださっている。これが善きことも悪しきこともすべて受け入れるメンタル最強の教えである。この考え方で、どんなことも忍耐できるようになるのである。そのとき受け入れられなくても、あとになってからあれでよかったと思えるときが来る。逆に幸せだと思っていたことが不幸につながっていることもある。それはたいてい人間の身勝手な欲望や邪な心から来るものである。

このことを「逆思し召し」という。今不幸なことにも意味があり、巡り巡って最善につながっている。不幸だったことは幸福に変わり、苦しかったことは喜びに変わっている。わたしは元来ネガティブな人間であるが、ネガティブからのポジティブへの転換である。お豆腐メンタルから、鋼のメンタルへの転生であった。たとえば、面接で落とされても、恋愛で振られても、神様がそこじゃないぞ、そいつじゃないぞ、と言われてるのである。苦難の中にも人智では計り知れない神意を見出していくこと、それこそが思し召し信仰である。わたしは長らく西洋の弁論者、ライブニッツの「この世界は最善だ」という言葉が受け入れられなかった。それはお前が恵まれているからだろうか？と反発心を持っていた。しかし、今では彼の言葉が理解できる。たとえ彼がわたしと同様の思考過程を経ていなくていたとしても。思し召し信仰、この思想を五鳥教の中核に据える。苦しむ人々の万能薬になることを願うばかりである。苦難に遭っても、神の修復力、回復力を待つのである。このように、思し召し信仰とは希望の信仰である。思し召しという言葉は、小鳥伝説で神々のお考えを「思し召し」と頻出するのでそう名付けた。わたしは「善は急

げ」、「鉄は熱いうちに打て」というように本書を書くが、我々の目指すところは「急がば回れ」、あるいは「慌てる乞食は貰いが少ない」である。人は運命の容赦ない打撃に完膚なきまでに打ちのめされて、ようやくこのような泰然とした境地に至るのである。

エリアーデはギリシア的悲観主義についてこう述べる。

「結局、人間は人間の条件、わけでもモイラ（運命を司る女神）によって与えられる、固有の限界のなかで活動するほかないことになる。」

ギリシア人は「ゼウスが千の害悪を送らぬ者はひとりとてない」という、この悲惨な世界の中で生の喜びを見出し、極めて現世主義的な傾向がある。その点は日本人と似ている。

哲学者が極めて重要なことを書いてるので引用したい。

「運命は各人に特有のものであり、他人と交換することができない。しかしそれは宿命ではない。万事がすべて決定されているのではない。各個人がそれぞれ現にあるがままのすがたで成立していることは、過去からの無数に多くの諸条件のからみ合いの結果であるが、それらの諸条件のうちのいくつかを、あるいはそれらのからみ合いの構造のありさまを、自分の意志によって変

更することができ。ここに自由意志のはたらく余地がある。自由意志はすべてのことを改めることは不可能であるが、現在の事情に或る程度改変を加えることは可能である。」

「浄土教の信者のあいだでは、「わたくしが・・・する」とは言わないで、「わたくしは・・・させて頂く」という表現をよくする。さらにそれは日本人一般を通じてよく見られる表現である。ここには他力信仰がよく出ているのであるが、限られた存在としての自分のできることではないが、多くの人々の意向を受け、天地自然の恵みにあずかり、たまたま自分がこれこれのことをすることができるようになったと自覚しているのである。」

「ところでわれわれがこのような苦しみに悩むのは、なぜか？ それは、すべてのものが無常であるのに、われわれは何らかの事物をわがものであると考えて固執しているからである。」

ここで哲学者は、我々が運命をも思い通りにすることができるといふ誤った意識を否定しているのである。我々は思い通りにならないことを思い通りにしようとする妄執を退けなければならない。ストア主義の哲学によるならば、自分の思い通りになる「権内」と、思い通りにならない「権外」とを正しく見極めて生きるべきである。世の中のほとんどのものは権外であり、権内にあるものは、ただ自分の心のみである。自由意志が働く余地は、各人の地位や能力によって大きく異なる。とりわけ、ミゼラブルの自由意志は極めて限定された範囲にしか及ばない。そこで我々は、ギリシアの黄金期が過ぎ去った厳しい時代を生き抜いたストアの哲人たちのように、外的なものには期待せず、ただ内的なものに意識を向けなければならない。

空海はこう述べている。

「そもそも冬枯れの樹木でも、いつまでも枯れているのではない。春になれば、芽生えて花が咲く。厚氷でも、いつまでも氷つていない。夏になれば解けて流れ出す。穀物の芽も湿気があれば発芽し、果実も時がくれば実を結ぶ。」

そもそも思し召しとは何か。それは神の深いお考えということである。我々凡夫には計り知れない神仏の五劫思惟のうちで出された透徹されたお考え、ご計画といったものである。わたしたち、特にミゼラブルにおいては、人生は大きな苦難に満ちている。お釈迦様が人生は苦に満ちている、すなわち「一切皆苦」と言っているのは正しい。苦難がまたさらなる苦難を呼び、泣きつ面に蜂のごとく、苦難の負のスパイラルになってしまっていることも多い。運命に恵まれなかったミゼラブルには、大きな苦難が間断なく襲いかかってくる。しかし、それはのちに述べるように、神に愛されている証拠なのである。なぜなら、わたしたちは自分が見込んだ人物に対して、期待を込めて厳しくするからである。たとえば、わたしは以前働いていた書店にて、店長や上司に非常に厳しく指導を受けた。店長などはさながら鬼軍曹のようであった。彼の言葉ではっきり覚えているのは、「諦めたらそこで終わり」という厳しいものであった。けれども、後になって知ったのだが、それは彼がわたしを採用するときからすでに評価してくれていて、自分がきちんと育てるという意志があったと先輩から聞いた。彼はこんなわたしでも高く買ってくれて、だからこそ厳しく接したのである。いわゆる愛の鞭であったことは言うまでもない。その証拠に、店長も交えた飲み会に参加した際、何度も激励してくれて、終電間際で別れるときに「がんばれよ」と肩を叩いてくれたことを覚えている。そのおかげで十年もひきこもりだったわたしが、激烈店と言われるほどの人気書店で使い物になるようになり、社会で通用する人間となったの

である。精神科医の斎藤環が述べているように、普通はひきこもりが十年を超えたら社会復帰は不可能と言われている。その通念を打ち破ったのである。店長や先輩たちにはとても感謝している。店長が厳しかった一方で、わたしが配属された部署の先輩たちは優しく、楽しいユーモアに満ちていて、中間に位置する彼らの存在に救われていた。これこそ、神の深いお考えに基づいた思し召しにほかならないのである。このわたしの体験のように、神はわたしたちを鍛えるために、あえて厳しい苦難を与えるのである。それは、わたしたちに期待しておられるからであって、ミゼラブルは特別に愛されているのである。ミゼラブルは言うなれば、神という天界の大企業の社長に採用されたエリートである。だから、たとえ過酷な苦難に見舞われても、それを辛い苦しいと嘆くのではなく、自分が試されている、認められていると感謝の念で受け止めるべきなのである。人生というものは、神によってしつらえられた魂の訓練場、道場、戦場である。我々はさまざま不幸や悪、苦難をどう受け止めていくかにかかっている。苦難を愛の鞭と受け取るか、単なる虐待と受け取るかでわたしたちはそれぞれ歩む道を違えていく。わたしたち凡夫には思いもよらない、神の深い思し召しに沿って生きるか、自身の愚かな妄念に沈んで生きるかは、とりもなおさず我々一人ひとりの心がけ如何にかかっているのである。とりわけミゼラブルは、その分岐点をどう進んでいくかでギャップが激しく、選択如何ではっきりと天国と地獄に振り分けられる。それゆえ、我々はできるだけ神意に則った人生を送らなければならない。苦難を耐え抜いた先に、必ず花開くものが示されるであろう。あなたの苦難のスパイラルを、この思し召し信仰によって杭止めることができたらず願う次第である。

このように、思し召し信仰とは、わたしの苦難の人生や個人的体験から導き出されたものであるが、過去の一部の賢者たちも同様の境地に至っている。また、中国の故事に「塞翁が馬」というものがあり、ある老人が次々に訪れる不幸に際しても、何か良いことに繋がっているだろうと達観していたということである。同様の思惟方法である。

キルケゴールがわたしとほぼ同様の信仰に至っている。

「重い苦難が役に立つものであるということ、このことは、信じられるより外ないことであって、見て確かめられることではない。あとから振り返ってみて、それが役に立つものであった事態を或いは見ることができるかもしれないが、苦難の最中にそれを見ることはできないし、またどれほど多くの人がどれほど心をこめて当人の耳にこれを繰り返して告げたところで、耳に入ることではない。それは信じる外ないことなのだ。」

「もし苦難のなかにいる者が、この苦難は自分にとって役に立つものである、とそう信じるとすれば、もちろん彼は山を移すのである。く苦難のもとにありながら信じて耐え抜くこと、これは自分にとって役立つものだと思わずに信仰、これが山を持ち上げ、山を移すのだ。」

「これを軽い荷として負う者、その者こそキリスト者なのだ！」

「忘れてはならないのは、きみの過去が赦されているということだ。赦しを心に刻んで忘れないこと。これはやはり軽い荷ということになるのではなからうか。」

「苦難の思想、苦難の喜ばしい使信をしかと受け止め、苦難がわが身のためになることに気づいて、これに耐え抜き、これこそが幸いに到るほんとうの知恵であることを信じて、これを選び取ることに、このために人間が必要とするのは神の導きである。」

「苦難の学舎は永遠にふさわしくある者へと人間を鍛え上げるものである。」

「神の前にそれこそ咎なくして苦しみを受けるのであれば、それは神から敵対的態度をとられているかに見える事態であり、神から見棄てられているのである。くだれであれ、その心のうちに神に責めを着せる、あの暗くて陰うつな思いをいだいている人間は、絶望しているのである。咎の意識の助けにより、神が愛であることを疑うことは不可能になり、神が愛であることが永遠に確かなこととなる。」

「悔い改めた強盗のほうは、心を碎かれながら、しかしどこかで救いらしいものに触れている思いで、この自分をお見捨てになったのは神のほうではなく、自分こそ神を見捨てたのだ、ということをお得する。」

「患難が道であるならば、その途上に患難があることは、道を間違えたことの証拠にならないどころか、彼が正しい道を歩いていることの何よりの証拠なのだ。く患難が道であるからには、患難だけが除去されて道が残るということはありえない。」

「殉教者は神と語りながら、このような苦難を受けるに足る者と見なされたことを感謝しているのである。十字架につけられる恵みを感謝するのだ。」

このように、キルケゴールは苦難を甘受するゆるしと悦びの観念である。

『スツタニパータ』でブツダは同様の逆説的な発言をしている。

「他の人々が「安楽」であると称するものを、もろもろの聖者は「苦しみ」であると言う。他の人々が「苦しみ」であると称するものを、もろもろの聖者は「安楽」であると知る。解しがたき真理を見よ。無智なる人々はここに迷っている。」

プロテスタントの創始者、マルティン・ルターはいう。

「キリストもまた同じ経験を、いやそれ以上に苦しい経験をなされたことを心にとめなさい。しかし、キリストを攻めたてていたように見えた神さまは決してキリストを見捨てられませんでした。反対に彼を引き上げ、栄誉を与えてくださったのです。同じように神さまは私たちをも引き上げてくださるでしょう。」

「あなた方は泣き、悲しんでいるが、あなた方の悲しみは喜びに変わる。その喜びをあなた方から奪い去る者はいない」と。これが神さまの約束であり、必ず守ってくださいます。この世における不幸は私たちの魂を傷つけることはできないのです。」

ユゴーは苦境のマリユスについてこういう。

「この試練をくぐりぬけると、弱者は卑劣になり、強者は崇高になる。く高邁な人間には、不幸は上等の母乳となるのである。人類をじっと見つめるから魂が見え、森羅万象をじっと見つめるから神が見える。く彼は苦しむ人間の利己主義から、瞑想する人間の惻隱の情に移っていく。心中に感嘆すべき感情が花開く。すなわち自己忘却と万人への憐憫の情である。」

ローマの哲人セネカも同様のことを述べている。

「神は善き者を甘やかしはしない。試練にかけ、鞏固にする。自身のために彼を調べているのだ。「なぜ多くの逆境が善き人生じるのですか」く善き者は、何であれ起きることの意義に思いを馳せ、それを善に変える。く君には不思議なのか。あの、善き者たちを深く愛する神が、彼らができるかぎり善くなり、いつそう卓越した者になることを望む神が、彼らに運命をあてがって、それによって鍛えさせるということが。く神は、できるかぎり高貴になることを神みずから欲する者たちに、何か大膽かつ勇敢に果たすための素材を与えるたびに、まさに彼ら自身のことを慮っているのだ。君たちにぜひお願いする。不滅の神々が、君たちの精神に対して、いわば鞭をふるうことを決して恐れないように。艱難こそ徳の機会である。神は、よしと認める者、愛する者を、頑丈にし、監督し、鍛える。く神が善き者たちに対してとっている方針は、教師が自分の生徒に対する場合と同じく、見込みが確かな者に多くの労苦を課すというものだ。くお前たちの幸せは、幸せが要らないことだ。く」

「打たれないものより打ち負かされないものこそ、より確かな力であることに、どんな疑いがありえよう。」

眩暈がするほどの名文である。このセネカという人の言葉には現実には人を変える力がある。

さらに、旧約聖書のソロモンの箴言である。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

パウロはヘブライ人への手紙でこう書いている。

「霊の父はわたしたちの益となるように、ご自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。」

どうも西洋の賢者たちは同じような信念に至るようである。要は不幸でも納得できればよいのである。

わたしが思し召し信仰に到達したのは、幸福を願いながらも不本意に苦難に遭ってきて悟ったものであるから、ある意味、怪我の功名である。誰もむざむざ自分から進んで苦難に遭いにゆく者はいない。それゆえ、自惚れてなどいない。

多少意味合いは違うが、ニーチェの力強い言葉を引こう。彼くらいの超然とした気概がなければならぬ。

「過去に存在したものを救済し、いっさいの『そうであった』を『わたしはそう欲したのだ』に造り変えること―これこそはじめて救済の名にあたいしよう。いっさいの『かつてそうであった』は、一つの断片であり、謎であり、残酷な偶然であるに

すぎない。―だが、創造する意志は、ついにそれにたいして、「しかしわたしはそれがそうであったことを欲したのだ」と言うのだ。―創造する意志は、ついにそれにたいして、「しかしわたくしはそれがそうであったことを、今も欲しており、これからも欲するだろう」と言うのだ。」

常に苦難や運命に対して、毅然と抗う気概を持っておきたいものである。

以上のように、受難の賢者たちは同様の信念に至っているのである。聖者たちの人生はゲームというならば、難易度はベリーハードかエクストリームにほかならない。

そもそも、生育環境というものは何にも増して重要である。天皇に生まれてもスラム街で育ったら天皇にはなれないし、宮廷で育っても障害児に生まれてきたら天皇にはなれない。そこには厳然たる宿命がある。アリストテレスはこう述べている。

「もろもろの状態（ヘクシス）は、それに類似的な活動（エネルギー）から生ずる。年少の時からある仕方に習慣づけられるか、他の仕方に習慣づけられるかということの差異は、僅少ではなく絶大であり、むしろそれがすべてである。」

しかし、それをしつらえるのは、神ないしは運命なのである。我々は自らに与えられた分だけのカードで戦わなければならないのである。

よく「神様は乗り越えられない試練を与えはしない」などと言われるが、さすがに限度というものがあるものである。我々は時として自らの手に余る苦難に出くわすことがある。そのときの状況では、能力的、年齢的、環境的に乗り越えることが不可能な試練がやってくるときもある。たとえば、いまだ未熟な子供には到底耐えられない苦難が降りかかってくることもある。そういったときは、どうか周りの人々が支えてあげてほしい。またそうした思いやりのある社会になってほしい。あなたがもしこの教えて強くなれたなら、どうかそちらの側に回ってほしい。そうした助けが得られず、また助けを求められずに無念な思いで死んでいく人々もいるのだから。小鳥の神は守護神であるが、そのように余裕のある者は、苦しみや絶望にある人を守るように心がけるべきである。それもまた神があなたを必要とされているという思し召しなのだから。

ヘラクレイトスは、「我々は二度と同じ川に入ることができない」と言った。これは、一見すると河川がある場所は変わらなくても、足元を流れる水は常に新しいものになっているからである。また「万物流転」と言ったことはよく知られているが、その万物が流転するという真理は流転せず永遠のものである。これから見えてくるものは、我々の運命という川が時に奔流や洪水になったとしても、神の御言葉という真理を筏にし、また中洲としてそこへ逃れていく、逃れると言ったら消極的かもしれないから言い換えるなら、活路を見出していくということである。五鳥神話においては、それを「高洲」というべきであろう。「川の流れのように」や「時の流れに身を任せ」という有名な歌があるが、盲目的に人の意見や社会の流行、運命などに流されていけば、いつしか清浄な心を失ってしまい軽薄で愚かな人間となってしまうであろう。人に考えてもらって世間の常識で生きていくことは容易い。けれども、いったん自分の頭でものを考え出すと新しい道が開けてくる。ただ自分で考えるということは苦勞

の多いことではある。しかし、人に流されてオートマタのように生きていくことは幸福ではない。また、本能のままに生きていくことも然りである。そこには必ず悪魔が罫を仕掛けているであろう。それゆえ、濁流にも動じず、波に打ち付けられても微動だにしない巖のように自身を鍛え、また戒めていかねばならない。それこそが、神の思し召しに則って生きるということにほかならないのだから。

パウロ「いったいあなたの持っているもので、いまだかなかったものがあるでしょうか。」

後述することであるが、この思し召し信仰と後に述べる五鳥神学は軌を一にするものである。少し触れておくならば、宇宙の一生とはそのまま神の一生であり、神の一生と我々衆生の一生ないしは人生の転変は同様のものであるということである。というのは、この世界は循環しかつ終焉が来るようになっていくからである。そして、この思し召しの觀念の通り、いずれすべての不幸や悪は一掃されるときが来る。それは上で哲学者が述べたように、わたしたち人間の自由意志にかかっているものであり、神はわたしたちがロボットやオートマタのように唯々諾々のご自身に従うのではなく、自由意志で善を選択することをことのほか喜ばれるのである。それによって、わたしたちの大小の苦しみもやがて幸せに変わるが、それはわたしたちの過去生が救われたと同義であり、同時に五色の鳥である神も不死鳥のごとく莊嚴によみがえる。それゆえ、この現世での人生についてもだが、死後の世界さえ、あるいは魂の行方や来世についても希望を持って生きていけるのである。神や世界の存在も、我々すべての衆生の存在も不死であり不滅である。のちに論ずるが、我々は本来すべからく「無敵の人」である。すなわち当五鳥教は、過去・現在・未来を救う教えなのであり、祈りの挨拶で誓った真理にほかならない。我々はすでに至福のうちにあるのである。

五鳥教の核心部分は、次の五鳥大明神の臨終における御誓願である。

「わたしの名は五鳥ごからすといい、東城国において十二代の帝みかどに仕え、数万年の齡よわいを保っている。今際の時までも老病衰というものを知らなかったけれども、盛者必衰じょうしゃひつすいの始めあるものは必ず終わりあり、という世界の掟は逃れることができない。しかし、わたしの魂は中有ちゆううに留まり、あなたがたの命根長養みょうこんちやうようの守護神となろう。わたしの姿が青黄赤白黒と五つの色を現すことは、すなわち五智如来ごちによらいであり、五行ごぎようであり、五臓を守るというわたしの神性の表れである。人間はもちろん、すべての生きとし生けるもので、もろもろの病氣わずらいを癒やして、あなたがたの五臓安寧ごぞうあんねいの守護神となろう。」

「神の死」、これこそが究極的な思し召しである。神の死という未曾有の悲劇があつてこそ、我々すべての衆生の救済が約束されているのであるから。そのことは、神ご自身が病に倒れられ死なれることで、身をもって示しておられる。しかし、それは決して絶望ではない。ニヒリズムやペシミズムでもない。神は自らの臨終に、我々の守護神となるという御誓願を遺されたからである。この御誓願を固く信じること、つまり病苦の中にあつても希望を持つことこそが、すなわち病が治るということであり救われるということなのである。神はその臨終において、病苦やあらゆる苦難にある者に希望を遺されたのである。この尊い御誓願を固く信じてよりどころとすること、五色の光に満たされるということが、とりもなおさず小鳥の救いにほかならない。

御誓願が果たされるといふことは、たとえ病苦にあつても死の淵にあつても、この神の尊きお誓ひ故に希望を持つことができるといふことにほかならない。絶望ではなく希望を。それが本当に魂の病が治るといふことである。苦痛を覚えても、その苦痛が取れるまで、希望を持って耐え忍ぶこと。たとえ心砕かれても、それこそ小鳥の山に生い茂っている竹のように、風に倒されても小鳥の御誓願ゆえに再び立ち上がっていく。それこそが神の思し召しに沿って生きるということである。病や死さえも無意味ではない。必ず何か肯定的な意味があるという思し召しを受け取ることである。すなわち、病が治るとは希望を持つことができるといふことにほかならない。神のお誓ひゆえに。幾度も絶望の淵に身を投げてきたわたしが言うのだから信じてほしい。そして最終的には、現実としてフィジカルもメンタルも癒やされること、それが神の死という深い思し召しなのである。

つまり、病気が治る⇨御誓願を信じること、である。思し召し信仰とは、この神の御誓願を中核にしたものであり、それは五鳥教の根幹である。神は臨終に、我々に希望という光を遺されたのである。

『ハイジ』で医者がハイジに尋ねる。

「だが、その悲しいことつらいことが、もともと神さまのおぼしめしなんだったら、いったいどうお話しすりゃいい？」

ハイジは答える。

「そんなら、待つよ。こう思っていればいいの。ー神さまはちゃんご承知で、あとからいいことをしてくださるおつもりなんだった。ただしばらくじつとがまんして、逃げずにいなければね。そしたらきつと、何もかもいっぺんによくなって、やっぱり神さまがずっとあたしたちのためを思っていてくださったことがわかるようになってよ。」

さらに、おばあさんに読み聞かせていた詩をハイジがいう。

「み心のままにゆだねよう　すべてを知るそのかたに　みわざははかりしられず　おどろくこともあろう　ときにはやむをえず　深いおぼしめしから　きびしいころみに　あわせたもうこともある

しかもなぐさめとて　しばしばさずけたまわず　もはやうち捨てられ　かえりみられぬものと　苦しみなやみに　胸はおののくばかり

されどつねにおそれず　みもとにとどまれ　思いもよらぬときに　すくいはおとずれ　心はつらい重荷から　ときはなたれるだろう　このうえない耐えがたい　その重荷から」

苦難に遭つてもいざれ必ず幸が訪れる。なぜなら、我々の過去の災いは福に変わっているからである。たとえば、厳しい冬を耐え抜いて春先に草花が芽を吹くように。啓蟄に虫たちが這い出てくるように。そのように、我々の苦しみはいざれ喜びに変わる。それゆえ、苦難に見舞われても忍耐して希望を持つことができる。

わたしが見た神の目は、厳しいものであると同時に、優しいまなざしをしていた。

「小鳥の 神の試み おぼしめし 我ら従う 神のまにまに」

第二章 神の領き信仰

ユゴー「人間社会はその外部にいる者には恐るべきものであり、その下にいる者には凄まじいものなのである。」

ルター「孤独とうつ状態はすべての人間にとって、特に若い人にとって毒であり、きわめて有害なのです。」

スヌーピー「ほんとのところ、きみはすごく必要とされてる。」

孤独にある人よ、聞いてほしい。あなたは決して独りではない。小鳥の神はいつもあなたのそばにいて、訴えに耳を傾け、うんうんと頷き、守ってくださいっている。これはわたしの妄想ではない。五鳥経において、小鳥の神が「わたしは死んでもあなたがたの守護神となる」と誓願されているからである。無常なる人間が誓っているのではない。常住なる神様が誓われているのである。それゆえ、その言葉は永遠不朽であり、よりどころとするに値するものである。それだけではない。宮島の女神様も衆生済度の大願をすでに成就されているのである。小鳥の神を各々信ずる神仏にしてもいいし、死別した家族やパートナー、ペットなどにしてもいい。とにかくあなたは独りではなく、霊界から見守っている存在がいるという認識を持つことが大切である。普通に通に人とのつながり、他者とわかり合っていくこともたしかに大事なことではある。けれども、人間関係はいつも円滑にいくとは限らない。それぞれ価値観や思想は違うし、時には翻弄されたり争いになることもある。そこで、もし全くの孤独状態、誰からも必要とされず、人から裏切られたり社会から見捨てられたりしたとしても大丈夫なようにこの教えを説きたい。かくいう

わたし自身がそうであったのだから。わたしは一人暮らしをしているが、加えて仕事にもつけず非常に淋しい思いをしていた。社会から分断され、まさに昨今増えている孤独死寸前であった。抑うつ状態で本当に体が動かなくなるのである。そこで支えになつたのは、生来の小鳥の神への信仰であった。自分で描いた小鳥の神々の絵に向かって祈るといふより呻いていた。義理人情というものが廃れて久しい。周りの人間は意外と冷たく残酷なものである。恥を忍んで助けを求めても、あまり助けてはくれなかつた。わたしはひとり呻吟していたのである。

わたしは神に祈るといふような綺麗なことはしていない。というよりできなかったといふのが正直なところである。それはこのような場合、つぶやき、うめき、叫びといったようなものになる。神にはありのままの自分をさらけ出せる。綺麗な祈りでなくてよいのである。このような極限まで追い詰められた状態に置かれて、信仰のない人はとても自分を支えきれないと考えられる。だから信仰を持つことを勧めるし、信仰は不可避であると痛感したのである。孤独にある人、自殺を考えている人、すべての絶望している人に信仰を持ってほしい。神はあなたを必要としているから命を与えられている。諸行無常であり、地上のものは脆く、よりどころにするには頼りないものである。天上の揺るがぬ存在をよりどころにしてほしい。

カントはこう言っている。

「感覚器官によって感知できないものの存在は知ることができない。神の存在を確信することは絶対に必要だが、必ずしも証明しなればならないわけではない。」

我々は五感しか持っていない。けれども、もし五感以外の感覚器官があれば、感知できる存在がいるかもしれないのである。たとえば、犬の嗅覚は人の何倍も優れているのは周知の事実であるし、コウモリの聴覚もまたそうであるという。また、アフリカ人の視力は、我々先進国の人間よりも遙か遠くを視ることができるといふ。そのように、我々の常識を一度疑ってみなければならぬ。巷ではスピリチュアルという言葉が定着しているが、半分侮蔑の意味合いで使われている。しかし、人間には能力に各々差異があるのであるから、霊的な能力に優れた人たちがいても全くおかしくはない。わたしにはそのような特殊能力はないが、一概にそういった事柄を否定はできないと考える。その領域を太古より我々は信仰してきたのであるから。また、わたしも人々に共感し、苦楽を分かち合いたいと思うが、所詮ただの人間であって、許容するのにどうしても限界がある。しかし、神には限界がない。いわゆるキャパが大きく、許容量は無限である。大いに愚痴を吐いたらいい。すべて受け止めてくださる。

前述の神の御誓願のリフレインである。

「わたしの名は五鳥ごからすといい、東城国において十二代の帝みかどに仕え、数万年の齡よわいを保っている。今際の時までも老病衰というものを知らなかったけれども、盛者必衰じょうしゃひつすいの始めあるものは必ず終わりあり、という世界の掟は逃れることができない。しかし、わたしの魂は中有ちゆううに留まり、あなたがたの命根長養みょうこんちやうようの守護神となろう。わたしの姿が青黄赤白黒と五つの色を現すことは、すなわち

五智如来ごちによらいであり、五行ごぎょうであり、五臓を守るといわたしの神性の表れである。人間はもちろん、すべての生きとし生けるもので、もろもろの病気わずらいを癒やして、あなたがたの五臓ごぞう安寧あんねいの守護神となろう。」

以上が五鳥大明神のご遺言である。この小鳥の神の御誓願が五鳥教の根幹である。わたしたちは、この御誓願を固く信じてよりどころにしなければならぬ。絶望にある人よ、どうかこの尊き御誓願に一縷の望みを託してよみがえってほしい。五鳥教の中核は、神の臨終の御誓願を固く信じていることである。すなわち、万病を癒す守護神となるといってお誓いを。体にしても心にしても、病に苦しむ者のための教えなのである。小鳥の神は、神でありながら病に倒れられ死なれた。「神の死」という究極的な思し召し、それは小鳥の神は病や苦難にある者と共にあるという神の深いお考えによるものである。それは、神があえて天界には昇らず、中有という現象界に近い世界に留まることを選択されたことに如実に示されている。神は苦しむ者と共にある守護神、我々と共に苦しんでくださるお方なのである。なるほど、病気は簡単には治らないかもしれぬ。けれども、治るまでそつとそばにいてくださるお方、それが小鳥の神である。また、病苦にある者は「神の似姿」を現している。病のうちにこそ、神は近くにおられる。これが我々の守護神になるとお誓いになられた神の尊い御心である。すなわち、小鳥の救いとは神の臨在、神がいっつもどんな時もそばにいてくださるということにほかならない。神の眼差しによってのみ立つことができるようになるように。この小鳥の光に満たされることが救いなのである。

「悲しいかな、最大の試練、いや、もっと適切に言えば、唯一の試練とは、愛する者をうしなうことなのである。」

こうユゴーは嘆息している。

大切な者を喪失した人よ、聞いてほしい。あなたは置き去りにされたわけではない。五鳥神話において、厳島大明神が五鳥大明神を亡くされたことを覚えておいてほしい。五鳥大明神は女神様に先立つにあたって、ご自身の魂はあえて天界には昇らず、中有に留まって、我々の守護神となると誓われている。中有とは現世に近い霊界のことである。そこから厳島大明神を守護されているし、我々すべての衆生に向けての御言葉でもある。厳島大明神は死に際して「御歎き浅からず」であったが、中有界からご自分が守られているという安心感があったからこそ、その後も過度に落ち込むことなく衆生済度の道を邁進できたのである。ちなみに、現在の宮島・厳島神社の入り口の灯籠の上には、一羽のクラスがとまっている。とりもなおさず五鳥大明神の御心を反映したものである。したがって、死別や離別、親ロスや子ロス、パートナーロスやペットロス、たとえ大切なものを喪失しても、過度に嘆く必要はない。その者たちはあなたのすぐそばでずっと見守っているのであるから。むろん、そのときはあまりの衝撃と悲しみに耐えられないであろう。わたしもそうであった。うつ状態になり、体もまともに動かなくなった。まさに生ける屍と化していた。けれども、それも思し召しであって、同じような悲しみにある人の気持ちができるようになるし、信仰にも目覚める可能性もある。最初は大いに嘆き悲しみ、悲しみ尽くせばいいが、大事なのはいつまでも感情に飲み込まれすぎないことである。喪失の苦しみは完全には癒えることはない。しかし、悲しみを抱えつつもいつか大丈夫になるときが来る。

死と喪失とは、世界最古の書である『ギルガメシュ叙事詩』がすでに物語るごとく、人類の大きなテーマかつ問題である。わたしは現在、岩国市という街に住んでいるが、これは岩の上に国を打ち立てろということであると受け止めている。それは新約聖書のキリストの言葉、砂の上に家を建てるな、岩の上に家を建てよという喩え話からきている。意味するところは、地上の儚い朽ちゆく存在ではなく、天上の常住で永遠の存在をよりどころとせよということである。

わたしは霊夢、霊的な夢を見ることが多く、つい最近も夭折した同級生が夢に出てきて、わたしにレンゲの花束を渡しに来てくれた。その子とも霊界と現世にまたがってつながっている。我が子を失ったご両親の悲しみは筆舌に尽くしがたいものがあったと思われる。実際に神ご自身が出てこられたこともある。大鴉となって太陽が燦々と照り輝く青空を優雅に舞い、わたしの肩にとまってこられた。また以前も書いたが、啓示と呼びうる夢も観た。それは子供の頃から何度も見てきた夢で、三十歳を超えて再び観たものであり、全く同じ内容である。すなわち、小鳥神社の井戸がある小道から上に登ると、実際にはない高い山が続いてゆき、青く澄んだ空のもと、アルプスのような美しい山を登っていく。頂上には大きくて長い階段が杉のような大木の林に囲まれて続いており、登り切ったところには大きな門がある。門の向こうには靄が立ち込めていて、奥は光り輝いている。そこに入ったらいつも目が覚める、というものである。おそらく、わたしの死後はこの道のりを歩いて、天界に登って行くと考えられる。そして、この天の門の向こうで神の御前に立たされるのである。思うに、この夢ないしヴィジョンは、わたしがかつて生で見てきた光景と考えられ、プラトンのいう想起（アナムネーシス）、すなわち再び思い出したに過ぎないものである。他にも、小鳥にまつわる霊的な夢を何種類も観ていて、自分自身でも驚いている。わたしは長らく哲学を志し、靈感や霊性などは

無縁だと思っていたが、そういった世界もあるのだと実感している。現世うつしよのものばかりにとらわれず、幽世かくりよのものにも目を向け
るべきである。

わたしは儚く夭折した者たちに美を感じず。うたかたの生、しかしそれは生前が美しくなければならぬ。歌手の坂井泉水、
プロレスラーのハヤブサ、山口の金子みすゞや中原中也、女哲学者の池田晶子も含まれるであろうか。そしてこの同級生と飼っ
ていたオカメインコである。そして何よりも小鳥の神ご自身である。彼らを通して「美そのもの」に至ることができると考えて
いる。

春日大社宮司・葉室頼昭はいう。

「この世の中は、あの世におられるご祖先の人びとの生活とつながっているんだよ。だから、あの世にいらっしゃるご祖先がし
あわせにならなければ、この世はしあわせにならないんだよ。」

「日本人は古来から祖先の、夜見の国での幸せがあつてはじめて現世の我々の幸せが存在すると考えておりました。それゆえ、
この世を夜見の国の現世（うつしよ）と言ったのです。死者の幸せを願わずして、どうして現世の幸せがあるでしょうか。」

「往生できなかつたらどうなるかというところをさまよう。さまよっていると苦しい。それで、あの世ではなくてこの世に助けを求めてくるのではないか。そうするとこの世にいる人は、いろいろと不幸な目にあう。私はそういうことだと思います。」

現代人には迷信と感じられるかもしれないが、長い間祖先たちが信じてきたものを、決して賢くなどってはいない我々が簡単に捨ててもよいものであろうか。これは仏教でいえば「頭幽一如」ということであり、あの世にいる者たちを想って供養しなければ、この世にいる我々の幸せもないということである。霊界に想いを馳せるとき、大事なものは神仏や他界した者の御心を推しはかるということである。それは決して独善的な邪なものとはならないであろう。必ず自らの良心に即したものとなるであろうから。

小烏神社の麓にお地藏様があるのだが、そこに毎日通ってお世話していたおばあさんがいた。お地藏様におぶく（ご飯）をおあがんなさいませ（召し上がれ）と供養されていた。すでに他界されているが、とても幸せそうにしていたことを覚えている。体が衰えているため小烏神社には登られないが、下から深々とお辞儀をされている敬虔な姿を覚えている。わたしのような銜学的な人間よりも、よほど神仏に近く気に入られていたお方であったと思う。世の中、女性の方が篤信家が多いように感じる。男性はどうしても社会的圧力から逃れられない。「鰯の頭も信心から」という。人からどう思われようが、自分自身がそれを信じることで救われているのならそれでよいのである。

本章では、マズローの欲求段階のうち、下層二つは政治の範疇であるが、上層二つ、愛情欲求と承認欲求を地上のものによらず、信仰によって満たすことを目指すものである。ユゴーはいう。虐げられた者は愛情と尊敬に飢えている、と。これは主人公ジャン・ヴァルジャンが出所して、社会から爪弾きにされているうちに慈悲深いミリエル司教と出会い、歓待を受けたときのユゴーの一言である。

「司教がそのあなたという言葉を、優しい重みのある、いかにも上品な声で言うたびごとに、男の顔は輝いた。囚人に対して言われるあなたという言葉は、メデュース号の難破者に対する一ぱいの水のごときのものである。はずかしめらるる者は他人の尊敬に飢えている。」

またユゴーはこういう。

「愛するということは、ほとんど、信じることである。」

わたしたちは神を「信じる」というが、むしろ神がわたしたちを信じてくださっているのである。なぜなら、神は衆生を愛されているから、当然わたしたちを信じておられることは疑い得ないからである。だから、あなたは神に愛されて信じられているのである。我々凡夫は、信じるから愛されるべきだと考える。しかし神は、無条件に愛されるから我々が時に神に違背しても赦されるのである。したがって、たとえ人や社会に必要とされなくても、神という聖なる存在に信頼され、必要とされているから嘆くことはない。それは、本章の冒頭で引いたスヌーピーの言葉で示したとおりである。

古代ローマの神学者・アウグスティヌスは、人の心には大きな空洞がぽっかり空いていて、それは究極的には神によってしか埋めることができないと述べている。わたしは彼のようになりべラルアーツを修めたエリートではない。むしろアウトローでありドロップアウト者である。ただ、図書館の世界史の本で初めて彼のことを知ってから、ずっと共鳴するものがあつた。わたしにも心の空洞を埋めた日があつた。それは願って与えられるものではなく、ふと訪れるものであつた。小鳥神社にはコミュニティがない。信奉会というものが一応あるが、みな信仰というより当番が回ってきたからやるというような行事やしきたりのようなものである。それゆえ、わたしの信仰は孤独なものであつた。独身ならぬ独信である。仏教では法友というが、信仰を分かち合える仲間がないというのは淋しいものである。そこで考えたが、たとえお寺や教会に行っても、ご本尊が違ふし結局人に依存している。逆に小鳥の信仰者を見出したとしても、その人に依存していたらそれは信仰ではない。愛情欲求、もしくは自己愛を信仰によって満たすことが急務であつた。

小鳥の神が守護神になるとお誓いになられている。神が誓っているのだ。だから尊いのである。ただの人間が誓つたのではない。それを信ぜずしてどうする。神から愛されているということは五感では認識できない。ただ神の御言葉と霊的に独りではないと信じるのだ。小鳥の神の魂は中有に留まって、わたしをずっと見守っている。いや常にそばにおられる。たとえ小鳥のもとで暮らしていなくても、日本中・世界中どこにでもおられる。刑務所や閉鎖病棟にもおられる。なぜなら、神は我々の内奥に宿っておられるからである。このようにわたしは自分自身に言い聞かせた。

わたしは今まで心の穴を有象無象、魑魅魍魎で埋めてきた。わたしの最大の心の病は、実に人に依存する性格であった。それこそ偶像崇拜である。その難病はまさに医療神である小鳥の神が治した。長年の病を神が御誓願通り除かれた。ある意味、飾り物であった信仰が、ようやく真の信仰となったのである。本当の孤独に耐えられる者は最強である。よりどころをしつかりと神とし、心を聖なるもので満たさなければならない。移り変わる人の心ではなく、神仏の永遠の御心をよりどころとしなければならない。犀の角のように、ただ独り歩め。

「法に依るべし。人に依るべからず。」

法然が好んだという『ダンマパダ（法句経）』の言葉である。それをわたしはこう言い換える。

「人に依ることなかれ。神に依れ。」

けれども、心の清らかな人々との交流はたしかに救いになる。その場合の注意点を述べておきたい。

『ブツダの瞑想法』から引く。

「く克服の六番目は、善いものに触れることです。く最も強力なのは、法友です。自分よりも優れた、半ば師であるような友、常にこちらのためになり、成長することを心から考えてくれる友、高貴な友、師友、ダンマフレンドです。心のきれいな徳のある人にまみえることは、強力にこちらの心が聖なる方向に引き上げられます。」

また、『アリストテレスの人生相談』から引く。

「「持つべきものは友である」く劣悪な人々のあいだの友愛は、劣悪なことを共にすることにより、お互いが似てきてしまい、互いに邪悪になります。これに対し品位ある人たちの友愛は高尚であり、交わりとともに友愛が深くなり、お互いに感化し矯正し合うことによって、どちらも、より優れた人に成長します。ですから、自分自身が善くなるためには、善き友を持つことが必要です。」

「アリストテレスは、仏陀とは異なって、一人で歩めとはいわず、「幸福になろうと思うならば優れた友を持つべきだ」としています。」

『十訓抄』から引く。

「ある人が言うには、「人は良き友と出会うことを、心より願うべきである。」「まっすぐ生える麻の中に育つ蓬は、矯めなくとも、自然とまっすぐ成長する」という喩えがある。蓬という草は伸び方はまっすぐではないが、麻の間に混じって生えている

と、曲って伸びる余地がないゆえ、不本意ながらも、正しくきちんとしていくのである。心のねじけた人であっても、正しくきちんとしている人の中に交じっていると、そうはいつでもやはりあれこれと気遣うことが多くなり、自然と正しくなるものである。」

『自殺の哲学』からも引く。

「釈迦は「アーナンダよ、そうではない。善き友をもつこと、善き仲間のいること、善き人々に取りまかれていることは、清浄の全体である」と答えます。」

「あなたが追いつめられているのは、そのような情動影響力を持っている人が周りに誰もいないことに原因があります。皆、世間で流布している考えかたを押しつけてきているだけなのです。あなたのところに感動を介してアプローチする人がいないことが、あなたの孤独感のすべてです。」

「弱い人間が自殺するのではなく、悩みや苦しみを周囲と分かち合えない人間が自殺するのです。弱さや苦悩を分かち合えない家庭や社会の文化を変える必要があります。」

「現代がテロの時代であるのは、世界を捨て切ってしまった人間の怖さに気づかない人々によってもたらされています。」

これは「論破王」ひろゆきのいう「無敵の人」のことである。

どうしても善き友が見つからない場合は、あなたはそれを霊界に求めてほしい。かくいうわたしもその一人であるから。善き友を持つことは、いわば椅子取りゲームであり、善き人にはすでにふさわしい善き友、善き夫や妻がいるものである。そのゲームにわたしは負けただけだ。しかし、かといってどんな椅子でもよいわけではない。汚い椅子に座るくらいなら、むしろそのまま突っ立っていた方がよい。汚い椅子とは、心の醜い、魂の汚れた者どもである。そのような者どもと交わるくらいなら孤独の方がよい。わたしは散々汚されてきたが、幸い心の清浄さは保っている。もしあなたに善き人が現れないなら、霊界の美しい存在を見てほしい。善友争奪戦、椅子取りゲームに敗れた者は、そこに救いを求めるしかないのである。小鳥の伝説が上品なものであり、それをアイデンティティにしているからか、わたしには下品な連中が耐えられない。

「弱きを助け、強きを挫く」というが、挫くべきは悪しき強き者であって、善き強き者は挫かなくともよい。また、助けるべきは善き弱き者であって、悪しき弱き者は助けなくともよい。ウルトラマンは倒さなくてもいいし、助けるべきはピグモンである。ゼットンには倒さなければならないが、カネゴンはどうであろうか、やはり助けるべきであろうか。ここでいう善悪とは、心の清濁のことである。本書の内容も、心の歪んだ者たちには届くことはないであろう。社会の下層で恨みや妬み、呪いの言葉ばかり吐いている者どもの世界にいるわたしの経験上そう思う次第である。この道義心が廃れた神なき時代、社会の上層、ミゼラブルの対義語「殿上人」の世界もさほど変わらないであろう。むしろそういった余裕のある成功者たちでさえ、道端に倒れている人をも助けられない時代となった。けれども、そういった性根の捻じ曲がった者にも、それなりの理由があるわけであって、最終的にはすべてを透徹した神が公平に裁きを下される。神がすべての業を是正カルマされるときが来る。我々はそれに備えて、できるだ

け身を清めて、愚かな生き方を変え、魂を浄化して慎みを持って生涯を終えねばならない。わたしはたまに、己や世界の業縁のようなものが見えるときがある。抗いがたい何事かが存在しているように感ずる。現代社会を共有する我々のつながりも含めてだが、善きも悪しきも祖先や前世から引き継いだものが、現世に生きる我々衆生の世界で複雑に絡み合って現れているように思える。恐ろしくもあるが、何か仕方ないことを悟ったようにも感じられる。

葉室頼昭はこう言っている。

「神のお恵みはみんな平等にいただいている。でも、ある人は不幸になり、ある人は幸せになる。なぜか、感謝ですよ。神の波動は感謝しなければお恵みとなって出てこないんです。」

また「素白の心」としてこういう。

「く心で乱反射すると我欲のものが見えてきますが、無我になって理屈を言わないで全感謝すると神さまが現れてこられるのです。」

感謝と懺悔は宗教の基本であり本質である。懺悔して赦されていることに感謝するのであり、こんな自分でも赦されるという感謝の心から懺悔するのである。こう書いてはいるが、実のところ自己正当化や虚栄心を拭い去れていない自分がある。よくよく内省して戒めるべきである。

若い頃、錦帯橋のあるお寺でお坊さんを訪ねたことがあったが、何か一言お願いしますと頼んだ。そうしたらその方は、「それは感謝することです」とお答えになられたのをはつきり覚えている。

親鸞がいうように、ひとたび信心を得たならば、すでに救済は決定しているのである。これはカルヴァンの予定調和説と類似するものである。個人が救われる如何は、神の恩寵によって決められているのである。

ところで、わたしはかつて、プロテスタントの教会で聖書の学び研究会に通っているときに、恩師の牧師より大切な教えを伝えられた。自分で聖書を読むだけではわからなかった、キリストが十字架にかかった深淵な理由を聞いた。牧師によると、キリストが十字架にかかったのは、人類の罪を赦すためだけではなく、最も苦しんでいる者たちと共にあるためである、ということである。というのは、キリストが十字架上で死の間際に、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」、すなわち「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と絶叫されているのは、神も仏もないと思うくらいの大きな苦しみを受けている人たちの気持ちを知らるために、神でありながら自らの身を人間にまで低められてなされていることだからである。これこそわたしの最も問題とすることであった。わたしは神も仏もない、神なんかそくらえと、まさにキリストのように何度も絶叫してきたからである。これは究極の自己犠牲であり、最も強力な弁神論と考えられる。この話を聞いて、ひきこもり時代の阿鼻叫喚で信仰を失ったわたしの壮絶な苦しみは癒やされた。神はわたしのことを十字架の上で思ってくださいている。むしろ神だからこそ苦しみ、大声で叫ばれているのである。神の叫びとわたしの叫びは一致している。神は常にわたしと共にある。神はわたしのために叫ばれている。

ちなみに、キリストは十字架で絶叫されたが、小鳥の神も臨終に「苦声」をあげられている。それは単なる苦しみの叫びではなく、我らを想うがゆえの叫びなのである。これこそ、「インマヌエル（神は我と共にあり）」、あるいは「随縁即仏」と言わなければならない。

旧約聖書・イザヤ書から、まさしく小鳥の神の御心と一致する箇所を引く

「わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のはるかな所からあなたを呼び出して言った。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。」 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。見よ。あなたに向かっていきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いものようになって滅びる。あなたと言い争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまう。あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける」と言っているのだから。」

『ハイジ』のおばあさんという。

「よくきいてちょうだいよ。だれにもいえないような苦しいことのあるときは、天の神さまに申し上げて、助けてくださいって
おねがいするものよ。なぜって、神さまは、わたしたちのどんななやみごとでも、かならず助けてくださるんだからね。」

あなたに小鳥の神が御顔を向けて、こよなき平安を賜り、ご加護があることを祈る。

第三章 畏れ慎む信仰

ギリシアの農民詩人ヘシオドスは次のようにいう。

「悪しきことはいくらでも、しかもたやすく手に入る。それに通ずる道は平らかであり、しかもすぐ身近に住む。」

ナーガールジュナ（龍樹）は若気の至りの過ちで自戒する。

「欲は苦しみの本であり、もろもろの禍の根である。徳を傷つけ、身を危うくするということは、皆ここから起こるのである。」

『アーサー王の死』より。

アーサー「いったん後退したところで面目を失いはせん。勝ち目のない戦さに踏み止まる騎士は、愚かと言わねばならん。」

ランスロット「いいえ、いったん面目を失えば、もう取り返しはつきません。」

「落ちぶれて 袖に涙の かかるとき 人の心の 奥ぞ知らるる」 詠み人知らず

わたしは多くの罪を犯した。自然法においても人為法においても、戒律においても法律においてもである。ここでそのすべてを詳らかにするのはためられる。今のわたしは、アウグスティヌスが『告白』において自分の罪を赤裸々に公開しているよう

な心境には至れていない。かといって、莊子のような恥も外聞も捨て切った世捨て人のような境地にもない。しかし、各人のしたことというのは、ただ神と、ほかでもない自分自身が見ているのである。ともかく、わたしには大いに懺悔せねばならぬことがあり、それは平家物語において、平重衡や熊谷直実が己が罪を悔い、法然上人に泣きついたようなものである。彼らにとっての法然上人が、わたしにはとりもなおさず小鳥の神なのである。

バルジャンは自問自答する。

「天国にいて悪魔になるのか、それとも地獄に戻って天使になるのか。」

わたしを悩ませたのはここであった。良心とエゴイズムの狭間で懊悩し、ついに罪を犯した。

ユゴー「光の住人は、闇の住人にたいしても涙を流すのである。」

ルター「天国はそこに悪魔が支配するなら喜ぶことはできないし、地獄も神さまが支配するならば悲しくはないのです。」

わたしがいたのは、悪魔が支配する天国であったのか、神が支配する地獄であったのかはわからない。全く信じられないことだが、神の愛にサタンが罪を混ぜたのである。ダンテの『神曲』において、地獄の最下層でサタンに喰いちぎられている大罪人は、キリストを裏切ったイスカリオテのユダと、カエサルを裏切ったブルートゥースとカッシウスである。わたしはその光景が非常に印象的で、人間が犯す罪の中で最も重いものは、真実の愛を裏切ることだと認識していた。しかし、それが仇となったので

ある。わたしは神の申し子なので、天罰靦面であり速やかに罰が下る。時間の差異はあれど、誰でもゼウスの雷霆が落とされる
ときが来る。そうして魂の責苦に苛まれるときが来るのだ。

同郷の中原中也の「冷酷の歌」が印象深い。長いのですべては引かないが、誰でもこのようなときが来る。

「理由がどうであれ、人がなんと謂え、悲しみが自分であり、自分が悲しみとなつた時、

人は思ひだすだらう、その白けた面の上に 涙と微笑とを浮べながら、聖人たちの古い言葉を。」

しかしながら、天国^{エデン}にいる天使より、地獄^{ゲヘナ}にいる天使の方が美しい。

ここからわたしは多少厳しいことを述べるかもしれない。ここまでの三章で魂のトリプルケアを目指しているが、本章は若干
耳の痛いものになるかもしれない。けれども、あなたは自分自身に目を背けないでほしい。神仏は罪のある者も決して見捨ては
しないから。愚かにも神や自分自身さえも見捨てるのは、常に我々自身の方なのである。

五鳥教は清らかさ、純粹さ、清廉さを重んずる。心の汚れた人は神に救われることはない。わたしはあなたに要領よく世間を
渡っていく老獪な人間になってほしくない。たとえこの世で栄耀栄華を誇っていても、死ぬ時はみな地位にしろ財産にしろ、こ
の肉体さえも、ことごとく剥奪されて、丸裸になってあの世に行くのである。だから、現世にあるうちはできるだけ神を畏れ慎
んで人の道を守って生きなければならない。人間には性格に従って、さまざまな煩惱が燃え盛っている。いかに世間は心の汚い

人が多いことであろうか。人の悪口・陰口・噂話を好む人間の多いことが非常に嘆かわしい。多くはルサンチマンからの聞き苦しい言葉である。他人の不幸が蜜の味なら、他人の幸福は彼らにとっては毒のようなものであろうか。

ユゴーはこう述べている。

「彼らは多量の燃料を必要とするが、その燃料とは、なんと身近にいる人びとなのである。〈意地悪な人間には、腹黒い幸福というものがあるのだ。〉」

かような人間はごまんという。他人の噂話を燃料として話に花を咲かせ、快楽を感じる邪悪な人間が。それはSNSなどが発達した現代社会において余計に助長され、顕著なものとなっている。「人を呪わば穴二つ」というように、言った言葉は必ず自分に返ってくるのである。むしろ、そのようなことはあなたに望むところではない。「口は災いの元」という。邪念を持たないよう、よくよく注意されたい。

親鸞が言っているように、自分は善人だと思っているうちは神仏の救いはない。自分が善人で正義だと思っていることが、自分には罪はないと思っっていることが、とりもなおさず罪だというパラドクスである。そういう意味での善人は、善人ではなく面の皮の厚い悪人なのである。それゆえ、彼は有名なこの文句を言ったのである。

「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや。」

相手のことを少しも理解しようとせず、自分が、自分たちが正義だと思っているうちは神はあなたを何とも思わない。これはあなたを非難しているわけではない。かつての自分への自戒を込めて言っているのである。自分は悪人・罪人であるという自覚を持ったときに、初めて神仏はわたしたちに御顔を向けてくださる。しかし、神は憐れみ深いお方なので、心から反省し悔い改める者には蜘蛛の糸を垂れてくださる。どれだけ罪業が深くても、心の底から懺悔すれば神はお赦しくださる。それはここでわざわざわたしが論証しなくとも、いにしえの聖人たちが証明していることである。そして、何らかの懲らしめを受けること、天罰だと思えることに遭遇することは、ソクラテスIIプラトンが言っているように、魂にとっては矯正となっているのであって、本人には辛いかもしれないが救済の手立てである。我々には歯を食いしばって耐えねばならぬときがある。

孔子「諸君はすべてのことの成否を、自分自身の責任だと覚悟してほしい。ゆめ他人のせいに擦り付けてはならぬ。」
わたしが不幸になったのは罪を犯したからだ。せめてゴルゴタの丘の悔い改めた罪人の方になろう。

つぶさに過去を見つめていくと、わたしが不幸になったのは自分の責任でもあり、人や環境から害されたせいでもあり、両者が複雑に絡み合っただけでそうになっている。自分が傷つけられたら心が傷つくが、人を傷つけなければいわば魂が傷つく。その魂の傷の方を神はご覧になるのである。わたしのような凡夫・罪人にも、神は救いの御手を差し伸べてくださっている。人はいつからでもやり直せる。神はそれを願っておられる。涅槃経では「一切衆生悉有仏性」といい、すべての生きとし生けるものは「仏性」、すなわち誰でも仏になりうる可能性を持っているといわれる。だから、たとえ過ちを犯したとしても、絶望するには早い。神は

やり直しを手助けしてください。ただ、あまりにも魂の傷が深い者はゾロアスター流にいうと、チンワト橋を渡れず溶岩の中に投げ込まれる。イスラム流にいうと、ジャハンナムの業火の中に投げ込まれる。こういった者どもかという、現代風にいうといわゆるサイコパスであり、涅槃経的にいうと「一闍提」といわれる仏にも救いがたい極悪人である。彼らは良心というものを持たず、自分の非を認めることはなく懺悔の心も起こらない。しかれども、神はすべてを見通されておられ、どうしてそのような悪人が生まれたのかをご存知である。そこには、親鸞がいうところの「宿業」といったものがあるのである。なおかつ慈悲深いお方であるので、地獄で懺悔の心を起こせば蜘蛛の糸を垂れてくださることもあろう。懺悔より重みのある言葉に「慚愧」というものがあるが、あるいはそこまで至るならば。かのカングダタやユダのように。

孔子「自分の間違ったことに気づきながら、あくまで非を通そうとする人がある。そこに過失が完成される。」
ブツダ「懺悔の心が起これば、もはや罪は罪でなくなるが、懺悔の心がないならば、罪は永久に罪としてその人を咎める。」

『自殺の哲学』の無所住はいう。

「この世には善人面をする「悪人」と、自覚した「悪人」と、救いを求める「悪人」の三種類がいるだけです。あなたは善人面をしようとするから、落ち込むのです。」

葉室頼昭は厳しくいう。

「努力しない者は仏さまでも救えない。自分で目覚めて、努力してよみがえろう、更生しようとする人だけが仏さまに救われるわけで、好き放題して地獄に落ちていった人は仏さまでも救えない。」

理趣経からゆるしの教えを聞こう。

「金剛杵を手にする者よ。もしもこの四つのものを生み出だす教えを聞いて、本経を声をあげて読み、教えを受けおぼえるならば、たとえ今まさに量り知れないほどの重い罪を犯したとしても、きっとよくすべての迷いの世界である悪しき所を超越して、中略、まさしくさとりを得る場所に坐して、速やかによく無上の正しい覚りの境地を体得することができる。」

人が過ちを犯す多くの原因は、欲望と怒りである。怒りの原因は欲望、あるいは欲求が満足されないことからくる。映画『マトリックス』で、ある男がネオに言っていた。「人間は欲望と恐怖に支配されている」と。なら求めず、あきらめればいい。セネカの言葉を引きたい。

「幸福な人とは、欲望も覚えぬ、恐れも抱かない人であるが、ただし理性の恩恵によってそうであるような人である。」

『スツタニパータ』から引く。

「蛇の毒が身体の隅々に広がるのを薬で制するように、怒りが起こったのを制する修行者は、この世とかの世とを共に捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。」

「これは執着である。ここには楽しみは少なく、快い味わいも少なく、苦しみが多い。これは魚を釣る釣り針である」と知って、賢者は、犀の角のようにただ独り歩め。」

欲望については、プラトンが著書において、「穴の空いた甕」という喩えを用いて見事に戒めている。カリクレスという大地こそすべてと言ったニーチェとよく似た人物が登場するのだが、彼は欲望や欲求というものは満たしたいだけ満たすのが正義だと主張する。そして禁欲主義をニーチェのいう奴隷道徳のように嘲笑する。そこでソクラテスは、それならある甕があったとして、それにもし穴が空いていたら水を入れてもどんどん流れ出してしまうから、そこに延々と水を注ぎ込まないとならない。快樂主義の精神とはそのようなものだと言えて、そのような生は幸福ではないとしてカリクレスの主張を一蹴する。我々はこの甕の喩えのごとく、それぞれ心のどこかに穴が開き、肉体的・精神的に依存しているものがある。しかし、その対象に依存しすぎると逆に支配されているのと変わらない。だから、我々はその心の穴を塞がなければならない。そこで、わたしは信仰を勧めるのである。

わたしたちは、その年齢ごとに欲望や欲求を大きく傾けるものが変化すると考えられる。よく言われることだが、幼年期にはお菓子やゲーム、青年期には主として恋愛、壮年期には野心や財産、老年期にはおそらくは健康であろう。我々には求めるものに変遷がある。もちろん、どの年代においても、お金と愛情というものはある程度は必要である。欲望は苦しみのもとといえども、その年代において、あまりにも欲求が満たされない場合は不幸と言わざるを得ない。そのようなことを経験したならば、おそらくはどこか人格の欠けた人間になってしまうであろう。そのような人間が自分を含め、周りに少なからずいて、やはり人格

が屈折しており、後遺症のようになってしまっている者もいる。それゆえ、欲望を全否定するのは間違っている。行き過ぎた禁欲や制限はかえって心歪ませる。何事もバランスが大事なのであって、我々が留意しなければならないのは、欲望が満たされることについての過剰と不足である。ソクラテスもそうは言っても、特に生育段階において、ある程度は欲望を満たしていたに違いないと考えられる。

欲望の最たるものである性欲について、兼好法師の『徒然草』から引用する。

「まことに愛執の道というものは、その根が深く、源の遠いものだ。人間の欲望を刺激する対象は数多くあるけれども、それらはみな、しりぞけることができるものだ。その中で、ただ、あの情欲という迷い一つだけは、とてもおさえがたく、こればかりは、年老いた人も若い人も、また知恵ある人も愚かな人も、変わるところがないものと思われる。」

しかれども、エリアーデが述べるギリシア人の感性を伝えたい。

「く」というのも、アプロディテ（愛の神）によってひき起こされるのだから、性欲の過剰も逸脱も神聖な起源を有すると認めなければならぬのである。く彼女が鼓舞し、称讃し、護るのは身体的な愛、肉体の結合なのである。この意味において、ギリシア人はアプロディテのおかげで、性的衝動が本来もつ神聖な性格を再発見したといえるだろう。」

しかし、葉室の考えの方が清らかである。彼も哲学者も、昨今の恋愛や男女関係については苦言を呈している。

「お互いが愛し合って結婚するのではないのです。もともと一つなんだから、神さまがまた元の一つに戻そうとするために、お互いが愛するように導かれたのです。く神のお導きに沿っていれば、一つだった本当の相手が見えてくるわけです。」

「恋愛というのは自分たちで愛しあっているのではないと、いつも言っています。神さまが愛しあうようにさせられた。」

「それもお互いが純潔で結婚してはじめて立派な子供が生まれ、いのちが伝わっていくというのが本来の姿ではないか。」

「我欲をなくして、すべて神さまのお導きで生かされているという感謝の生活をすれば、当然そこに本当の伴侶が現れて結ばれる。」

もともと、自由恋愛というものも昔の見合い結婚でも、結局は優生思想で成り立っているに過ぎないのであるから、全くのめでたいものでも聖なるものでもないのではないか。雅で上品な源氏物語でさえおどろおどろしい話が多いのであるから、ましてやミゼラブルには清らかで純粹な恋愛はできない。

セネカの言葉から、多くの過ちの原因である怒りを鎮めよう。極めて重要な名文なので長く引用する。

「私は言うが、自分を無罪放免できる者など、一人もいない。くまず最初にわれわれは、こう確信しようではないか。われわれのうち、罪のない者は一人としていない、と。実のところ、最も多くの憤りが生じるのはここからだ。」「私は何も間違ったことはしていない」「私は何もしていない」。いや、君は告白していないだけだ。く誰かがあなたのことで悪口を言ったと耳にするだろう。以前、あなたも同じことをしなかったか、考えてみたまえ。くわれわれは他人の悪徳に目をとめるが、己の悪徳を背に負っている。く今、怒っている相手が、かつてどんなことでわれわれのためになったかを思ってみることが、われわれを温和にしてくれるだろう。貢献が加害を埋め合わせるだろう。く怒りの原因となった出来事よりも怒りそのもののほうが、どれほど多くを彼に失わせたことだろう。くあなたが怒りに勝つことを欲するなら、怒りがあなたに勝つことはできない。くきわめて思慮深い者すら誤ることがある以上、過ちに対するそれなりの言い訳がないことなど、誰にありえようか。私を害する可能性があるのは、不正よりもむしろ怒りだ。くわれわれは皆、悪人なのだ。だから、何であれ他人において咎められるものを、誰もが己が胸中に見出すだろう。われわれは悪人のあいだで暮らす悪人なのだ。」「彼は私に危害を加えた。私は彼にやっていない」。けれども、たぶんこれまで他の誰かに害を加えた。あるいは、やがて傷つけるだろう。あなたが怒りを負かすほうが、怒りが自分自身を負かすより、どれほどよいだろう。何にもまして有益なのは、死の定めを思うことである。く気高い喜びに費やすことが許されている日を、他人の苦痛と呵責へ移して何が楽しいのか。君の財産には損失の余地はなく、むだにできる時間はない。」

彼の慧眼にはいつも驚かされる。けだし、ギリシア人らしく「神にも見紛う」人物であった。我々には罪咎のない者などいないのである。

そもそも、いつも我々が怒りや失望を引き起こす根本原因は、他者や物事に対する期待である。考えてみてほしい。わたしたちは動物や植物には怒らない。たとえ生き物に害されても駆除する程度であって過度に怒ることはないし、岩や大木の下敷きになってもそれらに怒りを覚えることはない。無機物に怒りを覚える者はまずいない。さらにいうならば、津波に呑み込まれても波や海に対して怒る者はいないであろう。かえって政府や企業に対して人災であると怒りの矛先を向ける有様である。人は人に対してのみ怒るのである。それは、人が自分と同程度に理性や知性、常識や道徳を持っているかと思っただけである。けれども、我々には完璧な人間などおらず、みなそれぞれ足りぬところを持っている凡夫に過ぎない。セネカが言うように、賢者として生まれてくる者はごくわずかである。賢者といえども過ちを犯すこともあるし、ましてや凡夫であるわたしたちが罪咎がないということはない。聖人君子でもない自分が人の過ちや失敗を非難する資格はないのである。それゆえ、他者に対する過度な期待は捨て去らねばならない。多くのことは大目に見るべきなのである。

仏教聖典から、いわゆる三毒について引く。

「貪りは満足を得たい気持ちから、瞋りは満足を得られない気持ちから、愚かさは不浄な考えから生まれる。貪りは罪の汚れは少ないけれども、これを離れることは容易ではなく、瞋りは罪の汚れが大きいけれども、これを離れることは早いものである。愚かさは罪の汚れも大きく、またこれを離れることも容易ではない。この三つは、この世の悲しみと苦しみのもとである。この悲しみと苦しみのもとを絶つものは、戒めと心の統一と智慧である。戒めは貪りの汚れを取り去り、正しい心の統一は瞋りの汚れを取り去り、智慧は愚かさの汚れを取り去る。」

父殺しの阿闍世王にブツダがいう。

「なぜあなたは自分の罪を見ず、他人の罪ばかり見ているのか。」

我々は人の欠点よりも、自分自身のいたらなさ、愚かさに目を向けなければならない。

また仏教聖典から引く。

「他人の過ちは見やすく、己の過ちは見がたい。他人の罪は風のように四方に吹き散らす。己の罪はサイコロを隠すように隠したがる。」

また空海もいう。

「自分が教えに背いていることを一度も反省したことがなく、かえって他人が聖典に説かれた理法に反していることをあげつらって、これをそしります。いってみれば、自分の足のはれものをかくして他人の足のはれものをあばき出すようなものです。」

ルカによる福音書からも引く。

「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気付かないのか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。」

東西の聖者たちの言わんとすることは見事に呼応している。我々は人の罪をあげつらうよりも、まず自らの罪を反省しなければならぬ。

さて、ここで善と悪についての自分なりの思索を示してみよう。

善とは（自√他・他√自）

①ある者が何かを欲せず、その欲せざるものが、その者を利さない場合では与えないこと（知恵・正義）

②ある者が何かを欲し、その欲する者入手し使用する過程において、すべての者を害さない場合には与えること（正義・寛厚）

③ある者が何かを欲せず、その欲せざるものが、その者を利する場合には与えること（勇気・匡正）

④ある者が何かを欲し、その欲するもの入手し使用する過程において、その者や他の者を害する場合には与えないこと（節

制・忠告）

悪とは（自√他・他√自）

①あるものが何かを欲せず、その欲せざるものが、その者を利する場合でも与えないこと（怠惰・放任）

②ある者が何かを欲し、その欲するものを入手し使用する過程において、その者や他の者を害する場合でも与えること（不正・不正）

③ある者が何かを欲せず、その欲せざるものが、その者を利さない場合でも与えること（怯懦・悪意）

④ある者が何かを欲し、その欲するものを入手し使用する過程において、すべての者を害さない場合でも与えないこと（無知・けち）

要するに、人口に膾炙している言葉であるが、「自分がされて嫌なことは、人にもしてはならない」ということである。それは論語の、「己の欲せざるところを人に施すことなかれ」という金言から由来しているものである。わたしはこれを、すべての生きとし生けるものに適用する。なぜなら、小鳥の神が御誓願で「人間はもちろん畜類に至るまで」と、すべての生類を憐れむ御心を示されているからである。しかし単にわたしが、幼い頃より生き物を大事にしている、大人になってからも生き物にまるで恩返しをされるように癒されているからでもある。

また福沢諭吉はいう。

「自由とわがままの境目というのは、他人の害となることをするかしないかにある。」

『論語』より。

「子貢が尋ねた。簡単に一言で一生涯それを行う価値のあるものがありましたでしょうか。子曰く、それは恕（思いやり）、人の身になることだ。人の身になってみたなら、自分の欲しないことを、人に加えることなどできるものではない。」

ギリシアの「ギュゲスの指輪」という寓話にあるように、天罰を全く信じない者が透明人間になれば、悪行しかなさなくなるであろう。天罰を100%信じる者は、透明人間になっても善行しかなさないであろう。（信仰の必要性）

あらゆる悪しきことを行いながら、それを巧妙に隠し、最も善き人とされ、王座についている者V極悪人（こっそりで行う悪は最悪である）

あらゆる善きことを陰で行い続け、最も悪しき人とされ、乞食に落ちても善きことを行い続ける人V聖人（こっそりで行う善は最善である）

人間が死を免れないわけは、完全な善人になる可能性と、完全な悪人になる不可能性を与えるためである。死後の世界を予感することで、また神がいつも見ているという感覚によって、お天道様が見ているということ、我々は聖人となりえ、極悪人とはなりえない。すなわち、死は最高の法律である。

わたしが自殺を考えたとき、パスカルの賭けの自殺版ともいうべき思考をした。

信仰・生きるV生き地獄だが永遠の天国に入れる 死ぬV苦しむ時間を少なくできるが、永遠の地獄に墮ちる

不信仰・生きるV生き地獄な上に死んだら無 死ぬV苦しむ時間を少なくできるが無 どちらも不信仰ゆえに地獄に墮ちる可能性あり。

したがって、我々は信じて生きねばならないことが帰結する。

自殺は問題の解決にはならない。なぜなら、我々の生は一回ぼつきりではないからである。死んだら無になるといった世間の軽薄な言葉を信じてはいけない。もし無になるとしたら、たしかに苦痛は止むであろうが決してその保証はない。一方で死んでも靈魂が残るとしたら、この苦しみもがいている魂が永久に残るのだろうか？ それならば、それこそ地獄に墮ちたということに変わりはない。だから、もし読者に自殺を考えている人がいたら、どうか思いとどまってほしい。それは、他ならぬわたし自身がそうであったからである。そもそも、自殺する者は自分で自分を殺したのではなく、そのような追い詰められた人を助けなかった周囲の人間や社会の者どもが殺したのである。すでに他界した膨大な数の自殺者は必ず生きたかっただけである。本当は生きたかっただのに死なざるを得ないほど追い詰められたから自らの息の根を止めたのである。人間は社会的動物であるから、そういう人たちの無念の思いが現世に全く影響していないわけがない。そこまで追い詰めた薄情な連中に必ず報いとして現れるであろう。西洋の神学者たちは、首を吊って死んだ者や崖から飛び降りて死んだ者は、地獄で何度もその行為を繰り返すと極め

て非情なことを述べているが、わたしからしたらそのような冷酷な言葉を吐く当の本人が地獄で今頃そのような憂き目に遭っていると考えられる。所詮、殿上人には悲運のミゼラブルたちの気持ちは、神の御前に立たされるときまでわからない。

神道の徳として、「正直」「慈悲」「智慧」の三つがある。神道は精神的な「内清浄」を重視する。わたしはそれらに、「感謝」と「懺悔」の徳を加えて、合わせて五色としたい。わたしは母からよく、「バカでも「ありがとう」と「ごめんなさい」が言えれば十分よ」と言われていた。いかに世の中にはプライドばかり高くて口ばかり達者で、その二つが言えない者が多いことであろうか。正直は努力と解して「がんばろう」としたい。

ゾロアスター教では、善思・善語・善行という徳目がある。仏教の身口意の業の三密、キリスト教の「私たちは、思いと言葉と行いによって多くの罪を犯しました」と信仰告白するのと共通する。カントは我々の善行は、自らの幸福が過度に傷つけられない範囲においてのみに限られるとして、いわば哲学的原罪を明らかにした。しかし、善行をことさら偽善的であるとうがった見方で見るのは誤りである。そこには善をなす者、徳のある者に対する潜在的な嫉妬が含まれている。さながら不完全な善を悪に引き入れることによって、善をなさない悪である自分と同じ目線に立たせることで安心しようとしている。それゆえ、我々はそのような陰湿な哲学は振り払って善に邁進しなければならぬ。

ヤスパースは限界状況（死や罪、壮絶な悲運）についていう。

「限界状況のうちには無が現れるか、あらゆる消滅する世界存在を超越して、本来的に存在するものが感得されるかのいずれか。」

『過去と和解するための哲学』の山内志朗はいう。

「過去と和解するということは、未来の自分に約束をして、未来の自分が現在の自分を通して過去の自分に何かを送り届けることだ。」

過去のわたしを救うのはわたし自身であるように、過去のあなたを救うのもあなた自身である。

孔子は次のようにいう。

「生まれつき道を知る者があれば、それは最上だ。勉強した上でそれを知る者が次に位する。行き当たってから必要を感じて勉強しだすのが、またその次だ。行き当たっても平気で、勉強しようともせぬのは最低だ。」

また、ヘシオドスも同様にいう。

「最上なのは、自らすべてを悟る人、またよき言葉に従う人も立派なもの。だが、自らも悟らず、他に聞くも心にとどめないのは詮なき輩。」

我々はみな凡夫であって、生まれながらに悟っている者などいはいはしない。ただ、向上心を持って努力することができるか否かである。そこに人間の人格の差別が生ずるのである。

ミリエル司教はバルジャンにいう。

「百人の正しい人々の白衣に対してよりも、悔い改めた一人の罪人の涙にぬれた顔に対して、天にはより多くの喜びがあるでしょう。」

さらに続ける。

「忘れてはいけません。決して忘れてはいけませんぞ。この銀の器は正直な人間になるために使うのだとあなたが私に約束したことは。」

更生したマドレーヌ市長として、バルジャンは工場で働く者たちにただひとつ要求する。

「まともな男であれ！ まともな娘であれ！」

あなたが倫理的に迷ったとき、バルジャンの自責を思い出してほしい。

「卑怯だぞ！ 情けのないやつ（ミゼラブル）だ！」

キルケゴール「自分の十字架を負うことである。これを引いていくことが、たとえどんなに投げ出したくなるような辛い労苦にみちたものであるにしても。」

倫理観や正義感が高すぎたり、理想が高いと自分にも他人にも厳しくなる。人に道德や正しさを期待するようになり、ひとたび自分が罪を犯すと罪悪感という形となって激しく苦しむ。わたしはバルジャンに救われ、バルジャンに責め立てられていたといえよう。けだし、魂の塞翁が馬というべきである。

旧約聖書・コヘレトの言葉から引く。コヘレトはこの言葉で締めくくっているのである。

「神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべて。」

また、空海もいう。

「五戒は悪を断ち切り善をおさめる根本、苦悩をのがれ安楽をえるはじめである。」

我々はうかつに戒めを破らないよう、常に警戒しなければならない。

またヤハウエの言葉である。

「わたしは必ず時を選び、公平な裁きを行なう。」

神や仏が定めた戒律を守ること、持戒こそ救いの第一条件である。逆にいえば破戒こそすべてが滅びるもとである。

かの法然上人が土佐に流罪になったとき、小舟に乗っている上人に遊女たちが舟を寄せて救いを乞うてきた。法然は彼女たちに、できることなら身を売ることは今すぐやめなさいと戒めるが、どうしてもできないのならただ念仏を唱えなさいと勧めた。そうすれば阿弥陀様は必ずあなたがたを救ってくださると。彼女たちは嬉し涙ですすり泣いた。彼が一般民衆を救いたいという聖僧であったからでもあるが、そのように、神仏の御心は慈しみに満ちているのである。

法然は従来の厳しい修行を課す「聖道門」を「難行道」とし、自らが提唱した念仏のみで救われるという「浄土門」を「易行道」とした。当五鳥教は、その中間に当たるものである。自律するということと神の恩寵という、自力と他力の双方を必要とする。困ったときの神頼みではいけない。

我々は祖先と前世の双方向から、徳と罪を受け継いで生まれてきている。我々の過去生が全くの善人であることも全くの悪人であったこともない。善きものも悪しきものも、そのどちらでもないものも、まとめて受け継いでいるのである。言うなれば魂の借金と遺産とを同時に相続しているのである。それが現世に反映されているのであり、それを親鸞は宿業と言ったまでのことである。まさに神のみぞ知る世界でわたしたちは生を受け、また死んでゆくのである。わたしは残りの余生を来るべき来世に向けて、ただ慎ましく己の罪を懺悔して、少しでも徳を積んでいけたらと思う次第である。

ここで再び、わが神の御誓願を拝し、その真意を説こう。

「わたしの名は五鳥ごからすといい、東城国において十二代みかどの帝に仕え、数万年の齡よわいを保っている。今際の時までも老病衰というものを知らなかったけれども、盛者じょうしゃひつすい必衰の始めあるものは必ず終わりあり、という世界の掟は逃れることができな。しかし、わたしの魂は中有ちゆううに留まり、あなたがたの命根長養みょうこんちやうようの守護神となろう。わたしの姿が青黄赤白黒と五つの色を現すことは、すなわち五智如来ごちによらいであり、五行ごぎようであり、五臓を守るというわたしの神性の表れである。人間はもちろん、すべての生きとし生けるもので、もろもろの病氣わずらいを癒やして、あなたがたの五臓安寧ごぞうあんねいの守護神となろう。」

小鳥の神が死なれたのは、希望と共感のためだけではない。この神の死は、キリストの十字架による贖罪や地蔵菩薩の地獄における代受苦という観念と呼応するものである。すなわち、キリストが人類の罪を、地蔵菩薩が罪人の責苦を代わりに背負われたように、小鳥の神も我々衆生の罪けがれや病苦を、五色の翼で包み込むことによって吸収され肩代わりされたのである。それゆえに死なれた。衆生の身代わりになるという究極的な自己犠牲の御心なのである。我々の苦悩を吸収し、罪業を浄化し、絶望を希望に変えられた。それゆえ、我々の罪も神の尊い犠牲によって赦されているのである。神の御誓願によって、この三本足の信仰のうち、思し召しは苦難から、神の領きは孤独から、そしてこの畏れ慎む信仰では罪業からの救済が約束されているのである。小鳥の神は、今現在も中有に留まり、我々衆生の苦悩や罪業を肩代わりしておられる。この神がいなければ、世界はもっと

ひどい阿鼻叫喚の地獄となっていることであろう。神の死によって、罪の赦しがもたらされた。キルケゴールが言うように、罪とは「死に至る病」である。神は罪という魂の病さえも除くと誓われたのである。小鳥の神は、罪悪感という人間にとって最も重い病をも癒やされるお方なのである。すなわち、三つの大病からの解放が、小鳥の神の御誓願のありがたい恩恵にほかならない。それはいずれ必ず訪れる、最も重き宿命である死すらも乗り越える力となるであろう。神ご自身が身をもって死を超越されたのであるから。「神の死」とは、中有という我々のすぐそばで共苦するという自己犠牲の思し召しなのである。繰り返すが、神の尊い御誓願を固く信じてよりどころとすること、これこそが五鳥教の真髄である。小鳥の五色の光によって、我々のもろもろの罪は赦され、魂は輝きを取り戻すのである。不死鳥である神のように。

ルカによる福音書より、ゆるしの御言葉を聞こう。先のミリエル司教の言葉はここからきている。

「悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

映画『赤と黒』で、処刑前のジュリアンに師のシエラン神父が諭す。

「わが子よ、神はお前を見捨てはしない。」

わたしには父がないも同然だが、預言者が自分の父であるとして、この言葉を父の言葉だと思っている。

我に咎あり、されど神は愛なり、この苦しみは必ず我を益す。

あなたが小鳥の神のごとく、まさに不死鳥のように復活することを祈る。

第四章 五烏神義論

ヨブ記において、義人ヨブはこう嘆く。

「滅びよ、わたしが生まれた日、男の子が孕まれたと言ったその夜。」

これは、そのままかつてのわたしの嘆きである。

ユダヤ教のラビ、クシュナーは、ヨブ記についてこのように述べる。

「完全に全能ではないが善である神と、完全に善ではないが全能の神と、どちらを選択するかとせまられて、ヨブ記の作者は神の善を信じるほうを選んだのです。」

ヨブ記の作者は、神が全能であることを放棄しようとしているという。つまり、神は善であるが、その力の及ばないこともあるということである。この論はあながち間違いではなく、わたしもこの二律背反のアポリアに長らく、いや正確に言えば今も悩まされている。多くの神学者たちはこの問題に逡巡し煩悶している。この問題は、すでに思し召し信仰を説いたからといって、決して疎かにできないものである。

そもそも、「なぜわたしたちは生まれてきたのか」、あるいは「何のために生まれてきたのか」、あるいは「どのようにして生まれてきたのか」という問いを立てる。一つ目の「なぜ」というのは理由を問うている。これは宗教家が答えることである。多くの宗教は「神を讃美するため」と答える。二つ目の「何のために」というのは目的を問うている。これは哲学者が答えていくことである。わたしのような凡人でも「幸せになるため」と即答することができる。三つ目の「どのようにして」というのは原因を問うている。この中には「いつ」「どこで」という時間と場所についての問いも含まれている。以上の理由・目的・原因は、実は一つのものであるようにも考えられる。理由の中にすでに目的と原因が含まれているように考えられ、また他の二つから見ても、やはり同様のことが言えるのである。とはいえ、「なぜ」ということと「どのようにして」ということを追求するのはここでは差し控えたい。わたしは「何のために」ということ、つまり現実的に幸福になることをここでは取り上げる。なぜなら、どのような形であれ、幸福は万人の求めているものであり、今この瞬間にも我々に差し迫っている事柄だからである。

およそ世界の人々は絶対者に対して、幸福になること、もしくは不幸にならないことを祈っている。もっとも、無宗教の人もあるし、宗教の中には現世において幸福になることを諦めて、来世で幸福になることを目指しているものもある。しかし、無宗教の人といえども、もちろん幸福を求めているし、現世を軽んじている人も、来世での幸福を求めているのであって、本当は諦めているわけではない。

世の中には、およそ四種類の人間がいる。第一は、良いことは神様のおかげで、悪いことは自分のせいだと考える人。第二に、良いことが神様のおかげなら、悪いことも神様のせいだと考える人。第三に、良いことが自分のおかげなら、悪いことも自

分のせいだと考える人。第四に、良いことは自分のおかげで、悪いことは神様のせいだと考える人。第二と第三の考えは理屈が通っている。第二の人は、神が世界を支配しているのなら、当然良いことも悪いことも神の責任であると考えている。第三の人は、世の中自分の力で何とでもなる、だから良いことも悪いことも自分の責任であると考えている。第一と第四の考えは論理的に破綻している。論理に無理があるにもかかわらず、我々は第一の人を美しいと称賛する。反対に第四の人は醜いと非難する。我々は第一の人になるべきである。そのためには我々は神との合一を図るべきである。神社に御神鏡が安置されていることを思い出してみてほしい。これが何を意味するか。わたしはこう考える。鏡というものは、もちろん自分の姿が映るものである。その鏡が神のいます社に御神体として安置されている。ということは、神は自己の外部に存在しているのではなく、自己の内部にあられるということになる。さらに、神仏とは救済者であり、その御心は衆生済度であることをわたしは信じている。こうして、神仏とは自分のことであり、だから自分を救うのは自分自身にほかならない。その上、世のため人のために尽くし、世界そのものをも考えていかねばならない、という結論が導き出される。この推論をまとめると以下のような論法になる。神社に鏡が安置されている。それなら、神とはわたしのことである。ところで、神とは救済者である。しからば、わたしは救済者である。それゆえ、わたしを救うのはわたしである。理屈の上で神と合一したに過ぎないが、太古の日本人は賢明であったと考えられる。

ここで、これから幸福になろうと考えている二人の異なる意志を挙げてみる。

- ①自分のために、神仏に幸福してもらおう。
- ②自分のために、自分で努力して幸福になろう。

①に偏りすぎると、もはやその人は他力本願で怠惰な人でしかない。農業で例えると、いくら神仏に豊作を祈願しても、神様が自ら田植えから稲刈りまでしてくれるわけではないことは言うまでもない。②に偏りすぎると、その人は一見努力家に見えるかもしれないが、極端な人は傲慢で独善的な性格をしている。確かに一年の収穫は彼が頑張って働いた賜物である。しかし、決して彼だけの力によるものではないのは明白である。我々は農耕に必要な土地、清らかな水、祖先たちが品種改良を重ねてきた稲、祖先から伝えられた技術、はたまた田畑を潤す雨や、稲を成長させる日光を届ける太陽をわたしたちが自分で造ったわけではない。自然の恵みを使わせていただいているということを忘れてはならない。「人智を尽くして、天命を待つ」というのが正しいあり方なのである。人はそれぞれ①と②の間どこかにいるが、現代は無宗教の時代なので、ほとんど②の方に偏っている人が多い。さて、仮にも神との合一を果たしたあなたは、①と②の間、あるいはこれらを超えたところに三つ目の意志を見出すことができるだろう。それは、

③神様のために、自分で努力して幸福になろう。

主語が「自分」から「神様」に変わったただけである。なぜ自分が幸福になることが神様のためになるのか。それは③の意志を正確にいうところだからである。

「神仏の衆生済度の御心を証明するために、我々は意地でも幸福にならねばならない。」

①は他力であり、②は自力である。そしてこの③は、いわば他力（神力）があることを自力（人力）で証明しようとするものである。わたしはこれこそが本当の信仰であり、最も敬虔な態度であると考え。このように、神様を第一に、最優先に考えるのである。神様のことを考えたら、幸福になることを絶対に諦められない。なにしろ、諦めたらそれこそ神も仏もないことを証明してしまうのだから。

ここから具体的にどのようなようにして幸福になるかを考えていく。アリストテレスが『弁論術』において論じている幸福論から述べる。わたしは世間一般の人々が求めている享樂的な生活をするのが幸福だとは考えない。もろもろの哲学者たちは、彼らに「欲望の奴隷」と揶揄する。かといって、仙人のような禁欲的な生活をしている人々が幸福であるとも考えない。立派だとは思うが、彼らが幸福であるかは疑わしい。ブツダは「欲望を滅した者が幸福である」と悟ったが、それなら木や石が最も幸福だということになる。いや、実際そうなのかもしれないが、わたしのような凡夫にはできないことではない。そこで快樂主義と禁欲主義の中間に位置するアリストテレスの幸福論に基づいて論ずることにする。やや現代社会にはそぐわないものもあるが、彼の幸福観はマズローの欲求段階説とほとんど同様のものである。以下述べていく。

① 血筋のよさ

アリストテレスはこれを第一に挙げる。いかにも古代人らしさを感じるが、実は現代人にも全く無関係なものではない。今日の心理学者たちも、人間の人格は遺伝と環境の両方で決まると考えている。顔貌に限らず、知能は両親の遺伝が大きく、子供の

将来に深く影響する。真相は、氏も育ちも、どちらも大事だということである。我々はおぎやあと生まれた以上、こういった宿命から逃れることはできない。けれども、こういうことは現代ではほとんどタブーとされているし、わたし自身もすべての人には仏性があると考えるので、あまりこの点にこだわらなくともよい。

②よい子供に恵まれること

これもまた子孫繁栄を重んじた古代人らしさを感じるものである。この場合の「よい」の意味は、身体的にも精神的にも優秀であるということである。たしかによき子供に恵まれることはめでたいことであり喜びである。けれども、現代は貧困や不妊、LGBTの問題など、価値観が多様化し、子をなせない人たちも多くいる。それゆえ、これにもあまりこだわらなくともよいであろう。ブツダは「子のある者は、子について憂う」という。子は幸せも運んでくれるが、不幸も運んできたりする。親不孝者のわたしは、両親にどれだけ心配をかけたかしれない。反省する次第である。

③富

アリストテレスのいう富とは、多量の貨幣、広い土地、多くの奴隷を所有することであった。お金と土地はともかく、奴隷は現代では論外である。別書においては「富はほどほどでよい」という趣旨のことを述べている。老子は「少欲知足」、いわゆる足るを知るとい言葉で、必要最小限のもので満足することを勧めている。よくアルコール依存症の人を「酒を呑んでいる」と言わずに、「酒に呑まれている」と表現するが、これは対象を支配しているのではなく、対象に支配されてしまっている状態を

言い表している。我々が普段何気なく買っているものも、ひよっとしたら「買わされている」のかもしれない。逆に「衣食足りて礼節を知る」ということわざもあるように、あまりにも貧しいのも問題である。富についてはバランスが大事と考えられる。

④名誉

名誉というものをアリストテレスは、世の人々から優れている、善人である、徳があるとよい評判が立っていることであると端的に述べているが、別の著書では「名誉は快楽や富よりはよいものであるが、それほど大したものではない」というふうに述べている。わが国は名誉を非常に重んずるお国柄である。ただし、こうした名誉は所属する社会によって与えられるものに過ぎない。本当の名誉とはいかなるものかということは、プラトンの著作からヒントを得た。彼は登場人物にこう言わせている。

「完全に不正な人間は、最大の悪事をはたらきながら、正義にかけては最大の評判を、自分のために確保できる人である。」

もう少しわかりやすくいうと、「極悪人とは、あらゆる悪しきことを行いながら、それを巧妙に隠蔽し、人々から最も善き人と称賛され、位人臣を極めている人」である。

こうしたことをじっくり考えてみると、最も名誉ある人とは、こう考えられる。「聖人とは、あらゆる善きことを陰で行い続け、誰からも称賛されずとも、慎ましく暮らすことに満足している人」と。だから、本当に名誉ある人は無名なのである。さらにつきつめて考えてみると、人間には信仰が必要であるということがわかってくる。人が透明人間になったら何をするか、思い

浮かべてみてほしい。天罰を全く信じない人が透明人間になれば、悪行しかなさなくなるであろう。天罰を100%信じる人は、透明人間になっても善行しかなさないであろう。あまり脅しつけるのは良くないが、昔の人が「お天道様が見ているぞ」と子供に戒めていたのは正しいのである。

⑤ 身体の徳

これは健康および身体能力、容姿の美しさである。健康が一番とよく言われるが、その通りで、この上なく幸福な生活をして
いる人も、激しい苦痛を伴う病気にかかれば一気に不幸に転落する。身体能力については、さすがオリンピック発祥の地だけあるといったところだが、日本の武士たちも日々武芸に励み、体を鍛えていた。「健全な魂は健全な肉体に宿る」というように、
身体も決して疎かにしてはならず、文武両道ということが大事と考えられる。メルロリポんティがいうように、わたしたちの心
と体はつながっているから。一方が病めば一方も病む。容姿については現代では非常に重要な要素になっているが、ソクラテス
は若者たちにこう言った。

「美しければそれにふさわしい者となるように。また醜ければ、教養によってその醜さをかくすようにせよ。」

⑥ よい老年

よい老年とは、病氣知らずで苦痛の少ない老後を送ることである。特に「トロイの木馬」で有名なトロイアのプリアモス王について言及している。詩聖ホメロスが物語るごとく、彼は敵対するミュケナイのアガメムノン王や英雄アキレウスによって、自国の滅びるのを目の当たりにし、非業の最期を遂げた。曰く、「終わり悪ければ、すべて悪し」ということである。これについては、先の「よい子供に恵まれること」と密接に関わっていると考えられる。子や孫のいない、誰にも看取られず死んでいく老人は不幸である。老いと死は誰も免れることのできぬものであることは、仏教徒でなくとも見事に知っている。我々はそれを忘れて生きているだけのことである。

⑦よい友

ここでは「友人とは、相手のためになると考えられることを、もっぱら相手のために行うことのできるような人」としている。要するに、相手の立場に立って考えられるような友である。重要な事柄であるから、『ニコマコス倫理学』から解説する。友について、そして彼らを結びつけている愛フィリアについて、極めて詳細に論じているので、ここで要約してみたい。

友には三種類ある。すなわち、有用（利益）が得られるから愛している友、快（快樂）が得られるから愛している友、ひとりなり（徳、倫理的卓越性（エートス）がある、もしくは徳を積む志がある）が善いから愛している友の三つである。このうち、利益と快樂が得られるから愛している人は、実は友を愛しているのではなく、利益と快樂を愛しているのであって、友から利益と快樂が得られなくなったら、彼は友を愛することをやめる。有徳な人々、お互いに徳のある人たちは、友であるその人自身を

愛している。彼らは友が全く徳、あるいは志を失ってしまわない限り、愛することをやめない。利益による愛が最も消失しやすく、次に快樂による愛が、徳による愛は容易には消失しない。

「愛（フィリア）とは一つの卓越性と言っているいいもの、ないしは卓越性と切り離せないものである。我々の生活に対して、これほど欠くべからざるものはない。たとえ他のあらゆる善きものを所有する人であっても、親愛な人々（フィロイ）なくしては生きることを選ばないであろう。」

要するに、得か徳かということである。要するに「人はお金や容姿、快樂性ではなく、心で選べ」と言っているのである。いかに奴隷制を容認していたといえども、アリストテレスのこうした洞察は見事である。『徒然草』の兼好法師も似たようなことを言っているし、「孟母三遷」ということわざもある。アリストテレスは「少数にしろ、そういう相手を見出しえたならば満足しなくてはならない」と述べている。なかなかそういった徳のある人にはまみえることができないものである。

⑧好運

アリストテレスは好運を、「運が原因であるよいものを所有すること」とし、例として、他の兄弟はみな醜いのに彼は美しいとか、他の人々は宝を見出せなかったのに彼がそれを見つけたとか、戦場で隣にいた者に矢が当たって、狙われた本人には当たらなかった、という場合を挙げている。現代で代表的なものは宝くじであろう。一回買っただけで何億円が当たったとかいう人は最も好運であるし、生涯にわたって買い続けたのに全然当たらなかったという人は運がない。それから、生まれつき障害を

持っている人たちを無視すべきではない。彼らを運が悪かったというのも失礼であるし、我々は今後一切、優生思想からはきっぱり縁を切らなければならない。

運と関わりの深いものに占いがある。しかしわたしは占いにはあまり良い印象を持っていない。何か人の欲望や恐怖心を煽っているようであるから。中国の占術書である『易经』は、史上最高の頭脳と称えられたライプニッツに高く評価され、ユングも夢中になったそうであるが、仮に易が本物だとしたら、易に精通した人たちは、なぜ「この日、この場所で地震が起きますから、この地域の人たちはそれまでに避難してください」と言わないのか訝しく思う。中には予言している者もいるのであろうが、当たっていることがはたしてあったのであろうか。

ところで、我々は普段、自分の頭で考え、自分で自分の体を動かし、物事を自分が選択していると思っている。これを自由意志という。ところが、我々は実は「考えさせられている」「動かされている」、すべてのものごと森羅万象はあらかじめ決められている、と考えることもできる。これを決定論という。運と似ている言葉に、運命とか宿命、宿業という言葉がある。下のものほどより深刻な響きがある。運命は抗いがたいもの、宿命、あるいは宿業は決して逃れることのできないものである。キリスト教、あるいは理神論ではそれを、神が定めた摂理という。仏教では因縁（原因と条件）という概念があり、世界は網の目のように複雑につながり合って成立しており、単独で成立しているものは何一つ存在しない（相依性）、と説く。これ以上立ち入って論ずるのはやめておこう。たしかに我々は因縁や運命に縛られて生きてるのは明白であるし、もしかしたら宿業なるものも存在しているのかもしれない。しかし、その中で我々は自由意志を行使して、状況を少しは、時には大きく改めることが可能であるとわたしは考

える。本書を書いている今も、それを信じてのことである。特に、ストア主義のいう「権内」、すなわち自分の心は外界がどうあっても自由である。ひどい運命に遭遇しても、「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び」の精神で生きたいものである。

⑨ 徳

徳（アレテー）についても、アリストテレスは『倫理学』で詳細に論じている。徳とは中庸（メソテース）であると主張している。孔子も中庸を説き、ブツダも中道を説いているが、彼のいう中庸とは極端で偏った感情や行為から離れて、ほどよい中ほどに適中することである。たとえば、恐怖に関してはその中庸は勇氣、過剰は無謀（古風にいうと蛮勇）、不足は怯懦（臆病）である。快樂に関してはその中庸は節制、過剰は放埒（中毒）、不足は無感覺（木石）である。我々は時として正反対のものに傾くように努めるべきである。臆病なら少々無謀になるよう心がけた方がよい。そうすることでかえって中ほどに適中するであろうから。

さて、徳というものは諸教においてそれぞれ定められているが、ここでは神道が唱える徳に即して考えてみたい。神道が説く徳は、正直・智慧・慈悲の三つである。南朝の北畠親房が、これらの徳を三種の神器と対応させたという。「正直」は、素直な心、まごころ、嘘偽りのない心で、「智慧」は、かしこさ、善悪や幸福を判断する能力、真理を悟る力で、「慈悲」は、思いやり、慈しみ、憐れみの心を意味する。この三つの徳も、やはり中庸であり、それぞれ関連性があると考えられる。というのは、智慧を欠いた正直は、「正直者が馬鹿を見る」というように馬鹿正直であり、人のいうなりになったり詐欺被害に遭いかねない。

慈悲を欠いた智慧は奸智、ずる賢いだけである。正直を欠いた智慧は無知、仏教でいうと愚痴である。正直を欠いた慈悲は偽善であり、智慧を欠いた慈悲は盲愛、甘やかしに過ぎない。慈悲を欠いた正直は文字通り無慈悲である。神道の徳をアリストテレス的に考えると以上のようになる。これら三種の徳はどれも重要なものであるから、すべて備えた人間になるべく精進していかねばならない。正しい選択をするためには、真の正直、すなわち「至誠」に適中するためには、智慧と慈悲の両方を必要とする。というのは、慈悲は正しい目的を定めて、智慧はその目的を達成させるからである。だから彼は、「正義の最高のものは、愛という性質を持ったそれにほかならない」と述べているのである。中庸とは、中国の故事でいうならば「韋弦の佩」である。中国のある人はせっかちな性格であったため、なめし革を身につけて、またある人はのんびりした性格なため、弓づるを身に帯びていたという。

⑩ 観照的生活

観照的生活テオレイシとは、ひたすら哲学、思惟、瞑想に耽る生活態度を指す。快樂や名誉のみを求める生活は幸福ではない。『倫理学』において、享樂的生活と政治的生活の次に挙げられるものである。彼は享樂的生活を畜獸や奴隸のごときと罵り、政治的生活も皮相的なものであると述べている。智慧ソフィアが我々のうちに存する最高のものであり、智慧に即した活動が我々の行いうる最高の活動である、とする。至福である神々は常にこの活動を行っている存在であり、人生において、この活動に多くの時間を費やした人、すなわち智者こそが最も幸福である、と結論づけている。少し現実離れしてるように感じるし、アリストテレスも究極的には神々にしかなしえないこと、と半ば諦めている。孔子は、「学んだことを鵜呑みにして自分で考えないのも、自分だけで考え

て人から学ばないのも、どちらにも危険である」と警告している。生まれながらにすべてを悟っている人はほほいないのであるから、まず先人たちが考えたことを学びつつ、さらに自分でも考えてみるのが大切である。「井の中の蛙、大海を知らず」ということわざがあるが、あるお経には「大海中の盲亀」という文句があり、大海原を自由に泳いでいる人も実際は何も見えていない、「大海中の盲亀、大海を知らず」という場合もあるのである。逆に井の中にいても大海を知る場合もある。普遍的な宗教の開祖や、独創的な哲学を打ち立てた人たちがそれに当たるであろう。観照的生活は浅学菲才のわたしにはいささか難しいことかもしれない。

親鸞でさえ「愛欲の大海に沈没し、名利の大山に迷惑」していたのであるから、ましてや凡夫であるわたしに執着を断ち切ることは難しい。法然上人のような清廉潔白さや頭脳明晰さが無いのはいうまでもない。いずれにしても、我々は「S・S・ミルがいう通り、幸福な豚であるよりも、不幸なソクラテスであった方がよい。あえて例を出すならば、前者は三国志の暗君・劉禅や暴君ネロであり、後者の極め付けは乞食哲学者・ディオゲネスや、わが国では「捨て聖」一遍上人である。

お釈迦様は言われる。

「世俗の事柄に触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること。これがこよなき幸せである。」
またアウグスティヌスはいう。

「幸福な生活とはあなた（神）を求めて、あなたによって、あなたのために喜ぶことである。」

わが故郷の尾川恒祐もこのようにいう。

「本当の心の憩いの場は、神仏の御前にあるように考えられます。心の宝は信仰であります。」

さて、以上述べられた幸福や徳といったものは、また災いや悪徳とは、いったいどこからもたらされるのであろうか。五鳥教はわたしの思惟によって、限りなくゾロアスター教に近いものとなった。というのも、わたしは若い頃から神や仏が存在するから、なぜこの世は不幸や悪で満ちているのかという疑問を抱いていたからである。その答えが偶然ゾロアスター教と一致したのである。思し召し信仰についても、あまりにも大きな災いを神が起こしたものだとは考えられなかった。たとえば、あのテーブルのオイディプスやアンティゴネーの壮絶な悲運はとても思し召しとは言えない。神が不幸を善に変えてくれるのはいいとして、その不幸はいったい何に由来するのかと推し進めた。多少の不幸なら神の思し召しとも言える。しかし、大きな悪、原爆やホロコースト（クシュナーや多くのアメリカの神学者たちは、卑怯にも原爆のことは一切取り上げない）、大地震やコロナウイルスなどは神が起こしたとは考えられない。そんなことで家族を亡くした人に対して、何か良いことにつながっていますからね、とは言えない。だからわたしは、悪神や魔王のような存在を想定せざるを得ない。こういうと迷信のように思われるかもしれないが、そうしたらすべてがすっきり説明がつくのである。以下、理由を述べる。

神の存在は認めつつも、不幸は人間の罪のせいとする論への反駁

全知全能の神が世界を創造したなら、悪の存在が説明できない。原爆や地震までも神が起こしていることになってしまう。我々はそのような存在を神とは呼ばない。そのようなむごいことを起こしている神は、神ではなく悪魔である。さらに、人間に自由意志を持たせたのも神であって、結局は人の罪もつきつめれば神の責任になる。なぜなら、神は我々人間を創造するとき、我々が何をなすか知っていたからであり、だからこそ神と呼ばれるのであるから。そして、天災や病気などが説明がつかない。いったい重い障害を持って生まれてくる子供たちに何の罪があるというのか。奴隷船にすし詰めにして死んでいった黒人たちにいかほどの罪があったというのか。彼らのことはしっかりと考慮されなければならない。罪のない者にも動物にさえも自然災害は容赦なく襲いかかる。世の中、悪人が栄えたり善い行いに報いがなかったり、因果応報になっていないことも多い。わたしの同級生の女の子は十代で脳腫瘍で亡くなった。罪のかけらもない心根の優しい子であった。そういった夭折した子たちに、イスラムの大哲学者アル・ガザリーは、「その子たちは成長して背教したり悪事をなしたから神が先に芽を摘んでおいた」という、とんでもないことを述べている。わたしはそのような論には断固反対する。先祖の罪だとか前世の罪だとかいう暴論にも断固反対する。相手に対して極めて失礼であるし、その人に二重にも三重にも苦しみを与えてしまう。そこまでして神を弁護する人の魂は歪んでいる。神や仏は衆生済度のためにおられるのに、そこまで過酷なことを我々に課すわけがない。

無神論・無宗教への反駁

現代は無宗教がデフォルトになりつつある。懐疑論者のカルネアデスはこういった由々しきことを述べている。

「神が存在するということを積極的に断定する人々は、不敬虔のとがに陥らざるを得ない。なんとすれば、もしも彼らが「神は万有を支配している」と言うならば、神が悪いことがらを作り出したことになってしまう。他方彼らが「神はある種のことがらだけ支配している」とか、「あるいは神は何ものをも支配しない」と言うならば、神を無力なものにしてしまう。そうしてこのようなこととするのは、明らかに不敬虔なことがらなのである。」

神がいるのならば悪が存在するのかという問いに、わたしは、それなら逆に神や仏がないならば世界に善があるのかという反論をする。つまり神や仏がないなら、なぜこの世は善いことで満ちているのかという逆説の問いである。世の中にはなぜおいしいもの、楽しいこと、美しいことがあるのか。なぜ世界はこんなにまで秩序だっており、我々に都合よく便利なものがあるのか。あらかじめ備えられているのか。そしてそれを利用する知能をなぜ我々は持っているのか。その問いに無神論者は自由意志と自然現象と答えたとして、それならなぜ人類と地球があるのかと問う。宇宙ができたからと答えられる。宇宙はどのようにして動いているのかと問う。車や船や飛行機など、命のないものは必ず何者かによって動かされている。そして自力で動いているものは必ず命を持っている。それゆえ、この天体を動かしている何者かが存在する。そして原因にはそのまた原因があり、無限に遡っていくと究極的な第一原因に至る。それが神と名付けられる。そしてその宇宙創造の過程で我々人類が発生した。そしてその人間は意志を持ち、他者に共感する心を持って人の手助けをしたり生き物を憐れむ心を持っている。だから人間は神が造ったものであ

るし、その善良な心も神が吹き込んだものと言える。だから自然の恵みも人間の良心も神が創造したのであって、神が存在することは疑い得ない。無神論では自然の恵み（自然善）と人の善き行い（道德善）が説明がつかない。

五鳥教あるいはゾロアスター教

しかし、神が存在することはわかったとして、それならなぜ世界に悪も存在するのか？という問いは残る。ここでわたしは悪神や魔王の存在を想定せざるを得ない。これはクシユナーと同様の苦渋の選択であるが、自ずと答えは導き出される。こういふと迷信のように聞こえるかもしれないが、これが非常に合理的で納得できるものとなっている。神も手を焼く同格レベルの魔神のような悪の親玉がいて、神の行う善を妨害、破壊している。神はこの宇宙をはじめ、善きことを創造するが、魔神はそれを破壊し、悪しきことを創造する。人には悪意を植え付ける。死や病や老いをもたらすのも、この魔神である。ところで、悪魔の存在証明はそのままこの世の悪、自然悪と道德悪であるということはいままでもない。しかし、それをも善神は修復したり、別の善きものに変化させようと対抗策を講じている。この部分が思し召しと言える。この善神と悪神の存在で、世界のすべてが説明がつく。先ほどの原爆やホロコーストや地震や病気、天災（自然悪）と人災（道德悪）がどちらも説明がつく。要は魔神があちこちで悪きをしているのである。しかし人は自由意志で、善につくか悪につくか選ぶことができる。魔神はあの手この手で人間を悪に引き入れようと誘惑している。その善につく勢力が強いほど、善なる神を信仰する人が多いほど世界は平和になり、最終的には善なる神が勝利して魔神は滅ぼされる。以上、わたしの結論である。ゾロアスター教に限りなく近く、我々の多神教にも近いものがある。ゾロアスター教では、善神はアフラ・マズダー、悪神はアンラ・マンユである。善の側には善なる神々諸仏が

いて、悪の側には悪しき邪神や悪霊がついている。非常に神話的で間違ったら迷信とも思われかねない結論に至った。決して妄想ではなく、純粋な理性で思惟した。善神はもちろんわたしにとっては五鳥大明神である。五鳥神話では鬼神や邪神の存在は説かれていない。これはわたしの独創であり、五鳥教の悪神として仏教の魔王・波旬はじゅんを据えることとする。奇しくも、アフラ・マズダーは翼を広げた姿で描かれている。さらに、アフラ・マズダーは毘盧遮那仏、大日如来とも同一視されていたようである。ゾロアスター教は、今ではインド北部の一部の人々にしか信仰されていないようであるが、類似した思索をした人間は比較的多くいるのではないだろうか。ゾロアスター教徒はイスラム教徒に虐待されたそうだが、どちらがジャハンナムに落ちるのかわからないではないか。ここにゾロアスター教の復興を確認するところである。小鳥の神々は「西域」から飛来したが、あるいはペルシアからではなかったのではないだろうか。かかる論は、多くの異論、反駁があるであろう。それでも今のわたしにはこうとしか考えられない。

ここは楽園などではない。パンドラの箱が開けられた世界なのである。

善きことは神様の御業、悪しきことは魔王の仕業なのである。善いことは神様のおかげと考えることで、他者に対しては感謝、自分としては謙虚でいることができる。悪いことは魔王のせいと考えることで、他者に対しては許し、自分としては罪悪感、後悔からの解放がもたらされる。

ゾロアスター教についてのエリアーデの言葉を引きたい。

「ゾロアスター教の改革の本質は、神の模倣（イミタテイオ・デイ）にこそある。人はアフラ・マズダーの例に倣うよう勧められるが、選択はその人の自由である。く彼は思惟によって世界を創造したが、これは無からの創造に相当する。く始原時にこれら二霊は選択をし、一方は善と生命を選び、他方は悪と死を選んだという。くこのことは、二霊―聖なる霊と邪悪な霊―が本性ではなく、選択によって異なっていることを示している。」

「要するに、善も悪も、聖なる者も破壊的悪魔もともにアフラ・マズダーから生じたのであるが、アンラ・マンユはみずからの意志でそのあり方と悪しき職務を選んだために、「最勝者」は悪の出現に責任があるとは考えられていない。しかし全智であるアフラ・マズダーは、悪霊がどのような選択をするかはじめから知っていたはずだが、それをやめさせようとはしなかった。これは神があらゆる種類の矛盾を超越していること、あるいは、悪の存在が人間の必須条件をなしていることを示しているのかもしれない。」

「根底から完全に新しくなった世界とは、実は、もはや悪魔の攻撃によって穢されることのない新しい創造を示している。」

「マズダー教神学によれば、時間は創造に不可欠であるだけではなく、アフリマンの破滅と悪の一掃を可能にするものでもある。オフルマズドは、実は悪を克服し、絶滅させるために世界を創造したのである。くそのために、もはや宇宙は循環するものではなく、直線的で、始まりがあつてやがては終わることになるのである。く人間の魂はオフルマズドのもつとも強力な味方に

なった。物質の世界では、人間だけが自由な意志を所有するからである。→要するに善・悪を選ぶ自由をもつおかげで、人間は救いを保証されるだけでなく、オフルマズドによる救済の業に協力することもできるのである。」

サオシユヤントⅡ救世主Ⅱザラスシユトラであるが、わたしにとっては預言者、あるいは小鳥の神にほかならない。

先のヨブ記において、ヨブは友人たちに「お前が悪いことをしたからだろう」と糾弾される（これがはたして本当に友人であろうか？ 少なくとも徳のある友ではない）。そして神に不平不満をぶちまけるが、ヤハウエはご自身でも如何ともしがたい存在について述べる。

「見よ、わたしが君と一緒に造ったかばを。」、「矢もわらくずと見なされ、投槍の騒音をも彼は嘲る。」、「すべての誇り高き獣の王である。」

混沌（悲運）の象徴、原初動物「レビヤタン」は、神も如何ともしがたい存在であり、「見よ、君の望みは空しく、彼を見ただけで人は打ち倒される。」ほどの者であるから、到底か弱き人間の立ち向かえる相手ではない。ヨブ記においても、ゾロアスター教のように、レビヤタンという魔獣を想定しているのである。

それから、五鳥大明神は医療神であり、一切の病を除くと誓われていることについてであるが、普通に考えれば世の中に病気はなくなっていない。むしろ現代でも病人だらけである。それはなぜかということは、すでに魔神の存在によって説明された。コロナウイルスという新たな伝染病も流行ったばかりである。しかし、小鳥の神の誓願が嘘だった、虚しいものであったということではない。というのは、目覚ましい医学の進歩によって、結核やハンセン病など、過去に不治の病だったものが治るようになったものも多いからである。さらに、それに伴って平均寿命も飛躍的に伸びているからである。死亡率の低下など、わざわざデータを示さなくとも論証されるものである。わたしを含め個別的に病気になっている人、今現在病の床にある人はなぜとthinkかもしれないが、全体的に見れば神の言葉は真実不虚である。推古天皇の時代から現代まで漸進的に神の約束は果たされているのである。現代でも治らない病気や障害も、いずれ一掃される日も来るであろうし、神の約束はこれからも果たされていくであろう。小鳥の神は臨終に「命根長養」と「五臓安寧」の守護神となると誓われたが、事実として長寿と健康をお守りになっているのである。かえって現代は、自殺や孤独死など精神の病で多くの若者が死んでいっている。今後は「心月澄明」も加えた心を支える方面にも力を入れていかねばならない。

空海はその著作で登場人物にこう言わせている。

「体の病気を治療するには三つの方法によらねばなりません。一つには医者、二つには処方、三つには薬です。病人がもしも医者を敬い、処方と薬を信じ、ほんとうに薬を服めば病気はたちまちに治ります。病人がもしも医者を罵り、処方と薬を信ぜず、すぐれた効目のある薬を服まなければ、どうして病気を治すことができましょうか。仏が生きとし生けるものの心の病気を

治されるのも、これと同じことです。仏は医師の中の王のような、教えは処方のような、理法はすぐれた効目のある薬のようなものがあります。この道理のとおりを考えめぐらすならば、（仏法というものは）あたかも薬を服むようなものです。教えによつて薬を服めば罪を滅ぼし、さとりをえます。」

だから我々は信仰を持って、清らかな心を持たなければならないのである。

哲学者は過去の賢者たちによる神の存在証明を整理している。

）

① 目的論的証明

自然の合目的性、美、荘嚴ということから、世界は最高の智慧をもつ神の創造であるにちがいないという結論を出すのである。すなわち世界にはいたるところに秩序と合目的性があるという一定の経験から出発して、秩序は事物にとって偶発的なものであるから最高存在体の実在を証明するのである。↓ 日月星辰、四時の運行が秩序立ってみごとにこなわれているという事実から神々の存在を論証することは、プラトーンも行なっていたことである。またウパニシャッドの哲人はこの事実にもとづいて不

壊なるものの実在することを説いている。神の英知にもとづいて神の存在を論証することは、アウグスティヌスの行なったこととしてよく知られている。

② 宇宙論的証明

神の存在の宇宙論的証明は、自然界においてもろもろの運動があるという事実から出発して、原動者ないし自己原因としての神が存在するということを推論するものであり、西洋中世ではトマス・アクィナスなどによって述べられた。

③ 存在論的証明

聖アンセルムスの主張したものである。すなわち、神は可能ながぎり最も偉大な対象である。さて思惟のある対象が存在しないとするれば、それとまったく類似してかつ存在するいま一つの対象は、より偉大である。したがって、あらゆる思惟の対象のうちもつとも偉大なものは、存在しなければならぬ。なぜなら、もし存在しないとすれば、それ以外になお偉大な対象が可能となるからである。したがって神は存在する。

④ 内省的証明

西洋には見出されない絶対者の存在の証明として、シャンカラは絶対者の存在の内省的証明を述べている。

「またブラフマンはあらゆる人のアートマンであるから、ブラフマンの存在することが確定する。なんとすれば、あらゆる人はアートマン（自己）の存在することを意識する、決して「われは存在しない」とは考えない。実に、もしもアートマンの存在が確定していないのであるならば、一切の人々は「われは存在しない」と意識するにちがいない。」

（ ）

⑤ プラグマティズム的証明

それだけではない。わたしはこれらに加えて、簡単にプラグマティズム的証明をしたい。まことに、神や仏が存在することによってだけ我々にとって役に立つだろうか？ はたして過去の我々の祖先たちが、そういった存在にどれだけ救われてきたであろうか。どれだけの人を死の淵から救ってきたであろうか。役に立つのならば存在するとして何の問題があるだろうか。ジェイムズによれば、役に立つ考えこそ真理なのであるから。

以上をもって、拙いながらも神の存在証明としたい。神の存在はもはや自明の理である。

ちなみに、哲学者は創造神の存在を否定している。とはいえ、彼はインド哲学の神の存在に好感を持っていると思われる。ただ彼は、この世の中はあまりにも不条理であって、悲惨な運命を辿る人が多いという現実に目を背けない。そして西洋の弁神論

を一蹴している。しかし、わたしはあくまでも小鳥の神のしもべであるから、どのような不条理があっても、自分がどれだけ不幸であっても愚直に神の存在を信じる。

ヨハネの黙示録の言葉を送ろう。最終的にはこのようにすべての病は癒やされる。

「その兩岸には命の木があつて、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。もはや、呪われるものは何一つない。」

この命の木は、わたしにとっては、小鳥の御神木「陰陽二股に分かれた杉の大木」にほかならない。

チャーリーブラウン「雨は正しい者にも不正な者にも降る。」

この世に悪があつても神は存在する。なぜなら、悪をもたらしているのは魔神だからである。たとえば、光や雨が善人にも悪人にも降り注ぐように。そのように、恵みも災いも受け入れられるものである。それゆえ、善なる神は存在する。

小鳥の神は、必ず魔王波旬との最終戦争に勝利する。そして我々は帝の皇軍であり、あなたは五鳥大明神の神兵である。

第五章 烏我一如の道

「神はおのおのの国民に、その国語をもって語る預言者を賜いたり。」

新渡戸稲造によると、コーランの言葉であるという。

エジプトのファラオ・アクIIエンIIアテンは祈る。

「御身は遠くにもありても、光は地に注ぐ。御身は人の顔に当たりても、その跡は見えず。御身のみわざは、なんとさまざまであらう！ それらは人の眼には隠されている。おお！ 唯一の神よ。御身のほかに神はない。」

そして、同郷の金子みすゞの有名な詩を引こう。

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、 お空はちっとも飛べないが、 飛べる小鳥は私のように、 地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、 きれいな音は出ないけど、 あの鳴る鈴は私のように、 たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、 みんなちがってみんないい。

彼女の想いと五鳥教は一致する。

五鳥教は宗教多元論を採る。小鳥神社は古くから両部神道・神仏習合の宥和の宗教だからである。まず、五鳥大明神は五色の鳥の姿をとって現世に顕現された肉体を持った神である。しかしその本体は、わが祖先の夢枕に現れて宣うたように、五智如来あるいは大日如来である。本地である五智如来が垂迹して五鳥大明神として日ノ本に飛来したのである。この本地垂迹説は、キリスト教の父なる神が受肉してイエス・キリストとして降臨したことと軌を一にしている。仏教の三身説、すなわち、法身・報身・応身の説で、法身である大日如来が肉体を持ってゴータマ・ブツダとして生まれたことともである。それと同様に、五鳥大明神も、本来の姿は叡智界の五智如来であって、五色の鳥としての姿は、衆生済度の御心から現象界に降りてこられているものなのである。ここでわたしは、単に類似性・共通性において同一視していると思われるかもしれない。確かに、こうした帰納法でも真理は導き出されるものではある。しかれども、何より世界の神々諸仏が同一であるということの証明になるものは、プロティノスのいうごとく、すべては唯一のひとつの存在から流れ出たものであるということである。空海はそれを大日如来が化身した姿といい、汎神論の白眉たるスピノザは、神の存在の様態の変容といった。そして、そういった存在がおしなべて我々衆生を、生きとし生けるものを救わんとされているということである。現代はとかく多様性といったものが重んじられ、普遍性というものが疎かになりつつある。わたしは社会に受け入れられず苦しんでいる少数派の人たち、マイノリティの人たちを守りたいと思うが、それゆえに国家や共同体が一体性を失い、崩壊してしまうのではないかと危惧している。多様性を尊重するといえは聞こえはよいが、我々は自分とかけ離れた人々に共感することはできない。そこで孤独や孤立、ひいては争いが生じてしまうの

である。もちろん相手を尊重することは大切である。ただ、相手を尊重することができない人を尊重する必要はない。特に政治や宗教においては、それが顕著である。だから昔から「政治と宗教と野球の話はするな」と言われているのである（野球はかわいいものであるが）。宗教においては自分たちの神仏や教えが正義であり、他宗教は邪教で嘘や間違いであると行って憚らない人たちもいる。嘆かわしいことに、人が大事にしているものを尊重できないどころか、違いを認め合うこともできない人であふれかえっている。我々は排他的な思想こそ排斥していかなければならない。すべての思想を通曉したわけでもないのに、一部だけを知ってそれを信条にして、他人にも押し付けるのは軽率で無責任である。なぜなら、それは不勉強ゆえに間違っているかもしれないから。小鳥は折伏の教えではない。摂受の教えである。このコーヒーを飲めとは強要しない。よかったらコーヒーはいいかがですか、と勧める。お前の飲んでいる水は毒だ。こっちの水を飲め、とは言わない。あなたの飲んでいる水もおいしいですね、わたしの飲んでいる水もおいしいです、というのが小鳥である。この論争に終止符を打つのは、多様性を認めつつ普遍性のあるもの、たとえば戒律や道徳、また先の演繹的な観念の共有である。一は多であり、多は一である。これは決して迎合ではない。詭弁を弄する輩の論は斬って捨てなければならぬ。認識論では、人それぞれ認知のずれがあるという。いうまでもなく、人と猫が見ている世界は違う。認知の歪みが大きい人は正さなければならぬ。プロテイノスがいうように、すべては「一者」から流出したものであるから。実に「神は多くの顔を持つ」のである。

なぜ世界が神であるなら、わざわざカラスの姿をとって現れているか。それは世界の聖性の象徴として、救済の約束をするために具体的な形をとって顕現されているということである。そうしないと人間は絶望してしまうからである。すなわち、五鳥大

明神がないとわたしが絶望してしまうのである。小鳥の神はわたしのために死なれて、わたしの守護神となられた。そしてただ一人わたしを選ばれた。法然の教えを親鸞がそうとらえたように、そのことを固く信じている。

預言者は神道に仏教や陰陽道を習合した。わたしの役目はキリスト教その他を習合することである。それが思し召しである。

エリアーデはいう。

「神はひとつであると同時に多数である。創造とは神の名と形態の増殖にほかならない。」

葉室頼昭はいう。

「共生は、自分のことを押し付けることではなくて、共に生きていくのに、お互いのことを考えて、一つになるということなのです。」

「日本人のもののせいしつは、かんしゃと共生なんだよ。かんしゃとは、人間は自分で生きているのではなくて、神さまや自然のおめぐみで生かされているから、そのことにかんしゃするということ。共生とは、相手と対立したりあらそったりしないで、相手の身になってそのしあわせを考える、ということなんだよ。」

「共生というのは人間同士も共生するし、人間と祖先、人間と神さまとも共生する。そして神さま同士もまた共生されるので
す。」

共生とはなかなか難しいものであるが、グローバル化が進み切ったこの世界で精神的な統合もますます必要となってくるであろう。

「捨てる神あれば拾う神あり」と言われるように、神や仏にも得手不得手があるものである。日本の八百万の神はそれぞれ個性があつて神徳に違いがある。仏教の各宗派の仏様にも願い事を叶えてくださるものもあれば、罪業のゆるしを与えてくださるものもある。罪の赦しといえ、いうまでもなくキリスト教の本分である。イスラームではこの世の苦しみが終わり、楽園アトーンで安楽に過ごせる。要は自分に合った神仏を選べばいいのである。それはとりもなおさず、当の神仏に我々が選ばれているということでもある。このように言ってしまうと、本書の役割が微妙なものになってしまうかもしれないが、わが五烏神のお力は、根本は病氣治しである。古文書にも「医療ノ神」であると明記されている。後代に至って保食神と習合され、五穀豊穡の神ともなっている。とはいえ、この宇宙の創造神であるから、もはや万能のオールマイティな神である。わたしは五烏神は少なくとも、病と死と喪失と苦難と孤独と罪から救うお方だと考えている。どれも人間にとって耐えがたい根本問題である。それゆえに尊い。

哲学の立場に、唯物論・实在論・観念論・唯心論とあるが、五烏教は観念論に近い立場をとる。というのも、伝説の内容的にもそうであるし、わたしは实在論のアリストテレスよりも観念論のプラトン派だからである。唯心論はこの世は幻（マヤー）

であると説くが、五鳥大明神は現世に肉体を持って現れているので、物質の存在は否定できない。また、世界は神の魂の展開なので、唯物論は当然退けられる。インド哲学で、ブラフマンのうちに生きること、「梵住（ブラフマヴィハーラ）」というが、五鳥教ではカラスの神霊のため、神のうちにあることを「鳥住」するという。

また金子みすゞの詩を引こう。

蜂と神さま

蜂はお花のなかに、お花はお庭のなかに、お庭は土塀のなかに、土塀は町のなかに、町は日本のなかに、日本は世界のなかに、世界は神さまのなかに。そうして、そうして、神さまは、小ちやな蜂のなかに。

彼女は難解な哲学など知らなくても、直感的に普遍的真理を見出していた。

五鳥神は後代に保食神と習合されているが、この神は古事記においてはオオゲツヒメという女神である。彼女は荒ぶるスサノオによって打ち殺されたが、その亡骸から我々の命を支える五穀が生じた。この神話は各地に見られる巨人解体から世界が生じたという神話と類似するものであるが、いずれにしても小鳥の神は世界の礎となっておられるのである。

エリアーデはそのことについて、インドラ神のヴリトラ退治に言及している。

「世界と生命は無定形な原初存在を殺すことによって、はじめて誕生することができたのである。」

アントニオ猪木の言葉を送ろう。

「川はいくつにも分かれるが、最後は同じ海に行きつく。」

哲学者の言葉も引く。

「若干のインドの思想家は、もろもろの解脱した心は絶対者と一体となる。それはもろもろの河川が大海に合流すると名称と形態とを失うようなものである、と説いた。」

「真理を見る立場に立つと、既成の宗教のどれにもこだわらなくなる。どの宗教に属していてもよい。しよせんは真理を見ればよいのである。」

さらにユゴーも同様の発言をしている。

「筆者は個別のいろいろな宗教には反対だが、宗教そのものには賛成する。」

たとえ歩む道が違って、いつかは山の頂上でまみえることができるであろう。神や仏を信ずることができるようになることは、「大海中の盲亀、浮木の穴に入るが如し」であることにほかならない。

哲学者は普遍的理法についてこう述べる。

「仏教では人間がいかなるとき、いかなるところにおいても遵守すべき永遠の理法があると考えて、それを「法」と呼んだ。」

これを西洋では「ロゴス」といい、中国では「道（タオ）」という。すなわち、ロゴス⇨ダルマ（法）⇨道である。ちなみに、ヤスパースは紀元前五世紀頃を、人類の精神的革命期と捉えて、その時代を「枢軸時代」と呼んだ。ギリシアではソフィストと呼ばれる弁論家たちが、インドではシラマナという思想家たちが、中国では諸子百家という学者たちが綺羅星のごとく現れた。

小鳥の神が「この朽木をもって、わが姿を刻み」と命じられていることについて。

コーランでは偶像を「でく」といって蔑むが、時には偶像崇拜が必要な理由について述べる。パニック障害になってわかったが、追い詰められて今にも死にそうなきにはイメージが必要である。絵画でも聖像でも、とにかく思い浮かべられるものがない。もしなければまるで雲をつかむような、実態のない祈りになる。無に祈っているようだ。苦しい時、人はただ神様助けて！としか祈れない。普段の小難しい祈りはできない。そんな時、特に顔がイメージできなければさすがることができない。だから偶像は必要であるし、何よりも、小鳥の神がわが祖先の夢に現れて「わが神像を刻め」と神勅を下されているのであるから、わたしはそれを信ずるところである。日本の八百万の神はもとより、世界の神々は実は五鳥大明神が造られた天使であって、すべて

の天使たちは五鳥大明神に収斂するひとつの存在である。神や天使たちは、あらゆる民族に向かって対機説法を行い、それぞれの性格や気質に応じて、ある民族には偶像を作れと、ある民族には偶像を作るなと命じていると考えられる。それはどちらが優れているとか劣っているということではない。そもそも、偶像という言葉自体がすでに蔑称であるからよくない。仏像や神像、聖像などと呼ぶべきであって、一神教や日蓮系の信者に顕著な、他者の気持ちを考えず、他宗教を尊重しない、言われていることに無批判に従う愚かな人々にかまけている余裕はない。それは宗教に限らず、自分の頭でものを考えない多くの人々から生じている。彼らは自分たちが正義だと信じ込んでいるので、平気で自分がされたら嫌なことでも人に対してする。宗教以前の問題であることも多いのである。けれども、どういうわけか、これは日本人の一神教の信者に顕著な現象であり、むしろ海外の人々の方が寛容である。宮島に参詣すれば、キリスト教徒であろう白人の方々や、ヒンドゥー教徒であろうインド人の方々が、日本の作法に倣って敬虔に祈りを捧げているのを見かける。わが小鳥神社においても、あるとき、フードを被ったイスラム教徒らしき東南アジア系の女性が自転車を停めて、山の麓から小鳥に向かって祈っているのを見かけたことがある。他にも、出稼ぎの労働者らしき男性三人組がよく登って参拝されていた。おそらくはインドネシアの方であったのだろうが、不寛容とされているイスラームの方でさえ他国の宗教には敬意を払うのである。我々日本人は元来寛容な民族と言われてきたが、もはや民族性が劣ってきているのではなからうか。そもそも、神や仏がそのような心の狭い者であるわけがないのである。

わが預言者は五鳥経の冒頭において、こう宣言する。

「そもそも神社というものは、天地そのものを模型として表したものである。神は天地の間にあまねく満ち満ちていて、万物を造られ、すべての民を守護される。そして、天地に満ちる元氣も、すべての生きとし生けるものも生命を持たないものも、何ひとつとして神に造られていないものはない。」

さらに、神は夢告する。

「わたしが五色を現しているのは、この世界の空劫くうけつが終わり、次の世界の成劫じようけつの初めの時、黄なる風を生じて、それが次第に五色の風となるからである。それは、すなわちわたしの魂魄こんぱくである。それゆえ、天地の間、無量無辺むりようむへん、森羅万象しんらばんしょうのうち、何ひとつとしてわたしの神力じんりきによらないものはない。」

この部分が、わが祖先の枕の夢に現れた神からの神勅である。五鳥大明神は創造神であり、また宇宙そのものであることが了解される。神の「魂魄」が宇宙の始まりのエネルギーであり、また天地創造の展開であるということは、神の魂魄は宇宙の形相・アイデアであるということである。魂魄は五智であり形相である。とりわけ、五智のうちの中心、「法界体性智」がすべての源である。そして、質料としては五行や五大、五元素がそれにあたるものである（中国において、五行説は仏教の五大と同一視された）。そのことは実際に五色の鳥として顕現された五鳥大明神が体現されていることである。ここでいう形相エイドスや質料ヒュレイという言葉は、アリストテレスの哲学において、それぞれ設計図と材料という程度の意味になる。たとえば、家を建てるときに、棟梁が考えた設計図がなければならぬし、それを実現するためには木材や石材などあらゆる材料がある。本書は万人を救うために書か

れるものであるから、煩瑣な哲学を体系的に論ずるのは差し控えたいと思う。危急の状況にある人に、そのようなものは全く救いにはならないし、何の意味もないであろうから。そういった形而上学的なことは、過去の偉大な哲学者たちがすでに成し遂げていることである。我々は形而下に存するのであるから、あくまで現実的な事柄を論じなければならない。形而上のことは、それこそ形而上の存在となったときに神が明らかにされるであろう。少なくとも、一切衆生の命がことごとく世界に依存しているということは、その世界もまた命を持っていると言わざるを得ない。我々は仏教の「毒矢の喩え」として伝えられていることに思いを馳せなければならない。曰く、ある人が弓矢で射られた。そこでその矢がどこから放たれて、誰が射ったのか、どんな弓であるのかを調べるのではなく、何よりもまず矢で射られた人の治療に努めなければならない。その病とはいわゆる四苦八苦であり、また三毒である。だからブツダは形而上学的議論を戯論といって沈黙したという。そのことを「無記」という。

といえども、これだけは述べておかねばならない。五鳥教はいわゆる汎神論と呼びうるものである。とりわけヒンドゥー教のウパニシャッドの哲学、中でもシャンカラの哲学と極めて親和性が高い。曰く、宇宙の根本原理・ブラフマンがあり、それと我々の真の自己・アートマンは一体であるというものである。それを「梵我一如」という。平たくいえば、神と我々の靈魂は一緒だということである。ここで大事なものは、心や精神と、魂や真の自己とは区別されるものであるということである。ましてや情念とは区別されなければならない。仏教の六識における意（心）は物質的器官である。なにものにも汚されない真の自己があるのである。ウパニシャッドでは「汝はそれである」、「われはブラフマンである」という聖句が最重要視されている。それは我々の本来の自己が、そのまま絶対者にほかならないという驚異的な言葉である。『リグ・ヴェーダ』では「実にこの唯一なるもの

が宇宙全体となった」という。ギリシアのクセノファネスも「有は唯一にして、しかも万有である」と述べている。天上のものに憧れたプラトンも、アイデアがそれを分有するもの、つまりこの世界に偏満していると考えた。バラモンの哲学者がブラフマンとの合一を目指し、道家が「道（タオ）」に還ることを目指していたように。五鳥神も、預言者が述べているように、その魂は天地に満ち満ちているものであり、「一切の有情非情ひとつとして、神明の変作にあらずということなし」であるから、とりもなおさずブラフマンは五鳥神にほかならない。その神のうちで我々は生かされているに過ぎない。いや、我々のうちに神が生きておられると言った方がいいかもしれない。ともかく、神と我々はつながっており、本来は一体であるものである。それが我々人間の愚かさ、神道でいえば罪けがれ、仏教でいえば煩惱によって本来清浄なる心が曇らされている。他者と対立しているという誤った見解、本来の自己を忘却して自我があるという幻想、そこからすべての不幸や悪が生じてくるのである。この思い違いから、あらゆる苦しみが出てくるのである。サタンや魔王波旬はそこをつけ狙っている。それゆえ、我々は努めて自分の心が清らかであるように心がけなければならない。アトマンというのは、ギリシアでいうならば「プシユケー（氣息）」に等しい。仏教では我々には「仏性」、すなわち誰でも仏になりうる可能性があり、それはダイヤモンドよりも硬く、決して壊されないものであるという。神道においても「神性^{かむさが}」という言葉があるが、とりあえずこの仏性を我々はアトマンと呼ぶことにしよう。なぜなら、我々は聖徳太子のいうように、ただの凡夫であって自分を神と称するなど甚だしくおこがましいことだからである。仏、ブツダには誰でも努力次第でなれるものであるから。

仏教聖典から仏性について引く。

「すべての人々には清浄の本心がある。それが外の因縁によって起こる迷いの塵のために覆われている。しかし、あくまでも迷いの心は客であって主ではない。この縁の来ること去ることに関係なく、永久に動かず滅びない心、これが人の心の本体であって、また主でもある。縛られた見方を外の縁に返し、縛られることのない自己の本性に立ち帰ると、身も心も、何ものにも遮られることのない自由な境地が得られるであろう。」

しかし、わたしは仏性とは反対に、人間には「魔性」ともいうべきものがあると考えます。それは孟子が性善説を、荀子が性悪説を唱えたことと同義である。我々は良心と利己心のどちらも持っているから、両説は両立するものである。そしてそれについては、先の四章で論じられた。

葉室はいう。

「神さまのおこころからすべてのものが生まれ、そして神さまと人間は全部つながっているということですから、すべてがつながっているのですから、あの世で祖先が幸せになってくれなければ、我々もまた幸せにならない。」

「この世界はすべて無から、神さまのお心とムスビの働きによって現れてくるのでありますから。宇宙には神さまの姿以外は存在しないということになります。けれども、多くの人はこの真実の仕組みを知らず、悪が実在すると考えておりますので、現在のような争いや我欲などに満ち溢れた世界が現れてくるのだと思います。」

ユゴーはいう。

「わたしたちの外部に無限があると同時に、わたしたちの内部にも無限があるのではなからうか？　この下方の自我が魂であり、この上方の自我が神なのである。思いをこらすことによって、下方の無限を上方の無限と触れ合わせることに、これが祈ると呼ばれることである。」

さて、ここで五鳥神と仏性を合一させていく道が明らかとなった。すなわち、本書のタイトル『うがいちによ鳥我一如みちの道』である。神に自己を一如させていくのである。それはいかにして達成されうるか。ここでまず確認しておきたいのは、この世界は神そのものであって、我々個人個人もその中で生かされ、すべての生きとし生けるものもつながっているということである。仏教でいえば「縁起」という言葉で言い表される。すべてががつながっていて連続しており一体である。それが何を意味するか。それはすべての存在に対する愛情である。なぜなら、世界は自分自身であるのだから。スピノザのいう「神即自然」ということである。我々は神の体の一部分なのであり、それは他者も同様である。対立すると思われる他者も実は自分自身なのである。それゆえ、自己と他者の利害は常に一致するものとなる。他者を傷つけるということは、究極的には自分自身も傷つけることになるのである。反対に他者がされて嬉しいことをすれば、自分にも陰徳として良き報いがある。人が泣けば自分も泣き、人が喜べば共に喜ぶ。他者を尊重し、共感していく。相手の立場に立って考えるということが大切である。そういう人間になっていく。抽象的な思弁も世界の理解に必要なことだが、こうした実践的な行為も大事なことである。

それをキリストはこう実践している。

「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何の関わりもないことになる。師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」

イスラエルのこの当時、人の足を洗うという行為は奴隷のする仕事であった。それを神がなされているのである。

ユゴーはいう。

「人生最上の幸福は、愛せられているという確信にある。直接自分自身が愛せられる、いや、むしろ自分自身の如何にかかわらず愛せられるという確信にある。」

そして孔子の言葉で戒める。

「諸君は、言葉が実行よりも立派なことは恥辱である、と銘記してほしい。」

「仁の道は遠くにある理想ではない。いま自分が仁を行おうと思えば、仁はすぐそこにあるのだ。」

また空海も次のようにいう。

「そもそも仏の教えは、はるか遠くにあるものではない。それは、われわれの心の中にあつて、まことに近いものである。さとの当体である真理は、われわれの外部にあるのではないから、この身体を捨てて、いったいどこにそれを求め得ることができよう。」

神と世界、他者と自己、全ての存在と合一すること、これが五烏教の真髓である。これを体得すれば、輪廻サンサーラの苦しみから解脱モクシヤすると言われている。このことを悟ることが救いの道である。形而上、叡智界においては、即因果応報なのである。形而下、現象界ではすぐには報いが現れないかもしれないが、形而上、つまり神様はすべてお見通しなので、時間の差異はあれど必ず報いがある。目に見えない世界では因果律というものは速やかに働き、結局この目に見える世界に生きる我々を逃しはしない。「天網恢々、疎にして漏らさず」という。このことをよくよく肝に銘じておくべきである。

しかれども、神仏は憐れみ深いお方なので、形而上での裁きと同時に、罪の赦しも決定している。それはとりわけ、キリストの十字架や阿弥陀如来の本願によって保証されている。当社の五烏神の御誓願も、病の癒しのみならず、それと同一である。わたしは考えている。死ぬまで懺悔の心を起こさないのならば、あるいは地獄の責苦を受けるかもしれないが、懺悔の心を起こせば神は必ずお許しになり、天国や浄土に迎えてくださる。究極的には、懺悔の心を持たない、いや持てない人間の宿業といったものも神はすべてご存じである。我々は必ず救われるのである。

哲学者はいう。

「自己が救われるということは、他人を救うという働きのうちのみ存する。これは自他不二の倫理からの必然的帰結である。」

それゆえ、わたしは序論において、苦悩にある者も人の役に立つことができると言ったのである。

この黄金律を在家の覚者、維摩菩薩はこのようにいう。

「今この世界は衆生病むをもってこの故に我れ病む。もし一切衆生の病いを滅せばすなわち我が病いも滅せん。衆生病む時はすなわち菩薩も病み、衆生の病い癒ゆれば菩薩もまた癒ゆ。菩薩の病いは大悲をもって起こる。」

また汎神論、あるいは即身成仏についてこういわれている。

空海「まさに次のように理解しなさい。密教の修行者は、自らが金剛界の大日如来にほかならない。自身が金剛になれば、堅固、かつ確實であり、傾いたり、壊れたりすることはない。私は、そのような金剛の身体となろう。」

立川武蔵「この飛躍をわれわれの現代の言葉で語るならば、それは「すべてに対して聖なるものの価値を与えること」である。密教はすべてのものが大日如来の働きであるという立場に立つのである。」

華嚴経から引く。

「ひとつの毛穴の内に思考することができないほど多くの世界がある。微細な塵の数にも等しいほどであって、いろいろ存在している。その世界の一つ一つに、大日（遍照）尊がましまして、人々のつどいの中にあられて、最上の教えを宣べられている。そして一つの塵の中に大小の世界があり、さまざまに相違していることは、また無数の塵のように多くである。すべての世界に存在する塵の、その一つ一つの中にみな仏が入っておられるのである。」

この教説は、先の金子みすゞの詩と軌を一にするものである。

五智のうち第五の智慧については、末那識、阿頼耶識の次の九識目に、第五の仏智として法界体性智が充てられている。

以上のことを踏まえて、黄金律ならぬ金剛律について述べよう。欲望を満たすためにそうするのではなく、罰せられることを恐れてそうするのではなく、ただ言われるがままにそうするのではなく、そうしないと非難を浴びるであろうからそうするのでなく、そうすれば称賛が得られるであろうからそうするのではなく、そうしないと良心が痛むからそうするのではなく、死後の果報を気にしてそうするのではなく、「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。」、「与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。」ゆえにそうするのではなく、そういった自分にとっての利害を考えた、あらゆる損得勘定から離れて、烏住するが故に、自己と他者の利害は同一であるが故に、「一切は自分自身であるが故に」そうするのである。これが汎神論によって導き出される金剛律である。これに勝る道德への服従の根拠があるのか。カントのいうあの定言命法という「道德律への尊敬」よりも、よほど直感的で実感があり、より善行に対して積極的になりうる。世の啓示を受けたといって慈

善を行う者たちは、このような全く無私の、他者に対する真摯な共感のうちにあるのであろう。「大いなる利己心」、「極大化された自己愛」とでもいうべきか。法や道徳に従う動機として、これを「信じ」なければ成立しないものだが、最も清浄で高貴と思われる道徳律である。

弁神論・神義論は長年わたしの頭に去来する問題であった。しかしそれはまさに、自分がいたらない、浅ましい、徳のない人間だから、小鳥の汎神論と一致できなかったのである。いたらないから世を呪っていたのである。天神地祇に罪責はないことはいうまでもない。今となっては、自分は神様に病を治してもらうに値する人間か？と訝しむようになった。

イスラームにおける類似した神秘主義者たちの境地を書いておく。

聖女ラービアはこのようにいう。

「おお神よ、もし私が地獄の恐怖からあなたを礼拝するのでしたら、私を地獄で焼いてください。もし私が天国が欲しくてあなたを礼拝するのでしたら、私をそこから追放してください。しかし、もし私があなたご自身のためにあなたを礼拝するのでしたら、どうかあなたの永遠の美をお取り下げにならないでください。」

先に批判したアルIIガザリーも晩年はスーフィズムに熱中したそうである。

「彼ら（スーフィー）の目には一者以外には何もも見えないし、また自己自身すら見えない。彼らは自己自身から死滅している。他を見ることから死滅している。神以外の何も心の中に入り込まないように心掛けねばならない。」

ルーミーに代表されるスーフィーたちの精神的段階は次のようなものである。

タハツルク…人間的属性をすべて死滅させ、神的属性を獲得すること。

タハツクク…自己の本質を死滅させ、自己の中で自分が絶対者として一つであることを悟得すること。

タアツルク…これはファナー（死滅）のあとにくるバカー（存続）の状態。「絶対者の行為の中への自己の行為の死滅」と言われる。存在しているのは自分ではなく、絶対者そのものであると意識する。何をし何を見ても、それをするのは自分ではなく神である、との意識である。こうして聖者性（ワラーヤ）が完成する。

これこそ真の法悦である。まことに、このような人々をこそ神は喜ばれるのである。

平田篤胤「誰も誰も、生れながらにして、神と君と親とは尊く、妻子のかはゆいということは、人の教へを借りんでも、見事に知って居る。」

葉室はいう。

「この世の中の仕組みというのは、全て循環で成り立っているのであって、捨てるという仕組みにはなっておりません。だから消すとか除去するということではなくて、素晴らしい神の力が体のなかに入ってくると、いままでの罪穢れがなくなるのではなくて、それが今度は自分を生かす素晴らしい力に変わってくる。それが被いではないかと思うのです。」

ユゴーはいう。

「海よりも壮大な光景がある。それは空だ。空よりも壮大な光景がある。それは人間の魂の内部だ。」

さらにジェヴェールにバルジャンに対して感慨の念を漏らさせる。

「あの惨めな男（ミゼラブル）が崇高な人間だと認めざるをえなくなった。慈善をほどこす犯罪者、情け深く、優しく、人助けをし、寛大で、悪に報いるに善を、憎しみにたいして赦しをもってし、復讐よりも憐憫をよしとし、敵よりもわが身を滅ぼすことを選び、じぶんを打ったものを救い、徳の高みで跪き、人間よりも天使に近い徒刑囚！」

「神による正義は人間による正義とはどうやら逆方向のものらしいということ。」

さらにユゴーは続ける。

「愛とは唯一無二の法悦である。愛のほかは、すべてが涙である。愛すること、あるいは愛したこと、それだけで充分なのである。人生の暗いひだのなかには、それ以外の真珠は見いだすべくもない。」

「良心は底なしなのだ。それは神に他ならないのだから。」

すべての生きとし生けるものに対する愛情を持つこと、これこそが法悦である。

以上の宗教的倫理・道徳は、前述の形而上学的裏付けがあるため、決して虚しいものではない。むしろ、この根底的な法に則つて世界や人類が生活すれば、この教えを世界中の人々が受け入れるなら、世界は一瞬にして平和になる。だから五鳥教は単なる村の祠から世界宗教となりうるのである。世界は戦争に限らず、家庭や社会においても争いが尽きないものである。ここで敵をも受け入れていく「怨親平等」の観念、キリスト教が説く敵をも愛するということがいつそう大切になってくるであろう。

ここにおいて、四章におけるゾロアスター教的二元論と、本章におけるスピノザ的汎神論、あるいは一元論は矛盾せず、止揚（アウフヘーベン）する。二元論においては善悪は分かれたれ、神と波旬は対立する存在だが、五鳥汎神論においては、五鳥大明神は善悪や美醜を超越する存在であり、波旬さえも神の慈悲の御心が表れた五色の翼のうちに包まれる。現象界の時間の中では戦いがあるが、叡智界の永遠の中では平安があるのみである。真相は波旬という悪の実体は存在せず、それは仮のもので神のうちにある、ただ神の唯一の実体があるのみである。最後は、五鳥神は波旬をも滅ぼすのではなく、赦し包み込むのである。波旬

はジャヴエールのように、バルジャンの慈悲によって剣を収めるのである。神の五色の光は、深い闇の中にいる波旬さえも照らす。これこそ終局における思し召し、また烏我一如と言わなければならない。

つまり、先のジャヴエールの叫びは、ザラスシュトラの境涯なのであり、バルジャンの境地は五烏大明神の御心なのである。

マヌ法典より

「一切の生きもののうちに自己を見、また自己のうちに一切の生きものを見て、アートマンを祭る者は絶対の自由に到達する。」

さらに哲学者の言葉も引く。

「人が一切の生きとし生けるものは自分自身にほかならないと体得したときに人はもはや利己的に行動することなく、一切の生きとし生けるもののために活動することとなるのである。」

哲学者が指摘しているところであるが、以上の観念の違いから、西洋人が合掌するのは神に対してだけであって、インド人や南アジアの人々は互いに合掌するという。どちらが平和により近い思想かが人をして現れているであろう。

ヤージニャヴァルキヤ「実際に、夫を愛するがゆえに夫が愛しいのではない。アートマンを愛するがゆえに夫が愛しいのである。実際に、妻を愛するがゆえに妻が愛しいのではない。アートマンを愛するがゆえに妻が愛しいのである。」

このように、真実の愛というものは、対立するものではなく完全に一体化している。

またエリアーデは核心的なことを述べる。

「自己が自由で永遠で無為であると理解したその刹那に、われわれの身にふりかかること、苦、感情、意志、思考等々はすべて、われわれとは無縁なものになるのである。われわれが、苦は精神の外側にあるもので、人間の「個性（アスタター）」にのみかわるものだと理解した瞬間に、苦はおのずから消滅する。」

セネカはいう。

「われわれが苦しむのは土地の欠陥のせいではなく、われわれ自身の欠陥のせいだという事実を知らねばならない。」

葉室頼昭はいう。

「罪・穢は全部「我」によっておこってくるのですね。我欲があるから、いわゆる病気になったり、いろいろな悩み、悲しみが出てくるのです。だから、我欲を祓いなさいというのが「祓い」ということです。」

「悪いことが見えるというのは、自分のこのころのなかに悪があるから見えるわけです。昔から「聖人は悪を見ず」とよく言いますが、自分の体のなか、このころのなかに悪のない人は悪が見えないということです。」

けれども、エリアーデはこのような救いようなないことも述べている。

「たしかにすべての人が、潜在的には仏陀としての本性をもっている。しかしその仏陀性（仏性）の実現は、各人の宿業の方程式に依存しており、つまり各人の無数の前世の結果である。」

ここで言っていることは、歎異抄における親鸞の言葉と呼応している。

『レ・ミゼラブル』において、修道女がこう書き綴っている。

「説教も、教訓も、暗示も差し控える、そのような思いやりのなかにこそ、なにか本当に福音書の教えにかなったものがあるのではないでしようか？」

我々は時に、悩み苦しめる人に言葉をかけるよりも、そばに寄り添い傾聴するだけの方がよい場合もある。

先に形而上学については差し控えたが、重要なことは説き終わったので、少しばかり書いておく。

アリストテレスの『形而上学』から抜粋する。

「動かされないで動かすところのある者があり、これは永遠的なものであり、実体であり、現実態（エネルギー）である。く自らは不動でありながら動かすある者が存在しており、現実態において存在しているから、このある者はけっして他ではありえない。く神は永遠にして最高善なる生者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属する。くある永遠的で不動な、そして感覚的事物から離れて独立な実体が存在するということは明白である。くあらゆる存在の第一のもの（窮極的原理）は、それ自体においても付帯性においても不動なものでありながら、しかもあの天界の第一の永遠的で唯一の運動を動かす者（第一の不動の動者）である。」

実体とは、他の何ものにも依存せず、それ自身によって存在するものである。

空海は次のようにいう。

「あらゆる存在は、多くの（原因や）条件から必ず生じているのであり、このように（原因や）条件から生じるものには、すべてに始原とか、根本にあたるものがある。いま、ここで、ものを生み出す条件を観察してみると、同様に多くの原因や条件から生じていることがわかる。このように、次から次へと変化して展開する（原因や）条件を遡及していくと、最終的に根本となるものはどのようなものかを見出すことができるのであろうか。このように観察するときには、本来生じたり減したりしないあり方（本不生際）という究極的なあり方を知ることになるのである。これこそがあらゆる存在の根源である。くもし本来生じたり

滅したりしないあり方という究極的なあり方を見る者は、ありのままに自己の心を知ることにはほかならない。そして、自己の心をありのままに知ることは、すなわち、仏のさとり智慧（一切智智）と異ならない。そのために、大日如来は、この阿字の一字をもって自らの真言としたのである。」

両者ともに、宇宙の第一原因について論じているが、同様の思索をしている。よく仏教には実体の概念はないというが、絶対者を指定する時点で大して変わりはない。西も東も、神も仏もおおよそ一致するものである。五鳥教では、それは五鳥大明神であり、祖先の夢枕に現れた五智如来、あるいは金剛界五仏にほかならない。ところで、時間というものは、必ず運動によって生じるものである。ここでは天地開闢の始まりの運動が生じせしめたといえる。それを五鳥神は、宇宙の始まりに「黄なる風」をもって生じせしめ、それが「五色の風」となったと表現しているのである。極めて神話的な表現だが、黄なる風とは五智のうちの法界体性智のことで、五色の風は他の四つの智慧、あるいは物質的な五元素のことである。つまり、イデアから現象界、形相から質料に至るまでの創造の過程を表しているのである。

春秋戦国時代から続く陰陽五行説をまとめた隋の蕭吉しやうきつは『五行大義』を著し、その冒頭においてこう表現している。

「五行とは、万物を生成するもとであり、人の道の始めである。天地間のあらゆる物は五行の変化を受け、全ての霊は五行に感じそれに通ずることによって生ずる。五行は、陰・陽にもとづき、精霊と形体に散らばり、天と地に周くゆきわたり、鬼神の世界と人間の世界におよんでいる。」

これは東洋における哲学的な天地創造の説明であり、もはや五行は単なる物質ではなく、五智に近い形而上、靈的な段階にまで至っている。蕭吉は五行をアイデアや形相、「黄なる風」が吹き起こった後の五色の風と表現した五鳥伝説と並ぶものとしたのである。宇宙の運動が静止したとき、すなわち終末のとき、コーランにいう「いやはての日」には時間は止まり、我々は永遠に住するのである。それは元にしたゆりかご、神の御元に還るといふ魂の回帰にほかならない。

わたしは物理学や天文学については、ほとんど無知に等しいが、多少の宇宙論の本は読んだことがある。そこでは、ビッグバンからビッグクランチに至るまでの理論が述べられていた。エントロピーやダークマターなど、およそわたしには畑違いのことが書かれていたが、それは決して五鳥教と矛盾するものではないと受け止められた。ビッグクランチの後に、次の新たな宇宙の生成の可能性が説かれていたからである。これは四劫の概念と一致するものであって、近現代の科学者たちが苦心して解き明かしたことが、古代の思想家たちの直感や思索とも一致しているといえよう。ちなみに、葉室頼昭は自著においてたびたび、古事記の神話と湯川秀樹などの物理学者の論説を結びつけているが、わたしにはその真偽のほどはわかりかねる。宇宙の始まり、天地初発のたまゆらには何があったかということを通じて過去の賢人たちは考えてきた。仏教では有でもなく無でもない「空」こそがそれであると説くに至った。ナーガールジュナ（龍樹）の『中論』で詳しく論じられていることである。ここでまた哲学者の言葉を引こう。

「現象界の諸相はそのとき存在しなかったのであるから「有ではない」と言わなければならない。しかしまたそれから現象界の諸相が現れ出てくるのであるから、それを単なる「無」と呼ぶこともできない。それは何かしら積極的な意味を持ったものでなければならぬ。そこで宇宙の最初の根源者を「有でもなく、無でもない」と言わなければならない。また現象的な物体があったとか、活動があったとかいうことも言えないのである。」

また、ヨハネによる福音書で人口に膾炙していることであるが、宇宙の始まりには「ことば」があったという。神の言葉、法（ロゴス＝ダルマ＝道）というのは不滅であり、宇宙の生成と破壊を超えて存在するものである。

言霊については神道者の言葉を聞こう。

「昔から言葉には霊力があるんです。だからいい言葉をいえばしあわせになるし、悪い言葉をいえば不幸がやってくる。私は宇宙の最初の心がこの地球上に言葉というものを必要とした。そのために人間を進化させたと考えているからです。人間に進化したから言葉をしゃべったのではない。言葉が必要だった。そのために人間を進化させたんだということです。」

「言葉というのは何度も言いますが、いわゆる神の心を表現するものなんです。人間の意思を伝えるものではまったくない。」

「悪いときにもいいと言いなさいというのは、なぐさめとか、そういうものではなくて、言霊の力によって現実にならざるよということなんです。いくら大変で苦しくても、悪いことばかり言っていてはいけません。」

このように、わが国ではロゴスに該当するものに言霊があるのである。人に言い聞かせる言葉であれ、自分に言い聞かせる言葉であれ、神に向けた言葉であれ、善き言葉を使えば実際に状況は好転する。少なくとも自らの心は平安であることができる。

「口は災いの元」であるが、逆に言えば「口は幸いの元」なのである。

先に喪失について述べたが、今度は我々自分自身の死について論じることにしよう。我々は皆ことごとく、死という時限爆弾を抱えて生きている。五鳥教では、神が中有界に留まっておられ、守護神とされている。小鳥の神は、いわゆるエリアーデのいう「死せる神」「苦悩する神」である。神とてこの理から逃れることはできない。しかれども、なぜ神が中有に留まっているかということ、死なれたのは受肉した形での存在形態であって、現世にいる我々を救わんがために肉体を持って顕現されたからである。本来の姿、叡智界における「法身」としての神は死んではない。それは不滅であり常住で、神には永遠に寂靜が存する。この中有という言葉は、仏教の四有という概念に由来する。チベットの『死者の書』では「バルドゥ」という。つまり、五鳥教は輪廻転生説であることがわかる。それゆえ、我々も死ねば生まれ変わって新たな生を送ると考えられる。しかれども、わたしは、小鳥の神を信仰する者、五鳥教徒は、死後は神と同様に中有に留まって、神や祖先、生前に縁があった先立った者たちと共に過ごすと考える。なぜなら、五鳥大明神は我々衆生を憐れむ慈悲の御心から中有界に留まっておられるのであって、その神を愛する者たちは当然そこに迎え入れられるだろうからである。つまり、五鳥教徒は神の恩恵で、輪廻から解脱して迷いの世界を離れるのである。そして、中有の期間が終わり、世界の終焉が来るとき、「いやはての日」に天使たちのラツパが吹き鳴らされるとき、我ら五鳥教徒たちは最後の審判を免れ、五鳥浄土ともいうべき完全なる世界に住し神のもとで憩うと考えられる。いわ

ばミゼラブルは、苦難の人生の代わりに最後の最後でチートすることを特別に許可されるのである。先の四有と四劫という概念は、五鳥教では軌を一にするものである。すなわち、神の一生が宇宙の一生なのである。それは一神教に見られる直線的な時間ではない。かといって東洋的な循環型の時間でもない。ニーチェのいう永劫回帰、完全な円環でもない。真相は「螺旋型」なのである。螺旋は円を描きながら、端と端を伸ばせば直線である。循環してはいるが、やがては最後のときがやってくる。我々には祖先や前世と全く同じ個体というものはありえない。一方で、過去生を抜きにして全くの単独で現世に生を受けたわけでもない。それゆえ、この世界は完全な円でも直線でもない。この世界は螺旋階段であって、回帰かつ創造なのである。我々は幾たびも輪廻を繰り返して、次第に終末に近づいているが、それは最後に神にまみえるときまでの魂の試練なのである。我々の存在というものは、ふざけていえば蚊取り線香なのである。螺旋階段を登っている途中であり、登り切った先に神が待ち受け、自らのすべての過去生の総和が問われるのである。存在とはかくのごとき永遠のものであるから、できるだけ神を畏れ慎んで生まれ変わり死に変わりして過ごさなければならぬ。

劫（カルパ）というのは、仏教思想で天文学的な時間の流れのことである。ヒンドゥーでは「ユガ」といわれ、やはり四つの時間に区切られている。すなわち、「クリタ・ユガ」「トレーター・ユガ」「ドヴァーパラ・ユガ」「カリ・ユガ」である。この四つが一巡すると一マハーユガといい、千マハーユガを一カルパ（劫）という。これは人間の時間で43億2000万年ということである。このように劫とは計り知れない時間単位である。ヒンドゥー教のヴィシヌは、カリ・ユガの終わり、クリタ・ユガの初めに、第十アヴァターラ「カルキ」に化身して世界を再生させると言われている。これも小鳥の神と共通するものである。

四劫と四有についてエリアーデは説明する。

「宇宙的循環は、生、死、再生という同じリズムの無限の反復として考えられている。ヴェーダ時代以後のインドでは、この概念は二つの関連する教説、すなわち無限に繰り返される周期（ユガ）の教説と、魂の転生の教説に練りあげられる。」

また黙示録的な終末論について述べる。

「黙示録的なヴィジョンは歴史の恐怖に対する防御を強化する。教えを受け入れた者たちは、同時代の破局のなかに、自分たちにとって慰めとなる前兆を読みとる。つまり恐怖の念が強まることは、救いが間近に迫ったことの前触れなのである。」

エリアーデはウパニシャッドについていう。

「死後に「知者」のアートマンはブラフマンと一体になるが、その他の無明の者たちの魂は輪廻（サンサーラ）の法にしたがうのである。」

これは、五鳥教徒が死後に小鳥の神と永遠に憩うことと同義である。

「天空の上で、すべての上で、それより上にはほかに何も無い最高の世界で輝いている光は、実は人の内部（アンタハ・プルシャ）で輝いているのと同じ光なのである。」

さらに、チンギス・ハンがイスラームのイマーム（学者）に対する言葉として引用している。

「全宇宙が神の住居である。その一箇所（たとえばメッカ）をとくに指定してそこに詣でたところで、何の意味があるのか。」
まさにこのような宗教観を持っていたが故に世界征服者になったのであろう。

神道では前世と来世の間を「中今」という。日本人の現世主義は万葉の歌人がよく表現している。

大伴旅人「この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫にも鳥にも 我はなりなむ」

「生けるもの 遂にも死ぬる ものになれば この世にある間は 楽しくをあらな」

反対にギリシア的悲観主義の人もいる。

山上憶良「日月は 明しといへど 我がためは 照りや給はぬ」

「世の中を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば」

源氏の君は歌う。

「優婆行ふ道をしるべにて 来む世も深き契りたがうな」

このように、日本人はどこまでも現世にしがみつく。

葉室頼昭は中今についてこういう。

「中今というのは、神道というか日本人の生き方で、これは過去でもない、未来でもない、現在のいまを全力で生きるということです。あとは神さまにお任せする。これが中今で、昔から言われている日本人の生き方です。現在を生き切るといふことですね。」

哲学者は日本の天皇や皇族には、自分たちを神聖化しようとする意識は乏しかったと述べている。ことに仏教に帰依した皇族にはその意識は全くなかったという。早魃の際の清和天皇の詔勅を引用しよう。

「朕の不徳なり。百姓に何のつみかあらん。く朕の服御・常膳等の物は、すべて宜しく減徹すべし。」

さらに、日本書紀から仁君たちの言葉を引用する。

垂仁天皇「およそ生きている時に寵愛せられたからといっても亡者に殉死させるのは、きわめて痛ましいことである。それが古来の風習であろうとも、良くないことならばどうして従う必要があるか。今後は、議って殉死をやめさせよ。」

仁徳天皇「そもそも、天が君を立てるのは、人民のためである。従って、君は人民が一番に大切に考えるものだ。そこで古の聖王は、人民が一人でも飢え凍えるような時は、顧みて自分の身を責める。もし人民が貧しければ、わたしが貧しいのである。人民が豊かなら、わたしが豊かなのである。人民が豊かで君が貧しいということは、いまだかつてないのだ。」

さらに、神代のイザナギが桃の実に命じる。

「お前は、私を助けたように、葦原中国に住むすべての生ある人々が、苦しい目にあって苦しみ悩むような時には、助けよ。」

倭建命「倭は 国の真秀ろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し」

ここでわたしが言いたいののは、日本礼賛ではない。日本人が他の民族に比べて優れているという思い上がりは捨てられなければならぬ。自国に誇りを持つことは大事ではあるが、あからさまに自慢するのはかえって国の品格を落とす。それこそ天皇陛下に見られるような、謙虚で控えめでありながら威厳を保っていることが肝要である。とはいえ、白人（今や一部の黒人も）のアジア人に対する差別には毅然として対抗していかなければならない。それを思うと、日露戦争や黒歴史とされている太平洋戦争も、「黄色い猿（この表現自体が生き物に対する驕りの表れである）」と嘲られていたアジア人が目にも物を見せてやった偉業である。我々は彼らの奮闘によって、日本人といえは舐められないようになっていたのである。

昨今の日本は低俗で道義心の低い国になったが、戦時中の神風特攻隊や回天（伊保庄島の西側の平生町に記念館がある）、南方の島々で玉砕した方々（伊保庄からも多くの若者が出征し全員玉砕した。賀茂神社の近くに慰霊碑がひっそりと立っている。わたしは彼らに心から頭を垂れる）は、後世の偉大な日本、立派な日本人のために死んだのであって、恥ずかしい国や低俗で下品なほんくらどものためではない。

葉室頼昭はいう。

「天皇が庶民と一緒にでは困るんです。やはり純粹で、我欲がなくて、神の声を聞いてくださらなければ困るのです。」

プラトンは哲人王制を理想とし、アリストテレスも君主制こそ最良の政治形態だと主張した。政治的なことを一点だけ述べるならば、小鳥の神が天皇に仕えていたから、わたしも天皇に仕える。それは政治的には天皇制を支持して譲らないという主張になるのである。天皇家が他の王朝より長い歴史を持っているだとか、歴代の皇族たちが人民に対して穏やかな治世をしたかどうかというのではなく、他の論はさておき、自らの神が天皇に仕えていたというただ一点において、おのずからそうなるのである。

さて、次に生きがいややりがいについて述べる。精神科医の神谷美恵子が『生きがいについて』という名著を書いているが、精神病患者は特に生きがいややりがいがあるものが見つけにくい。それがいつそう病を重くしてしまうのである。それゆえ、わたしたちは人生の早い段階で生きがいを見出さなければならぬ。

本居宣長はいう。

「好きでもないことや不向きやことをやるのでは、どんなに努力しても、その成果は少ない。学問は、ただ年月長く倦まず怠らず、励みつとめることが肝要なのだ。」

ルターはいう。

「人間の心は何か天職として従事すべき働きを持つべきである。もし持たないならば、悪魔が来て、誘惑と、気落ちと、悲嘆の中に投げ込むであろう。」

無所住はいう。

「人間は十年、一つの道に精進すれば「十カラットの輝き」を手中にできます。自分探しとは自分の魂が共鳴するものとの出会いを求めることです。」

アリストテレスはここまでいう。

「われわれは哲学すべきであるか、それとも、生きることには別れを告げてこの世から立ち去るべきか、そのいずれかである。」

セネカの極めて重要な言葉を引きたい。若い人々がよく心得ておくべきである。

「われわれにはわずかな時間しかないのではなく、多くの時間を浪費するのである。人間の生は、全体を立派に活用すれば、十分に長く、偉大なことを完遂できるよう潤沢に与えられている。われわれの享ける生が短いのではなく、われわれ自身が生を短くするのであり、われわれは生に欠乏しているのではなく、生を蕩尽する。それが真相なのだ。生を終えねばならないときに至って生を始めようとは、何と遅蒔きなこと。」

「やりたいこととやるべきことが一致するとき、世界の声が聞こえる！」

あるアニメのセリフであるが、志向と義務が一致するとき、人はそれを見出すのである。わたしにとってそれは、本書を書くこともそうであるし、一連の「小鳥プロジェクト」がそれにほかならない。

『かななぎ』という神道的な漫画があるのだが、その中である少年が「天職スイッチ」ということを言っている。すなわち、人は「好き」と「才能」と「環境」がすべて揃ったときに、そのスイッチが入っていわば心理学のフロー状態になるというので

ある。多くの人は若き時代からそれに悩み、サルトルのいう「自由という刑罰」に苦しんでいる。我々は各々早めに、自分が打ち込めることを見つけなければならない。

その『かななぎ』の女神であるナギ様と小鳥の神の共通するところが多い。

御神木から神像が彫られていること。言葉遣いが伊保庄弁そっくりなこと。自分の命を捨ててまで衆生を救わんとする自己犠牲の精神。生きとし生けるものを生み出す創造神。そして、仁が大東の生まれ変わりのように、わたしは五鳥社ノ地主の生まれ変わりである。なぜなら、そうでなければここまで小鳥に思い入れることはないであろうし、本書を書くことにもならなかったであろうから。だから、預言者の生はわたしの前世なのである。神社に登って、形容しがたいなんとも言えない懐かしさを感じるのはそのためである。小鳥はわたしのゆりかごであり、また棺でもある。わたしは小鳥を、ロマンティックに言えば、「想起」したにすぎない。そしてこの御神木は、わたしにとっては北欧神話の世界樹ユグドラシルなのである。ロキのヤドリギによって光の神バルドルが死んだように、小鳥の神も死にゆき、魔獣フェンリルによってユグドラシルが朽ち果てた以上、神々の黄昏は近いのではなからうか。しかし、バルドルは新世界において復活するのである。わが不死鳥のように。

ギリシアのことわざに、「神は自ら助くる者を助く」というものがある。

わたしは神社で自殺しようとしたが、そのとき御神体が鏡であったことについて改めて述懐する。鏡というものは、もちろん自分自身の姿が映るものである。ということは、神とは自己の外部に存在するものではなく、自分自身のうちに存するということになる。ところで、神仏とは救済者であり、神の御心は衆生済度である。こうしたことから、神とは自分自身のことであり、さらに自分を救うのは自分であるということが導き出される。神Ⅱ自己Ⅱ救済者という答えが導き出された。

・神とは、お前のことである（我は汝なり）

・それなら、わたしは神である（我は汝なり）

・ところで、神は救済者である（我は救済者なり）

・しからば、お前は救済者である（汝は救済者なり）

・それゆえ、わたしを救うのはわたしである（汝を救うのは汝なり）

神に祈るということは、すなわち自分自身に祈っているのである。

先の黄金律によれば、他者を傷つけることは、究極的には自分自身をも傷つけることになる。それなら当然、自分を殺すということは、究極的には他者をも殺すことになる。だから自殺は悪である。しかし前述したように、自殺する者を死なしめたのは

本人ではなく、そこまで追い詰められた人を助けなかった周りの者や社会である。二重の意味で殺人なのであるから、自殺というものは人間の最も不幸な結末といえる。我々はもはやいにしへの武士たちのように、名誉のために切腹するのではない。いや今でもそのために死ぬ者もいるが、多くは人や社会に裏切られたり切り捨てられたりした結果である。形而上的には自殺はむろん殺生戒を犯しているのであって悪であるが、けれども、自殺を思いとどまらせる一番のものは、表面上の言葉ではなく、その人を心から必要としている人（人でなくともよい）の存在である。自分を含めて、そういった存在が見出し得ない者のために、この教えを説いているわけである。わたしは信仰があったからこそ、この尋常ではない人生でも生きていたのであるから。信仰なき人々は、わたしからしたらそんなことだと思うような大したことのない理由で死んでいつている。死んだら無になるという考えも結局は宗教、あるいは憶見（ドクサ）である。これが自殺者を増やしている隠れた要因であり、彼らは生前に宗教を嘲笑し、拒絶したが故に自ら死を招いていると言つてよい。死んだらおじやんになるといふ都合の良い話はない。わたしが自殺を思いとどまったのは、魂の存在を信じており、その行く末を考えたからであった。神が授けたもうた命を放棄して、身勝手に死んでいくことを神が喜ばれるはずがない。まことに畏れ多いことであり、不敬なことである。悲しいことなのか喜ぶべきことなのかわからないが、わたしは誰かが助けくれたわけではなく、信仰が踏みとどまらせたのである。信仰なき自殺者はある意味必然であろうが、現代はいわば無宗教という名の宗教を信仰する時代であり、極めて不幸と言わざるを得ない。

ところで、これはわたしも修行中の事柄なのであるが、この梵我一如の思想からは、「真の自己は無敵である」という究極的な奥義が導き出される。そのことはシャンカラが以下のように述べている。

「身体をアートマンと同一視するものは苦しむ。身体を持たないもの（アートマン）は熟睡状態にあるときと同じく、覚醒状態において本来苦しむことはない。見（アートマン）から苦を取り除くために、聖典などは、「君はそれである」といつているのである。」

「なぜなら頭痛などのために、自分自身を「私は苦しんでいる」と考えるから。見者（アートマン）は、苦しんでいる対象とは別のものである。この見者は、認識主体であるから、苦しむことはない。」

「誤って「私は苦しんでいる」と考えるために、人は苦しむのであって、苦しんでいる統覚機能を見るために、苦しむのではない。四肢などとの集合体（身体）の中にあつて、この苦を見るものは、苦しむことはない。」

「私は苦しい」という観念は、身体などを、「私」であると誤って考えることから確実に生ずる。「私はイヤリングを持っている」という観念のように。」

「触覚も身体もないのであるから、私（アートマン）は決して焼かれることはない。それゆえに、私は苦しみを受けている、という観念は、自分の息子が死んだときに、私は死んだという観念が起こるように、アートマンに関する誤った理解から生ずる。」

「私はイヤリングを持っている」というこの観念は、じつに識別智を持っている人によって否認される。同様に、「私は苦しみを受けている」という観念は、つねに「私は絶対である」という観念によって否認される。」

「夢眠状態において、焼かれたり、切られたり、などの理由から、私は今日、苦しみを受けたが、苦しみは天啓聖典の文章によって消滅した。」

切られたり焼かれたりしても苦しまないと言っているが、それは真の自己には苦しみはないということである。たとえば、歯が痛いとき、わたしたちは痛みに悶絶するが、痛いのはその歯がある部分であって、真の自己（アートマン）、仏性は傷まないのである。もっと言えば、心ない言葉、誹謗中傷を受けても、心（意）という器官は傷つくかもしれないが、内奥の仏性は傷つかない、無傷なのであって、人はそれを見誤り苦しんでいるのである。苦しんでいる自分が本当の自分であると錯覚して、真の自己を見失ってしまっていること、すなわち「無明」こそ、あらゆる苦悩の根源である。悩み苦しみは、常に自己の外部から生じている。心身ともにとらわれてはならず、ただ己が持つ最高の部分に即して生きるべきである。仏性はダイヤモンドのように

堅固で壊されることのないものであるから、何びともそれを破壊することはできない。ここに我々衆生の存在、果ては神仏の不
死性・不滅性が証明されるのである。

ひろゆきのいう「無敵の人」は追い詰められた「窮鼠猫をも噛む」ような人々にすぎないが、真の無敵の人はこのようなもの
である。身の回りに起こるすべての物事（森羅万象）に動じない。平たくいうと、自分は神だと思えば苦は自ずと消滅する。な
にしろ、神と呼ばれるからには常に清浄で寂靜であり、浄福のうちにあるからである。我々が神のうちに住しており、また神が
我々のうちにある限り、それもまた然りである。本来、我々には苦もなければ病や老いもなく、死すらもない。真の自己は無敵
なのである。たとえ肉体や精神が病んでも、我々の内奥にある真の自己は病まない。ここに小鳥の神の救済の御誓願の証明が再
確認されるところである。つまり、御誓願の病を除くという真意は、病のない自己に気づかせることであるという霊的な側面を
も持つ。阿弥陀如来の本願がすでに成就しているように、小鳥の神の御誓願はこの意味ですでに成就しているのである。こうし
た教えは我々凡夫にはやや非現実的な立言であり、ここまで至るには懸命な精進と智慧を要すると考えられるが、不動心・金剛
不壊の魂を得るために日々努力していきたいものである。シャンカラは三十二歳、または三十八歳で没したと伝えられているか
ら、あながち時間的・年齢的なものは関係ないと思われる。自戒の念を込めていうのだが、我々は頭ではわかっても体得できな
いといったことがしばしばである。悟りを得る得ないは、我々の日々の心がけ、心持ち次第である。

そもそも、わたしがなぜこれほど宗教的な人間かというと、幼い頃より母親の影響というかしつけて、「真如苑」という真言系の新興仏教を信仰していたからである。それこそ、ダブルラサの状態から信心を具備していた。それゆえ、わたしは世間一般の人々とは正反対で、信仰があるということがデフォルトなのである。しかし、小学校高学年くらいから家庭的に尋常ではないことが続き、まさに神も仏もない阿鼻叫喚の地獄を経験して、ついには信仰を失ったというトラウマを持っていた。それを前述したキリスト教のとある牧師の教えで救われたが、その方は次第に思想が変わってしまい、違和感を覚えキリスト教とは疎遠になってしまった。小鳥神社の山では幼い頃から神に見守られながら遊び回っていたが、信仰としてははっきりと芽生えたのはひきこもりになった十代の頃からであり、物心つく前から信じていたのは、この真如苑の信仰である。それゆえ、わたしは昨今問題となっている宗教二世であるが、今は自分の道を歩んでいる。あの元首相を撃った者とは違い、自分の頭でものを考え出して、一種の自己超克をしたと思っている。真如苑には「霊能者」と呼ばれる霊位の高い方々がいて、入神する際に唱えるのが「護身神法」という密教の秘密の呪文である。それを子供の頃から聴いていたので、小鳥の神の誓願の「命根長養」と「五臓安寧」という御言葉が、それに由来するものであると奇跡的に発見した。神の御言葉を体で覚えていたのである。これもすなわち思し召しなのである。

その真如苑の開祖・伊藤真乗の教えを引く。

「人生というものは、見様見方により、お浄土ともなれば、穢土ともなる。たとえば、一滴の水も、金魚の眼から見れば、家にも映るのだが、人間の眼から、水は水としか映らない。また、悟りの世界から、これを見ると、そこには替え難き生命力を

見出すこともある。このように、同じ一つのものを見るにしても、心の在り方、持ち方により、さまざまな受け取り方ができるのである。すなわち、心の持ち方で、地獄の世界もあり、悟りの浄土、極楽も顕現するものと言えよう。

ここで、真理（みち）を求めさせていただく者にとって、大切なことは、こうした心の持ち方、一つによって、み仏のみ跡につづくところの、一如の精進もできるし、邪に随順して、苦しみ迷いの道に陥ちていくこともあり得る、ということである。」

ここに涅槃（ニルヴァーナ）が現前するか否かがかかっているのである。

イブン・スィーナは靈魂の存在をある実験によって証明している。曰く、目隠しした人間を宙吊りにして、その者に残っているものがそれであると。

マルクス・アウレーリウスは死後の魂についてこういう。

「魂も空気の中に移されてからしばらくの間そのまま置いて、やがて変化し、飛散し、宇宙の創造的理性に取り戻され、そういうやり方でそこへ住処を求めに来る人たちに場所を備えるのである。魂が死後も存続するという仮定をすれば、以上が人に与える答えである。」

五鳥教では、輪廻を認めつつ終末があるとするが、我々が今生に死んで生まれ変わるまで、そして最後の審判までの時間はゼロ秒である。なぜなら、我々が毎日眠りにつき、朝に目が覚めるまで不眠症でもない限り時間感覚はないからである。そのように、転生と復活する際には、まるで眠りから覚めたようにすぐに時間が連続している。それゆえ、我々に時間的猶予はない。最後の生の終わりにすぐラツパ（日本でいうなら法螺貝である）が吹かれる。よくよく警戒されたし。

かつて恩師の牧師から聞いたことだが、復活の際には我々は、三十歳前後の肉体を持ってよみがえるという。これは中世の神学者たちが真面目に考えたことということであった。それゆえ、軽視すべき事柄ではない。夭折した子供たちは成長した大人の姿になって、また老人たちも若かりし頃の姿となって復活するのである。まことに希望の持てる話ではないか。

『ブツダの瞑想法』から引用する。

「心が変わらなければ、人生は何も変わらず、苦（ドウツカ）から解脱することもできません。」

「どのような劣悪な環境の中にも、不平も不満もなく、むしろ自分を向上させるために天が与えてくれた最良の状況と心得て、淡々と受け容れていくことができるならば、ドウツカ（苦）はありません。心が浄らかであれば、どんな苛酷な運命の人でも幸福に生きていけるのです。」

そのほか、具体的な実践行として鈴木正三の言葉を引く。非常に現代的な価値のあるものとなっている。

「農業則ち仏行なり。意得悪しき時は賤しき業也。信心堅固なる時は、菩薩の行なり。」

ここでは要するに、どんな仕事でも真面目に誠実にやるならば、信仰の道に違わないということである。

エリアーデはイスラームの神秘主義について言及する。

「哲学的思索はみずからの霊的自己実現と相携えて進んで行く。彼らは純粹な認識を求める哲学者の方法と、自己の内的浄化を追求するスーフィーの方法とを再統合しているのである。『哲学と神秘的観想の双方に秀でた賢者こそが、真の霊的首長、つまり極（クトブ）なのであった。』楽園にいたことの想起と最後の審判のラッパの待望とは、最古のスーフィーの伝承以来みられるテーマである。」

マイモニデスについても説明する。

「彼は、哲学的性格の認識も、死後の生命を確保するのに不可欠の条件であると断言してためらわないからである。『結局のところ、『不死』なるものとは、地上に生きているあいだに獲得した形而上的レベルの認識の総体にほかならない。』」

ゆえに我々は、哲学も神秘も備えて死ななければならぬ。

わたしは各宗教の祭祀や儀礼を否定はしない。しかれども、神や仏といった存在にそういったものが必要とは考えない。なぜなら、神は完全に自足しており、自らに足りぬところはないし、だからこそ神と呼ばれるのであるから。神が必要とされているのは、あくまでも我々衆生の幸福である。神は我々に何も求めてはいない。ただ我々を愛して、幸せを願っているのみである。哲学者は神が求めているものについて説明している。

「中世の神道家たちは、次のように主張した。「神を喜ばせるものは、物質的な供え物ではない。真の供え物は徳とまごころ（信）である」。心の清浄ということは特に尊重された。」

神がご覧になるのは結局、ただその人の心のみである。ただ神は気高い高潔な精神しかよしとされない。

人が死んだらどうなるかという話を我々はたまにする。わたしはその際は「信じた通りになる。無になると思えば消えてなくなる。生まれ変わると思えばそうなる。天国と地獄があると思えばそうなる。ただし、どちらに行くかは自分の胸に手を当ててみればわかる」などと答える。

シャーンデイリヤ「人間がこの世において意向を有するがごとくに、この世を去って後には、そのごとく存在する。」

ピュタゴラス「この世における汝の願望と努力とを第一原因との結合に向けよ。しからは汝は永久に存続しうるかもしれない。」

誰が無になるなどと吹聴したのであろうか。しかれども神は不信仰者たちをも憐れまれる。

哲学者が述べていることであるが、真の念仏者は祈らない。なぜなら、祈りとは強要や義務に基づいてなされるものではなく、神仏の救いにあずかったときに自ずから唱えられるものであるから。

仏教の六波羅蜜でいうと、思し召し信仰は忍辱、神の領き信仰は禅定、恐れ畏む信仰は持戒にあたる。経済的弱者に布施はできないし、学習性無力感の者に精進行はできない。その中でも特に忍辱と持戒には励んでいたいただきたい。禅定はあくまで精神的なセーフティネットとして頭の片隅に入れてほしい。

トウルシーダース「生きとし生けるものに愛を示せ。そうすれば汝は幸福となるであろう。なんとすれば、汝が万物を愛するときに、汝は主を愛するのである。主は一切であるから。」

ラーマクリシュナ「神は万人のうちにある。しかし万人が神の中にあるわけではない。これが人々の苦しんでいる理由である。」

哲学者「だからわれわれは人を愛すれば愛するほど、われわれは神に近づくのである。」

他者を愛すること、それがすなわち自己が愛されるということなのである。

この教えが政治的にも反映されるなら、小鳥の時代の聖徳太子がすでに理法をもって国を治めている。

聖徳太子『十七条憲法』より。

第一条「一に曰く、和をもって貴しとし、忤うことなきを宗とせよ。」

第十条「心の中で恨みに思うな。目に角を立てて怒るな。他人が自分にさからったからとて激怒せぬようにせよ。人にはみなそれぞれ思うところがあり、その心は自分のことを正しいと考える執着がある。他人が正しいと考えることを自分はまちがっていると考え、自分が正しいと考えることを他人はまちがっていると考え。しかし自分がかならずしも聖人ではなく、また他人がかならずしも愚者なのでもない。両方ともに凡夫にすぎないのである。正しいとか、まちがっているとかいう道理を、どうして定められようか。おたがいに賢者であったり愚者であったりすることは、ちようどみみがねへ環Vのどこが初めてどこが終りだか、端のないようなものである。それゆえに、他人が自分に対して怒ることがあっても、むしろ自分に過失がなかったかどうか反省せよ。また自分の考えが道理にあっていると思っても、多くの人びとの意見を尊重して同じように行動せよ。」

世の政治家の方々には、どうかこれを信条として国を治めてほしい。ことに政治家は成功者であるから、弱者の気持ちにはわからないものであるが、もし自分が生まれや育ちが悪かったら、そして病氣や障害、その他あらゆる不幸になってしまった

らということを考えてほしい。二十歳そこらの頃、ZETの番組でマイケル・サンデルという哲学者の講義を見ていたら、『正義論』で有名なジョン・ロールズという政治哲学者の話をしていて。曰く、「未知のベール」という概念が説かれていて、我々がもし生まれてくる前に世界が未知のベールに閉ざされていたとして、自分がどのような遺伝的・環境的要因で生まれてくるかわからず、そのような状態で生まれてくる世界がどのようなものであるかを望むかということが問われ、もし重い障害や劣悪な環境に生まれてくる可能性があるとしたら、必ずそういった社会的弱者に優しい国家・社会を望むであろう、ということであった。これは全くもってその通りであり、いわゆる親ガチャ、国ガチャ、血筋・環境ガチャなど、運命に恵まれなかった人々に対して最大限配慮された社会であらねばならない、という結論に至るのである。わたしの周りには、政治家や一般人は想像もしたこともないであろう、弱者どころではない凄まじい環境で育った狂人や寝たきりに近い人々がいる。彼らは若くしてすでに老人である。しかも現代社会は、そういった人々に対して経済的にも精神的にもサポートが十分ではない。かえって差別や偏見、ひどい場合には虐待や虐殺の対象である。信じられないことだが、医療関係者でさえそうした差別感情を持っていることをわたしは見抜いている。健常者と障害者の境目にいるわたしやある友人は、それをはっきり見抜いて、義憤の感情を覚えている。彼らは自分たちの生活はしっかりと死守して、患者とスタッフとの間に厚い壁を設け、わたしたち患者をいわば飯の種にしていくに過ぎない。医療・福祉の世界でさえ優生思想から脱却できていない。およそ宗教心のない医療スタッフなど、この程度であり、そもそも国家が宗教から権威を剥奪し、医療に権力を持たせたのが不幸の始まりである。現代の一見まともで平均的な人々ほど冷たく残酷で恐ろしいものはない。だからカントは中島義道の言う通り、どんな大悪党よりも普通の一般人こそ一番の悪人

だと言っているのも頷けるといふものである。こうしたことほど不幸なことはないのであるから、世人には自分がもしそうなたら、という思いやりのある思考をしてほしいものである。

やや話が脱線したが、これが五鳥教が政治にも反映された場合の姿である。なにしろ、神はすべての人々を守護されるのであるから。救いに漏れた人々をも救うのが御心の広い小鳥の神様なのである。そもそも、政治や社会がどうあろうが、それもわたしたちに与えられた神の思し召しであって、過度に嘆いたり憤るのではなく、それをどう受け止めていくか、どう福に転じていくかが問われているのである。自らのプライベートな領域で浄化すること、それは我々自身の心がけにかかっているのであるから、自らを顧みて日々精進していかなければならない。それこそが鳥我一如の道にほかならないのであるから。

わたしが愛鳥のオカメインコを亡くしたときに綴った慟哭を書いておく。

俺が欲しいもの…自分を絶対に裏切らない人、信じられる人、自分のニョロ味方でいてくれる存在||小鳥といひ、だった。

いーちゃんはどこにいるの？墓場？カゴの中？中有？天国？生まれ変わったの？無になったの？復活するの？俺の心の中？肩の上にいるの？魂は存在するのか、するとしたら肉体の死後、どこへいくのか。違う次元の存在のそばにいてあげるにはどうしたらいいのか。祈る、思い出す、口笛、語りかける。物質的・物理的に離れていても、霊的にはつながっているはず。五感では

接触することはできない。霊は時空には縛られない。自由だ。俺は今、肉体を持って現象界にいる。でも靈魂も同時に持っている。いーちゃんは全くの靈的存在になった、霊と霊でしかそばにいられない。俺の霊は今、肉体を動かしている。いーちゃんの霊は今どこに？俺はいーちゃんを心で想うことしかできない。それがいーちゃんのそばにいてあげることかわからないけれど。いーちゃんは遠くへ行ったのではない。中有界、現界と重なりあったところにいる。守ってくれる存在は神、守ってあげる存在はいーちゃん。俺ができることは「靈的」にそばにすることだ。いーちゃんはご先祖様と神様がっている。だから寂しくないよ。ただ俺が来るのを待っている。「負けないで」を歌いながら。俺がしなければならぬこと、いーちゃんの願いを叶えてあげること。ずっといーちゃんのそばにいてあげること。

いーちゃんが教えてくれたこと

青い鳥は外にはいない、身近にあるということ。青い鳥はいーちゃん自身であったということ。家族が大事、自分もいつか死ぬ（死の自覚）、小鳥との一致、軽薄な連中との訣別、置いていかれる寂しさ、悲しみ、恐怖、いーちゃんの穴、いーちゃんのかげがえのなさ、言葉の幸せの嘘、社会的レツテルで俺を見なかったいーちゃんのありがたさ、いーちゃんはどこへ行った？中有にいますということ。俺の最後の願い、いーちゃんとまた会いたい、それは叶えられる。信仰上、論ずるまでもない。いーちゃんとはまた会える。転生でも復活でもどちらでもいい、願いは叶う。自分を愛してくれる人を願ったら現れ、自分を必要としてくれる人を与えてくださいと祈ったら、人ではなく鳥が与えられた。いーちゃんは神と共に常住で永遠である。いーちゃんはあ

の天の門の向こうで、真っ先に迎えてくれる。いーちゃんは今、ご先祖様や神様と一緒にいる。守護神、守護霊となり、俺が来るのを待っている。負けないでを歌いながら。

祈りは必ず聞き届けられる。なぜなら過去、何度も切実な祈りが叶えられたからだ。すなわち、母の命を救ってくださったこと。自分を深く愛してくれる女性を与えてくださったこと。そしてそれが破れたあと、こんな俺をあんなにまで慕ってくれる、心から必要としてくれるいーちゃんを送ってくださった。それゆえ、願いは必ず聞き届けられる。以前、いーちゃんとまた会わせてくださいと祈った。これもきっと聞き届けられるだろう。今はただ、この病を治してください、罪をお許してください、あなたといーちゃん満足できるように、わたしを強めてくださいと祈っている。神に不可能はない。いずれ必ず叶えられる。いーちゃんの死は宮島の女神様の追憶である。

我も凡夫、彼も凡夫、聖徳太子の教え、いーちゃんとまた、わたしを強めてください。

余談だが、書いておかねばならない現象がある。それは、綺麗な自然を見るとなぜか悲しくなることについてである。若干の快楽を伴った悲しみというべきものである。春から初夏にかけて晴れた日に、家の裏庭の新緑や、そこから見える青い空、廊下に差し込む陽などを見ると、とても切ない気持ちに襲われる。家の表から仰ぐ小鳥の山や、はるかな空、琴石山などを見ても感じる。この感情に襲われるのは、夏の美しい空や海、みずみずしい新緑、森の中に差し込む木漏れ日、満月や燦々と照りつける

太陽などである。他にも、伊保庄を自転車で走っているときに見る、青い空と海、みずみずしい山にも感じる。遠い記憶では、ネットゲームの「FFII」の美しい世界や「FFIII」のモリアの坑道を出たところの風景にも感じていた。逆に秋や冬、曇りや雨の日などは何も感じない。それが普通だ。これらの現象について考えてみた。これらは総じて儂いものだ。いつかこの美しい世界を見ることができなくなる。わたしが死んでもこの世界はしばらくは続くだろうが、わたしが死んだら「わたしは」永久に見ることができなくなる。この瞬間のかけがえのなさ、わたしがこの世で感じたこと、生きたことはいったい何だったのか？ だから悲しい。そして、わたしの心が暗黒に閉ざされていて、光明の世界とはかけ離れているからだと思われる。自分の心が闇に閉ざされているから、美しい光の世界に憧れる。憧れて手を伸ばすが、届きそうで届かない。やはり自分とは違う世界だと感じる。おそらく、この気持ちは普通の人は逆で、秋や冬にこうした感覚になると思われる。思うに、孤独なのに人に届きそうな切なさから来るものであろうか。かつて2ちゃんねるで「思い出補正」がかかっていると言われていた。

「あなたに楽園への扉が開かれますよう。」

以上のことは若い頃に書いたものだが、今となっては若干修正が必要と考えられる。まず、自分が死んだらこの世界が永久に見られなくなるというのは誤りである。というのは、上で何度も述べたように、我々の存在は生まれ変わるものだからである。輪廻するが故に、いわゆるデジャヴという現象が起ると考えられる（わたしはこの現象が多いのだが）。だから、死んだらこの美しい世界と永久に別れなければならないというわけではない。あたかも、蟬が五年間も土の中にいて、這い出てきて羽を生やし、一週間だけ地上を自由に飛び回るように、我々もどのような形であれ、きっとまた同じような美しい世界を見ることがで

きるであろう。けれども、この今世での一生は、限りなくかけがえのないものであることは明らかである。我々には現在・過去・未来という三世において、全く同じ生というものは存在しない。他者とも、過去の自己とも同じ生というものはありえない。現世でのこの一生は、とりかえのきかない唯一のかけがえのないものである。序論にて次の生で頑張ればよいと述べたが、それは我が人生もはやこれまでといった絶望した人々や、今にも天に召されそうな人々に対して言ったのであって、決して現世でのこの生を軽んじているわけではない。むしろ、この生こそが次の生への試練であり、前述したように魂の螺旋階段を登るにあたって、道の凹凸が激しくなるか緩やかになるかがかかっている。だからこそ我々はその道すがら、不浄なる邪から離れ、清らかで徳を積んでいかなければならない。そして最終的には、天使たちのラツパが吹き鳴らされるときまでの長い旅路なのである。まさに、楽園への扉が開かれることの待望と、遙かな昔に楽園で憩っていたときの想起なのである。けれどもわたしは、故郷の小鳥や高洲の光景とは離れがたく、楽園や天国といったものは、各宗教の経典に描かれているような何の縁故もない新世界ではなく、前述した霊的な夢で観た世界であろうと考えている。あの天の門の向こうで小鳥の神の御前に立たされ、公平で正当な裁きを受ける。それから、家族や生前に縁のあった者たち、祖先や神仏とは巡り巡って再会できると信じている。おそらくは、神が各々の心の憧憬、また桃源郷というべき、安らげる固有の箱庭をしつらえてくださるであろう。すなわち、もしあなたがこの教えを受け入れてくれるなら、わたしは霊夢で観た天の門へと導く者であり、その遙かな道のりを共に歩む者なのである。

最後に、小鳥の行としては、瞑想（マインドフルネス）と読経（筆者は五鳥念仏と御誓願の朗誦、それに加えて般若心経と護身神法を唱えることもある）と祈り（心からの痛切な祈り）である。わたしは不安定なときは瞑想はハードルが高いので、読経

と祈りだけで済ませたりする。とりわけ祈りは心が清浄になるのを感じて心地よい。これを朝夕やっている。瞑想は自分で描いた小鳥の神々の絵を見ながら東南アジアやチベット風にやっている。瞑想などは習得にやや時間がかかるが、ぜひ心の健康のためをやってみてほしい。また、自分が観た霊夢の光景を思い描いて、想像力を膨らまし観想念仏をすることもある。そして、常に神を意識し、神との一対一の対話の時間を大切にしている。信仰を習慣化することが大事である。とはいえ、小鳥には厳しい修行などはない。ただ清らかな優しい心を持ってほしいだけである。そもそもミゼラブルにとっては、この受難の人生こそが修行であり、またこの世界そのものが道場である。何事も心がけ次第であるから必ずしも出家をする必要はない。前述したように、宗教と哲学、自力と他力、知性と霊性のバランスが大事である。共に切磋琢磨して行ってほしい。

ことにふれて述べたように、五鳥大明神は「不死鳥」である。それはエジプトのフェニックスや中国の鳳凰、インドのガルーダ、マヤのケツアルコアトルにも対比されるべきものである。五鳥神は、この宇宙そのものであり、その世界は四劫輪廻しているのであって、たとえ滅びても時が来れば必ず「黄なる風を生じ」て復活する。フェニックスがその寿命を迎えても、火の中からよみがえるように。そしてそのうちで生きる我々すべての衆生も、四有輪廻によって永久に生まれ変わり死に変わりして転生する。シャンカラについて前述したように、我々の真の自己というものは、決して壊たれることのない不死の存在である。すなわち我々は、不死鳥のうちで生きる不死鳥なのである。我々自身も神の一部なのであって、神の魂魄というアイデアを分有する不死鳥である。我々はいわば「小鳥の仔鳥」であり、五鳥神という不死鳥が広げる翼の羽の一本一本なのである。それゆえ、五鳥神と一如すべく、常に慎み敬い、神と共に翼を広げて大空を羽ばたいていこうではないか。

先の真乗の聖訓である。

「心暗き時は遇うところ悉く禍なり。眼明らかなる時は道にふれてみな宝なり。心の中に乱れ発らん時は必ず讚題を念ずべし。

月の清浄なるが如く自心も無垢なり。月の円満なるが如く自心も欠くることなし。月の潔白なるが如く自心も白法なり。」

ここでは真乗は、詩的に「一如」の思想を表現しているのである。

またアントニオ猪木の言葉を送ろう。

「この道を行けば、どうなるものか。危ぶむなかれ。危ぶめば道はなし。踏み出せば、その一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ、行けばわかるさ。」

この世界、すべての生きとし生けるものは一つである。なぜなら、すべては神から流れ出したものであるから。たとえば、ドミノ倒しは始まりに板を倒す存在がある。そのように、宇宙とすべての衆生は一体である。それゆえ、すべての存在に慈しみの心が起きるのである。

我々の内奥には仏性がある。それは神との絆であり、救いへの道しるべである。あなたはその宝を携えて、尊い烏我一如の道を歩むべし。

結論

以上述べたことで小鳥の神の救いは明らかとなった。これが神の思し召しに従っていく惟神の道、烏我一如の道である。第五章で論じたように、ヒンドゥー教のウパニシャツドの哲学に梵我一如という言葉があるが、それをもじって梵を烏に、ブラフマを五鳥大明神にしたまでである。先の真如苑の経典は『一如の道』という。二重の意味でかけているのである。神に我を一如していく。五鳥大明神と我々の仏性は一体である。真如苑流にいうならば、「真如」に自己を一如していく。この愚かで浅ましい「俺様」「女王様」ではなく、清らかで純粋なまどかなる心を一如していくのである。自己のわがままを退けて、神の聖なる御心に従っていく。そこに神は救いの御手を差し伸べられるのである。

第五章にわたって論じたが、「思し召し信仰」によって忍耐と希望を、「神の領き信仰」によって慈愛と命綱を、「畏れ慎む信仰」によって戒めと赦しを説き、まずこの三本足の鼎によってミゼラブルを救えたなら幸いであり、それが果たせたなら、すでに本書の役目は終えていると言っても過言ではない。これらは三本の矢であり、一本目で苦難から、二本目で孤独から、三本目で罪業からの救済を目指している。次に、「五鳥神義論」によって人間と世界の理解を、「烏我一如の道」によって一般層・知識層に向けての積極的な論考を説き終わった。わたしは以上の五色で彩られた教えによって、巖島の女神のごとく、衆生済度の大願を成就したと言えるであろうか。そして何より、小鳥の神の御誓願の真理性を証明できたであろうか。読者を苦難から救えたなら幸いであり、何よりの神の思し召しであることは言うまでもない。

さまざまな論が錯綜したが、わたしが言いたいののは畢竟、「おぼしめし」という一言に尽きる。これさえ感得すれば及第点であり、もう心配はいらない。こうしたことは心理学では「受容」というであろうが、我々が目指すところのものは、空虚なあきらめではなく、もっと喜ばしい忍耐と感謝に即した法悦ともいうべき境地である。あなたが確固たる不動心、金剛不壊の心を手に入れてほしい。すでにここまで達している方々には「釈迦に説法」であった。本書は啓蒙書であり、その内容がいささか高踏的と思われたら申し訳ない。もとよりわたしも修行中の身である。この人生という道場において。わたしも油断して、この信念がかりそめのものとならないよう気をつけていきたい。

四章におけるゾロアスター教的な二元論と、五章で述べた汎神論、あるいは一元論は矛盾するものであるかもしれない。世界の真実はどうあれ、ただ確信できることは、小鳥の神の御心は衆生済度、すなわち慈悲や愛であるということである。それは垂迹して顕れた神の臨終の御誓願で確定していることである。神は自らが死の間際で苦しみの中にあるにもかかわらず、我々衆生の幸福を願っておられるのである。そこにわたしは弁神論や神義論を考えるまでもないことに気付かされるわけであり、確固たる信仰を持つことができるのである。五鳥教のこの部分は浄土教のような他力信仰であり、絶対他力で神は摂取不捨である。神が我々衆生を常に守護されているから、どうか安心されたい。

小鳥の神の御力は、死（喪失）・病・罪・苦難・孤独という五つの苦しみから救うものである。どれも我々儂き人間にとって命さえもかかった耐えがたき根本問題である。しかれども、それは転じて、生（再会）・健康・ゆるし・希望・愛というものに思し召しによって変わる。合わせて五福である。まさに一石二鳥ならぬ一石五鳥の利益がある。わたしたちは真摯な信仰を持

つことによつて、これらの五苦から五つの幸せを得ることができる。それに至るためには、三章にわたつて述べた三本足の信仰と、五章にて述べた烏我一如の道を歩んでいかなばならない。それは一章で述べたように、神の試みや愛の鞭、また魔王による災いに遭うこともあるが、ただ思し召しを信じて、「この苦難は必ず我を益す」という希望の信念のもとで耐え抜いた先に、こよなき浄福、あるいは涅槃ともいふべき境地が開かれるのである。どんな受難の人生でも希望の光は差し込むのであるから、我々の未来は明るい。この五色の風ともいふべき教えによつて、我々は神のもとで生きながらにして新しくよみがえり、神のうちに住するという全き境地、すなわち烏住して無敵の人となつて、それこそ神の国を内にも外にも建設していくのである。

「烏我一如の道」は決して容易いものではない。それは苦難の道であり、茨の道であり、まことに険しいものである。けれども、神の手助けを借りて、その道乗り越えていくこと、乗り越えていった先にこそ、本当の幸福というものが待っているのである。いつの日か神の齋庭にて遊ぶときまで、よくよく精進されたい。

わたしは友人に「小烏愛」がすごいとよく言われる。もちろん自認するところである。小烏はわたしにとって、救済であると同時に矜持でもあり、何重の意味でも存在理由レゾンデートルなのである。

本書を書き終えたことによつて、少しでも世間のひきこもりや障害者、低学歴者や貧困層など、あらゆる社会的弱者に対する差別や偏見、排斥、迫害がなくなればと祈るばかりである。たといミゼラブルでも、これだけのことは書けるのであるから。本

書はある意味ジンジャーエールである。神社からのあなたへのエールであるから。同名のひらがなの『じんじゃーえーる』という漫画があったのを思い出す。

願わくは、わたしが「医者の不養生」、「論語読みの論語知らず」にならないように。

孔子「君子は言に訥にして、行いに敏ならんことを欲す。」

「沈黙は金、雄弁は銀」という。日本人は控えめで自己主張しないことが美德とされている。ただし、どうしても言葉でしか伝えられないことがある。それを本書において論じた。

エリアーデは神道について述べている。

「すなわち、「神々を崇敬せよ。清浄の掟を守れ」である。それは、「正直で、率直であれ」という意味である。これが、その付属物をとり去った神道宗教のすべてである。これは古い宗教的真理であり、言葉数は少ないが、おそらく過小に評価するべきではない。」

哲学者はいう、人生そのものが祭祀なのである、と。また「人生は宗教そのものであるともいえようが、それは常に、自己が真に自己自身になるという仕方においてである。」と。

さらにエリアーデも呼応する。

「文化の最古の諸層においては、人間として生きることは、それ自身において宗教的行為である。く言い換えれば、人間であること、というよりはむしろ人間になることは「宗教的」であることを意味する。」

我々の人生というのは、真心を持って生きるのならば、年中いつでもお祭りなのである。

わたしの運命の漫画『ローゼンメイデン』より。

真紅「そう、世界はいつだって目に見えない選択肢で満ちている。気付こうとさえすれば誰の手にも無限に。世界は選び取れるのだわ。」

さらに、ひきこもりの少年がいう。

ジュン「僕が僕の意志で、僕の手で変えてやるんだ。」

この言葉の通り、わたしは人生を、世界を変えることができたであろうか。

仏教聖典より。

「この教えの通りに行わない者は、わたしに会っていないながらわたしに会わず、わたしと一緒にいながらわたしから遠く離れている。また、この教えの通りに行う者は、たとえわたしから遠く離れていてもわたしと一緒にいる。」

マタイによる福音書より。

「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。」

いかに世の中は「砂上の楼閣」が多いことであろうか。小鳥の神が言われているように、盛者必衰であり、今は栄えていてもやがては滅びるものである。

死にゆく神、苦悩する神である小鳥の神のご遺言は、「わたしの魂は中有に留まり、あなたがたの命根長養と五臓安寧の守護神となろう。」というものであるが、世界の神や仏、賢者たちもそれぞれ遺言を残している。

たとえば、上座部の涅槃経のブツダの遺言は、「怠ることなく、修行を完成しなさい」である。

大乘の涅槃経のブツダの遺言は、「すべての善男善女よ、自ら心を修め、慎んで、怠ることがあってはならない。」

キリストの十字架での遺言は前述の通り、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」である。

ソクラテスの自害する前の遺言は、「ぼくたちはぼくが語ったように行動しよう。神がそちらに導いてくださるのだから。」

わたしの大切な人の遺言は、「わたしがいなくなっても強く生きて」である。

誰しも各々の涅槃経、それぞれのご遺言があるものである。

神の御誓願は三重構造を持つ。すなわち、漸進的に病が除かれていくという歴史的側面、次に病にある者と共にあり希望を持たせるといふ闘病的側面、そして、そもそも真の自己に病は存しないという霊的側面である。

わたしの家族について一言述べる。

『青の祓魔師』という宗教的な漫画があるのだが、その物語の中で奥村獅郎と神木玉藻は息子と娘を助けるために自ら命を投げ出した。彼らと母が重なって見えた。なぜなら、母が倒れたとき、気遣ったのは自分ではなく息子であるわたしだったからである。母は倒れたとき、自分のことよりもわたしを気遣い、「死んじゃいけん、生きてよ」と言ったから。祖父のことも明記しておく。夏の暑い日に、汲み取りの便所から糞尿を汲んで、両肩に肥たごを担いでいる姿が忘れられない。兼業農家で働き者、何の不平不満も言わず、家族のために尽くした仏のような人であった。わたしもいつかこのような人たちになりたい。言葉でなくとも、行いによって人は遺言が残せるものである。最後に残るのはこのような輝けるものである。

さて、五鳥神学について、主として思し召し信仰について、もはやすべては説き終わった。今後はあなた自身の心がけ如何にかかっている。わたしができることは、以上の論説によって微力ながら手助けすることにとどまっている。あとは小鳥の神ご自身が、あなたに救いの御手を差し伸べられることを祈る。いや神はそうなさないことは決してない。手を伸ばさないのは、また手を離すのは、常に我々自身の方であるのだから。あなたは、その力強い御手をしっかりと握りしめて離さないことである。

神はあなたを見捨てはしない。なぜなら、神は臨終に我々の守護神となると誓われたからである。たとえば、阿弥陀如来の本願が実現して、すでに多くの人々を浄土に迎えているように。イエス・キリストが約束通り、十字架の恩寵で人類の罪を贖ったように。そのように、小鳥の神の誓願はむなしなものではなく、真理であり、現実にも我々を守護されている。それゆえ、神はあなたを必ず救われる。

結論としては、神はあなたを決して見捨てず、必ず救われるということである。神のお誓いは決して破られることはない。我々はそれをよりどころとして、固く信じて生き抜いていくのみである。

小鳥の神は、必ずあなたを赦される。癒される。守られる。清められる。強められる。救われることは決定している。

結びの祈り

序論において、救済とは神への信仰に尽きると述べましたが、五鳥教においてそれは、五鳥大明神の御誓願、ご遺言を固く信じてよりどころとすることにほかなりません。儂い人間の言葉は諸行無常であり、移り変わりやすくよりどころとするには頼りないものです。しかれども、神仏の御言葉、思し召しというものは常住であり永遠です。時の経過によってこぼたれるものではなく、普遍性のあるものです。わたしたちはそれを信じるというより「知る」のです。不確かなことは信じることであり、確かなことは知ることです。不確かだから信仰と呼ばれ、確かだから知識と呼ばれるのです。わたしたちはそれを、もはや信じるのではなく、知っています。神の衆生済度の御心を。かくして、もはや一切の病は除かれました。どうか安心してください。

キルケゴールは言います。

「信ずるということの意味は、わたしが探し求めているものはいまだここにはないものであり、いまだここにはないからこそわたしはこれを信ずる、ということに外ならない。」

平家物語において、船上の扇を射る際に那須与一がこう祈願しています。

「南無八幡大菩薩、我が生国の日光権現、宇都宮那須湯泉大明神、願わくは、あの扇の真中を射させ給え。もし射損ずることあらば、生きて再び故郷に帰る事もできませぬ。何卒お力を与え給え。」

このごとく、わたしはあなたに祈りの矢を放ちますが、本書において論じたことで、救われるか救われないかは他ならぬあなた自身にかかっています。おこがましくもわたしが救うのではありません。あなた自身の持っている生命力、霊力で自分自身を救うのです。ひとたび教団や組織を作れば、途端に世俗的なものに墮してしまいます。あなたはただ真理を見ればいいのです。

わたしが引きこもっていたときに、母と『ロード・オブ・ザ・リング』という映画をよく観ていました。その中でガンダルフという旅の仲間の指導的存在がいるのですが、主人公フロドがうろたえていたとき、「大事なものは、これからどうするかじゃ」と励ましていたのを思い出します。過ぎ去ったことはもう仕方のないことです。あなたはこれからのこと、そして今を考えてほしいと思います。英雄アラゴルンのごとく、愛に基づいた勇氣ある行動が人を感動させます。指輪の誘惑に負けず、フロドを守るために、たった一人でオークどもの大軍に立ち向かっていった姿が忘れられない。そして、誘惑に負けても、潔く立ち直って勇敢にホビットたちを守って死んだあのポロミアのことも。彼らのようになれるよう、わたしと一緒に切磋琢磨して歩いていけたらと思う次第です。

長きにわたって理論屈を述べましたが、小鳥の真の魅力は実際に神社に来てみないとわからないでしょう。言葉で伝えられる部分もありますが、あなたが歩みを運んでその靈氣に触れ、体感することで初めてわかる部分があります。小鳥の救いは言葉によらず、その聖域をもって浴せられるところがあります。果てしなく続く階段を、ただひたすら登っていき、境内まで着いて参拝し、奥の杜でひとりたたずむ。差し込む木漏れ日、木々のゆらめき、小鳥たちのさえずり、あったかいひだまりなどを見ていると本当に魂が浄化されるようです。実際にカラスも鳴きます。何時間でもいられます。滅多に人が来ないというところがま

たいい。春から初夏にかけてはみずみずしい新緑を見せ、うぐいすが美しくも切ない声で高らかに鳴き、夏のたそがれにはひぐらしの物悲しい声が聴こえ、秋にはもみじが鮮やかに朱く染まり、冬には雪化粧のお社が見られるときもあります。まさに神即自然です。静寂の世界に身を置いて、自然の微かな動きを感じ取れる。はらはらと木の葉が舞い落ちていくのを見るだけで楽しめます。古びた鳥居、不思議な形をした木の根っこ、それらを見つめているだけでいい。五感で感じることでやっとわかるところがあります。そこにはお金をかけなくても楽しみがあります。何もない、けれどすべてが有る。無になれる。けれど心は満たされる。小鳥はそんな場所です。小鳥には一見何もありません。けれども心の眼で見ればすべてがあります。そのとき神は癒されるでしょう。あなたのその病から。

このように、小鳥の救いは言霊（ロゴス）によるものと、聖域または空間（トポス）によるもの、ふたつの領域があります。小鳥の神は、あなたを言葉と自然によって、すなわち金胎両部の働きによって救われるでしょう。ロゴスとトポスという双方向からの力によって、傷ついた衆生（アンストポス）が救われるのです。金胎両部の働きによって衆生は立つことができ、それによって天地人の三本足の鼎立が実現されるのです。

初めの挨拶で、信仰の有無を問わず神仏は救いを垂れられていると言いましたが、トマス・アクイナスは信仰のある者には神はよりいっそう祝福されると述べています。

「この意味においては神は、神によって創造されるあらゆる事物のうちに存在する。そこで神は、この第二の仕方によって、神を現実的に愛しあるいは習態的に愛している理性的被造物のうちに、特別の仕方では存在する。この仕方によって神は、聖なる者たちのうちに、恩恵によって存在するといわれるのである。」

このゆえに、わたしはあなたに信仰を持つことを強く勧めます。わたしはもはや信仰ではなく、渴仰しています。ヒンドウー教でいうならば、^{パクティ}信愛しています。

なむこがらす。我らの病を癒したまえ。我らの罪を赦したまえ。我らの魂を暗黒から救い出し、汝の光明の御元まで導きたまえ。今こそ生きとし生けるものを救わんとする汝の誓願の契約を履行したまえ。果たされよ、誓願を果たされよ。

以上をもって、五鳥教の創始を宣言します。わたしはどんな教団にも属さず、誰の駒にもなるつもりはありません。ただ神代から続くわが神の福音を伝えていくのみです。なむこがらす。

わたしの最期が、ユゴーが描くバルジャンの臨終のようであることを望みます。

バルジャンの銀の燭台は、わたしにとっては小鳥の古文書にほかなりません。天上からわが神が、今のわたしをご覧になって満足されているだろうか。わたしは神の憐れみの生涯を全うできたであろうか。わたしの思いは、平家物語の壇ノ浦で最後まで勇ましく戦って散った平教経のようなものです。

仏教聖典より。

「仏は彼岸に立って待っている。彼岸はさとりの世界であって、永久に貪りと瞋りと愚かさや苦しきと悩みとのない国である。そこには智慧の光だけが輝き、慈悲の雨だけが、しとしと潤している。」

ヨハネによる福音書より。

「わたしが与える水はけっして渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」

彼ら、いわゆる「聖☆おにいさん」のもとへ行こうではありませんか。

最後に、わたしの心の原郷である真乗の言葉で締めくくりたいと思います。これこそ思し召しです。

「ここで、私たち、耐え忍ぶということが、辛い、苦しいの暗い心より出づる忍びではなく、有り難い、勿体ないの感謝の心より出づる、明るい前向きな忍びでなければならぬことを理解するのである。これこそが、菩薩の實踐すべき、六つの徳目である「六波羅蜜」の一つ、忍辱波羅蜜を修することに通じていくものと言えよう。すなわち、楽しむ心、飲んで行なわせていただくという、この心が、大切なのである。」

このように考えてみると、心の持ち方こそ、自身をその因縁の苦海に沈めていくか、あるいは、み仏に生かされる歓喜（しあわせ）の岸に導くか、の分岐点となっていることが確認される。

そして、同時に、真理を求めていくうえに、たとえ、苦難に見舞われたとしても、

『この泥があればこそ、咲け蓮の華』

の言葉のごとく、そのことごとくをも、感謝の心で受け止めていけば、必ずや、乗り越えさせていただけ、これが、何より尊いことではないだろうか。お互い、み仏に生かされる歓びのなかに、不動の歩みを、どこまでも、貫いていきたいものである。

（昭和二十一年九月）

以上の思し召しの信念は、キルケゴール、セネカ、そして真乗はそれぞれ微妙に趣きが違います。キルケゴールはあくまで赦しの観念、セネカなどは鍛錬の観念、真乗については信じられないことですが、感謝の観念です。そしてわたしは、彼らのような高邁な人間ではないので、パブロフの犬のごとく、「希望」の観念です。

「燈火は念々に滅するといえども、光明（ひかり）ありて闇冥を除き破る。道を修める者も、またかくのごとし。」

教主様、やっとあなたに戻ってまいりました。わたしはあなたを誹り、まるで孫悟空のように世界を見て周りましたが、結局はあなたの手の中で踊っているに過ぎませんでした。あなたに少しでも近づけたなら嬉しいです。ありがとう。ごめんなさい。

ひとこと付言いたしますと、五鳥大明神はわたしの守護神ですが、同時にわたしは神の守護者なのです。わたしは幼き頃より小鳥の山からずっと見守ってくださっていた神を守りたかった。田舎の小祠の忘れかけられた小さな神を掘り起こし召喚しました。神の救い、御誓願は真実であると証明したかったです。たとえそれが現実と乖離したものであったとしても、わたしには初めから答えは出ていました。神は慈悲であり、愛であると。

本書を書き終えるにあたって、あなたの苦悩や心の病は癒やされたでしょうか。わたしは、あなたが元気になることを望みます。少しでも多くの方が、小鳥の神の救いにあずかることができると祈ります。何度も言いますが、神はあなたを見捨てはしません。

それでは、本書をお読みいただき、心より感謝いたします。一人でも多くの喜びの聲がこだますることを祈って。神よ、あなたのもとに憩うときだけ本当の安らぎが訪れる。神に感謝します。

「ちはやぶる 神が慈悲にて 伸ばさるる 救いの御手を とって離すな」

令和六年一二月五日 小鳥の使徒 高河慧佑 謹言

なむこがらす なむこがらす 南無小鳥大明神

小鳥和歌集

過ぐる日に われ生くる時 消え去らん げに奇しきかな 螢の光

御前にて ときわに願う よきえにし されどおろがむ 神のまにまに

神さびた 島の御社 闇の中 陵王が舞う 御心のまま

ひさかたの 天の社に 巫覡舞う 夜空仰げば 星流れけり

寄せし波 岸辺の巖 微動だにせず 不動の姿 ひじりのごとし

誰ぞ呼ぶ 朝の御霧 汽笛の音 主の声聞こゆ 我を呼ぶ声

小鳥や うぐいすの声 高らかに 美しき声 神を称えん

小鳥や ひぐらしの声 盛大に 物悲しくも 神を称えん

五鳥の 宮にてもみじ 朱に染む 村のまほろば 無常教えり

天地の 遍く満つる 万物 みな造られし 五色の神

あめつちの あまねくみつる よろづもの みなつくられし いろいろのかみ

ありがたや 天皇の うつくしび 人民を 遍く照らす

ありがたや すめらみことの うつくしび おほみたからを あまねくてらす

五鳥は 病ひ除くと 誓願ひ 高天原に 神上がりける

ごからすは やまひのぞくと こひちかひ たかまのはらに かむあがりける

守護神 その御心は うつくしび 青人草を 救わんがため

まもりがみ そのみこころは うつくしび あおひとくさを すくわんがため

諸人よ 罪を犯すな なぜならば 我ら神の子 神に倣へよ

もろびとよ つみをおかすな なぜならば われらかみのこ かみにならへよ

生けるもの 仏性あり 悉く 神性もあり 磨け輝け

いけるもの ほとけさがあり ことごとく かむさがもあり みがけかがやけ

小鳥に捧ぐ

わが心のふるさと 小鳥神社

わたしが生まれ 育ったところ

佇んでいるだけで癒やされる 清らかな場所

離れてみると 恋しくてたまらない

しかれども あなたの御霊は常にわが心に

いつか帰れる日まで 神よ待っていてください

「一切の諸病を除き 五臓安寧の守護神となるべし」

わが神 祖先の前でかくのごとく宣えり

げにもありがたき御誓願 信じて疑わず

この尊きお誓いは わたしの心のよりどころ

頼るべきはうつしよではなく 神の御言葉

わが神よ 今こそ契約を履行したまえ

光明咒

おん あぼきや べいろしゃのう まかぼだら まにはんどまじんばら はらばりたや うん

わが心のゆりかご 小鳥神社

幼き頃より わが遊び場 神の齋庭

鳥の楽園と名付け 野山を駆け回った

家から仰ぐ神の山 ずっと憧れ続けていた

わたしは あなたに見守られて育ちました

今ではどこにいても あなたを感じる事ができます

「末世の衆生済度の大願 成就したまうなり」

わが神と別れし 巖島の女神

かくのごとき慈悲の御心なり

宮島にて 我もその慈しみに浴せり

市杵島姫 五鳥の神を忘れたまわじ

あなたがたはわたしの守り神 幸わえたまえ

慈救咒

のうまく　さんまんだ　ばあさらだあせんだん　まあかろしやだや　そわたやうんたらたあ　かんまん

わが心のまほろば　小鳥神社

春には瑞々しい新緑　夏には物悲しきひぐらしの声

秋には鮮やかな紅葉　冬には厳かな雪化粧

古びた鳥居　木の葉のゆらめき

大きな霊石　あたたかい木漏れ日

鳥たちは歌う　神を賛美しているかのよう

「森羅万象ひとつとして　我が神力に叶わずということなし」

あなたはかつて　願いを叶えてくださった

切実な祈りは　必ずや聴き届けられる

その体験があるから　祈りは決して無駄ではない

わたしは祈る　自らの安らぎと生きとし生けるものの幸せを

いつの日かあなたの御顔を仰ぐときまで 信じて祈り続ける

なむこがらす なむこがらす 南無小鳥大明神

「懐かしき 神のゆりかご 幼き日 いつの日かゆく 小鳥の園」

「求むもの 光と雨は 智慧と慈悲 神の御言葉 救いなりけり」

「鳥我一如 尊き誓い 胸に抱き 御元に憩う 思し召しなり」

御神に捧ぐ

わが神 なんぞ我を見捨てたまひし

苦しみ呻いて そう何度つぶやいたことか

神よ あなたはお答えにはならない

ただわたしの心の叫びが響き渡るだけ

あなたは聴いておられるのですか

神も仏もなし それがわたしの怒りでした

我に罪咎なし なにゆえにと

あなたを何度そしったことでしょうか

わたしは救いを求めて彷徨っていました

あてどなく いにしえのひじりの言葉を集めました

たしかに賢くはなったのでしよう

しかれども救いはなし

子供のころ見た あの蜘蛛の糸

今も深く胸に刻まれている

カンダタは当時 わたしとは関係がなかった

かわいそうな人 悲しいお話であると

そう片付けていた ただ子供心にも覚えていた

何か予感するものがあつたのだろうか

神も仏もなし 本当にそうでしょうか

我に罪咎あり それゆえにと

あなたをそしる資格はありません

わたしは今なお 救いを求めて彷徨っています

いにしえのひじりの言葉よりも 自分を顧みます

さとりとは 罪の自覚のことでしょうか

しかれども救いはあり

あなたの社の周りで憩う

そのひととき わたしの病は癒やされる

あなたはいつもあたたかく迎えてくださる

わたしはあなたのゆりかごで育った

神よ あなたは自然の囁きで答えになる

魂が天の山を登ってゆくときまで

神よ どうかお守りください

あなたの慈しみに感謝いたします

子供のころ見た あの蜘蛛の糸

今も深く胸に刻まれている

カングダは今 まさにわたしにほかならない

罪を犯し 六道の下層を輪廻している

そう今は感じている わかったのは大人になってから

何か予感通りになってしまったのだろうか

わが神 なんぞ我を見捨てたまひし

わたしの罪が わたしの嘆きの理由

懺悔すれども 仏の慈悲は届かず

癒すにすべなし 神の愛によっても

されどあなたは手を差し伸べる

今度は欲のため 糸が切れることのないように

あなたの御手を わたしはしっかりと握りしめる

今はただ あなたを畏れかしこみ 御前にひざまずく

わたしが愛した小鳥と共に

あなたは常にわたしのうちにある

赦したまえ 護りたまえ わが守護神よ

「たまさかに 神が憐れみ 蜘蛛の糸 己が欲にて 落ちるべからず」

「わが渴き 御歌によりて 癒されん げに奇しきかな 涙し流る」

「わが叫び 神と共なり 必ずや 救いの御手は 差し伸ばさるる」

以下、小鳥の聖典が続く。

五烏經

現代語訳

高河慧佑訳註

五ご鳥からすき経よう

そもそも神社というものは、天地そのものを模型として表したものである。神は天地の間にあまねく満ち満ちていて、万物を造られ、すべての民を守護される。そして、天地に満ちる元気¹も、すべての生きとし生けるものも生命を持たないものも²、何ひとつとして神に造られていないものはない³。

¹ 中国の思想において、万物生成の源であり、世界を循環する気、エネルギーのこと。古くは易経や老荘思想が淵源である。本書の場合、陰陽の二気、五行の五気ともとれるであろう。貝原益軒の『養生訓』では、元気は人間の体を流動する活力のようなもので、これが滞るとさまざまな病気になるとしている。人間の気は天地の気とつながっており、天地の元気を受けて生きているとする。人口に膾炙している言葉だが、要は「病は気から」ということを言っている。彼は神仏にむやみに頼らず、むしろ神仏・父母からいただいた命を大切にしよう説いている。普段から養生に努めて、病気を未然に防ぐこと、心に戒めておくべき教えであろう。まず自助努力あってこそその健康であり、敬神につながることである。彼の言葉で有名なのが、「医は仁術」である。神の御心もそれと同じである。

² 原文では「有情非情」と記されているが、これは仏教の概念である。すなわち、有情は生きとし生けるもの、生命・精神を持つもの、衆生世間のことである。非情とは物質世界、生命のないもの、器世間のことである。両者合わせて内外（ないげ）と呼ばれる。

³ 序文においてこの思想家は、この五鳥教というべき神話の要約をしている。

さて、この村の鎮守^{ちんじゅ}である五鳥大明神^{ごからすだいまみょうじん}について、大昔には本地垂迹^{ほんじすいじやく}に基づいて書かれた由緒の伝記があつたけれども、過去に何者かによつて盗まれてしまった。いまさら繰り返して書くこともないけれども、歳月が過ぎて世の中が移り変わつていった後のことを考えると、筆をもつてしてでないと誰がこれを伝えることができようか。

⁴その土地の守り神。

⁵わが高洲村の独自の神である。「大明神」というのは、本地垂迹説に基づいた神仏の尊称である。

⁶中世に起こつた神仏習合の思想で、神と仏は一体であり、本来の姿（本地）は如来であるが、日本に神々として現れているのを垂迹という。自らはすでにさとりをひらいているが、衆生済度のために迹を垂れるという。『法華経』の本門と迹門、『大日経』の本地身と加持身に由来する。西洋でも土着の神々を聖人として取り入れるなどの例は見られるが、悪魔に格下げされるなど、その扱いは妥協を許さない排他的な面がある。ただ、土着の民族の努力で、古くからの神々を巧妙に保存している場合がある。エジプトのイシスは、聖母マリアと同一視されていた。ギリシア人は、キリストをユダヤ人のゼウスと呼んでいた。イスラム圏においては、このような思想的な動きは見られず、支配した土地に居住する異教徒の宗教を、ジズヤと呼ばれる税金を払うことで認めていた。存在は認めるが、宗教としては峻別していたということである。『コーラン』では、イサー（イエス）、マルヤム（マリア）、ムーサー（モーセ）などといって、啓典の民としてユダヤ教とキリスト教には親近感を持っていたようである。そもそもアッラーは、父なる神、ヤハウエと同一神である。日本人は概ね寛容な民族であるが、明治期に国学などの影響で、神仏分離・廃仏毀釈が起こるなど、極端な事態もあつた。思想的・精神的退行を示した黒歴史である。いつの時代も、山口県の詩人・金子みすゞの「みんな違ってみんないい」という共生的姿勢が大切ではないだろうか。

そこで、村の年寄りの言い伝えを聞き伝えるところでは、『第三十三代推古天皇』の治世、^{いつくしま}厳島大明神が西域の国より神通^{じんづう}の雅な車^二に乗られて、五色の鳥^三にひかせて空を飛び、日本の伊予国の石槌山に着かれた。しかし、その地にはすでに石槌権現^{いしづちごんげん}がおられたので、それからまた五色の鳥に乗られ、ついに伊保庄島^四に着かれた。しばらくご滞在されているうちに、五色の鳥がにわかにな病いを受けられ、苦しみの叫び声を上げられてこう宣^{のたま}われた。

〔西暦593年から628年在位。仏教や儒教など、中国の先進文化を取り入れた聖徳太子を摂政とした飛鳥時代の賢帝である。〕

。イチキシマヒメノミコト。『古事記』でアマテラスとスサノオの「つけい」によって生まれたスサノオの三人の娘の二柱。いわゆる宗像三女神として宗像大社や厳島神社で篤く信仰されているほか、全国的に祀っている神社は多い。海の神であることから、のちにインドの河の神サラスヴァティーと同一視され、仏教を守護する弁才天となる。護国の経典である『金光明経』にまことに美しい天女として登場し、人々の福徳を願われている。七福神の紅一点として弁天様と親しまれている。

。宗像大社一帯を指すのか、中国あるいはインド、果てはペルシアやエルサレムを指すのかは不明。

。超自然的な力、霊的な力。

。二原典には「都率車」とあるが、貴人が乗る牛車のようなものである。御所車または源氏車。『源氏物語』で車争いと呼ばれる貴族同士が道をめぐって争うシーンがある。牛でひかせるのをここでは五色の鳥にひかせているのである。いわば古代人が夢想する飛行機である。

。二一般的にはヤタガラスであって、三本足で黒いカラスであるが、わが五鳥大明神は五色のカラスである。ヤタガラスは熊野が有名であり、古事記において神武天皇の東征を先導した霊鳥である。本来わが国では、アマテラスと共に太陽神である。中国や朝鮮でも古代、三本足の鳥が太陽の象徴として信仰されていた。高句麗の壁画に、勇壮な鎧馬武士と共に、太陽の中に霊妙な三本足の鳥が描かれている。八咫鳥は日中韓共通の神であり、昨今の険悪な関係を解く架け橋となることを期待する。さらに、世界各地にカラスが重要な役割を果たす神話が多い。仏教においては、日天が持つ日輪の中に三本足の鳥がいる。また、賀茂神社の祭神である賀茂建角身命が化身した姿ともいわれる。カラスは非常に知能が高いことで知られており、古代の人々もそれを観察していたものと思われる。「慈鳥反哺」という中国のことわざもあり、カラスは年老いた親に餌を与えるという儒教的な孝行の徳も担っている。

。三イワツチヒコノミコト。イザナギとイザナミの神産みの際の第二子とされる。石槌山は霊山として伝説的修験者である役小角が開山。「権現」も「明神」と共に、本地垂迹の尊称である。

。四往古、伊保庄（室津半島）は島であったことは、地元の知識人たちの間では定説だったようである。本州とは地続きではなく、唐戸の水道という水路で隔てられていた。そこにある時、鯨が迷い込んでしまい、付近の村人たちが助けて海へ帰してやったという微笑ましい伝説まで残されている。つまり、伊保庄も「宮島」だったのである。現在は宮半島である。

「わたしの名は五鳥ごからすといい、東城国みやこにおいて十二代の帝みかどに仕え、数万年の齡よわいを保っている。今際の時までも老病衰じょうしやひつすいというものを知らなかったけれども、盛者必衰じょうしやひつすいの始めあるものは必ず終わりあり、という世界の掟は逃れることができない。しかし、わたしの魂は中有ちゆううに留まり、あなたがたの命根長養みょうこんちやうようの守護神となろう。わたしの姿が青黄赤白黒せいこうせきはくこくと五つの色を現すことは、すなわち五智如来ごちによらいであり、五行ごぎやうである

¹⁵この時代、都は飛鳥の宮であるが、神武天皇以来のヤマト政権と見てよいであろう。

¹⁶ヤタガラスは初代神武天皇から仕えていたと思われるが、ここでは21代雄略天皇から推古天皇ということになるのか。あるいは神武から推古まで断続的に仕えていたのか。

¹⁷この世は無常であり、勢力のあるものにも、必ず衰える時が来るとのこと。言わずと知れた『平家物語』の冒頭である。

¹⁸仏教に四有という概念があり、衆生が生まれては死ぬことを繰り返す期間を四つに分けたもの。存在が生まれる瞬間を生有、生きていく期間を本有、死ぬ瞬間を死有、存在が死んで、次に生まれ変わるまでの期間を中有という。この間、霊体ともいべき身体を持つ。唯識派のヴァスバンドウ（世親）の『俱舍論』に詳しい。中陰ともいわれ、葬式の後の四十九日もこの期間とされる。つまり、この伝説は輪廻転生説をとっている。しかるに、五鳥神は現在には中有という霊界におられるが、いずれイエス・キリストのように復活し、再臨・顕現し我々を救済される。そして今現在も我々を守護しておられる。大本教では、中有界とは現世と天界の間にある霊界であり、五鳥神は現世の我々衆生を憐れみ、あえて天界には昇らず留まっておられると思われる。

¹⁹密教において、行者が入神する際に唱える護身神法という加持祈祷の呪文の言葉の一部である。次の五臟安寧という言葉とともに、私は護身神法以外で目にしたことはない。それゆえ、あえて訳さなかった。この呪文は神道でも唱えられるそうであるが、後述されるように五鳥大明神の本地は五智如来であると明言されているので、この護身神法は真言密教由来のものである。私はこの呪文を、とある理由で体で覚えていたから発見した。つまり神は我々の長寿を約束されたということである。

²⁰親鸞の『歎異抄』などでは、「しろうおうしやくびやくこく」と読む。次の五智と五行がこの五色の由来である。

²¹真言密教の本尊であり、宇宙そのものであり真理である。曼荼羅に描かれ、東西南北と中央に五つの仏を配し、それぞれ五つの智慧を表している。すなわち、東は大円鏡智の阿闍如来、南は平等性智の宝生如来、西は妙觀察智の阿弥陀如来、北は成所作智の不空成就如来、中央は法界体性智の大日如来である。金剛界五仏。慈悲を表す胎藏界の五仏も同体とされ、憤怒相は不動明王を中心とする五大明王である。内容は違うが、浄土教にも五智が説かれている。空海の思想では、神々や諸仏は大日如来の化身とされる。ギリシアのプロティノスも、すべては「一者」という根源的存在から流出したものであるという。つまり、五鳥大明神の本地、本来の姿は五智如来、あるいは大日如来ということである。

²²中国の陰陽五行説において、世界を循環する五つの元素のこと。木・火・土・金・水（もつかどこんすい）。これが五色に配当されているのである。現象界を説明する思想であり、木から火が、火から土が生じる様子を相生説、水は火に、火は金に勝つ様子を相剋説という。易学や中医学の基礎とされ、わが国では安倍晴明で有名な陰陽道として発展し、文化や習俗にも大きな影響を及ぼした。古くは春秋戦国時代の諸子百家のうちの陰陽家が起源である。鄒衍という人物が陰陽説と五行説をまとめた。仏教では地水火風空の五大が説かれているほか、西洋にも従来の地水火風の四元素に、アリストテレスがア以太ール（エーテル）という天界の物質を加えて五元素ある。奇しくも東西の思想が一致しており、世界が五つの元素で成り立っているという哲学は普遍性がある。

り、五臓²³を守るといふわたしの神性の表れである。人間はもちろん、すべての生きとし生けるものまで、もろもろの病気わずらいを癒やして²⁴、あなたがたの五臓^{ごぞう}安寧^{あんねい}²⁵の守護神となろう。」

と誓願²⁶されてたちまち亡くなられた²⁷。 葦島大明神は深く悲しまれ、鬼門²⁸に当たって清浄な地に埋葬したいとおぼしめし、錦の打ち掛けを脱がれ、五鳥のなきがらを包み、波打ち際に置かれた。すると、たち

まち丑寅²⁹の方角から強い風が吹き起こって、砂や石を吹き寄せ、五鳥を埋葬した所が三町³⁰の範囲が高き

²³人間の内臓も、五行説では五行にそれぞれ配当される。陰陽五行説が中医学（漢方）の基礎とされ、人体の説明や疾病の治療法につながっていることから、五鳥神は無病長生を司る医療神となっていると考えられる。

²⁴五鳥大明神は医療神、治癒神、無病息災の神である。前述のごとく太陽神でもあり、それに加え、後代には『日本書紀』の保食神（古事記ではオオゲツヒメ、故に五鳥神は女神とも考えられるが、筆者は性別を超越した神と考えている）と習合されており、五穀の神、豊穰神でもある。五穀も五行にそれぞれ配当される。

²⁵註19を参照。健康、心身の保護の約束。私はこれに心月澄明という言葉を加えて、身体と精神の保護を求めたい。もっとも、五鳥神の誓願は護身神法そのものであり、すべての災いからの守護に他ならない。

²⁶わが神のありがたいご誓願であり、慈悲の御心である。これは神との契約であり救済の約束である。めざましい医学の進歩によって、神のご誓願は漸進的に果たされているといえよう。誓願といえは、阿弥陀仏の「もし衆生が浄土に生まれなければ、わたしはさとりを開かずにとどまる」という本願があまりにも有名である。わが神のご誓願も、「もし衆生の病いがなくならないのならば、わたしも共に病いに苦しむ」という決意表明なのかもしれない。私はこれに加え、キリストが人類の罪を代わりに贖われたように、五鳥神も我々が本来受ける病気や苦しみを、すでに少なからず肩代わりされていると考える。というのは、キリストが父なる神から受肉して人として降臨したように、五鳥神も本地の五智如来から垂迹して五色の鳥となっているからである。そして、キリストが罪を引き受けられたように、五鳥神も病を引き受けおられるように思われる。そもそも古代イスラエル社会においては、病気は犯した罪の表れであり、イエスが罪を赦したことは、すなわち病が癒やされ、社会に復帰することであった。わが国の神道でも、病気になるのはその人に罪が附着してしまっただけと考え、それを水や大幣などで清めればけがれが祓われ、たちまち健康を取り戻すいうものである。イザナギが黄泉の国のイザナミのもとを訪れたことでけがれを負ってしまったため、筑紫の阿波岐原で禊をして、身についたけがれを清めたというのは祝詞で奏上される通りである。西では水で洗礼を授け、東では水だけがれを祓う。水で清める、水に流すというのは共通する考え方である。イエスは罪を赦すことで人々の病を癒やし、生き返らせることまでした。それゆえ、五鳥神も我々の罪がれをも引き受けられていると見るべきである。仏教にも、地藏菩薩に代表される「代受苦」という考え方があ。これらに共通するのは、究極的な自己犠牲の精神である。

²⁷まるで『大般涅槃経』の釈尊の入涅槃と重なるようである。釈尊の死を惜しむあまり、大乘仏教では実はブツダは死んでいない、常住であるという願いからさまざまな経典が作られた。

²⁸北東の方角。陰陽道で鬼が出入りするといつて忌み嫌う。おそらく鬼門を守護するためにここに祀られたのであろう。ちなみに、神出赤石の葦島神社も伊保庄近長の賀茂神社も、やや北東に向かつて鎮座している。後述する御神木があったと推定される第一の鳥居とお地藏様は完全に鬼門に向いている。金光教や大本教の良の金神は、祟り神から救いの神へと変貌している。

²⁹十二支で丑と寅の間、鬼門に同じ。

³⁰約300平方メートル。

洲³¹となった。これによってこの地域を高洲村^{たかすむら}と名づけた。巖島大明神がそこに翡翠^{ひすい}のかんざしを墓印に立てられると、自然に枝葉を生じて、陰陽二股^{いんよう}の杉の大木^{おもと}になった。五鳥大明神は、この御神木に姿を変えられたのである。ここに小さな社を建て、五鳥の宮と名づけた。ここを宮の上というのもこの時から始まる。

高洲村から五、六町³⁴ほど南の浜に、屏風岩^{びょうぶいわ}という霊石^{れいせき}がある。ここは巖島大明神が伊保庄島にご滞在の間に住まれた所であって、今も小社がある。恐れ多くも巖島大明神は、その昔、正法^{しょうぼう}の世においては如来³⁶であったが、衆生済度^{しゅじょうさいど}のために一度女神の姿をとってこの世界に顕現^{けんげん}された。そのため下界の習い

³¹ 土砂が堆積し、河川にできた盛り上がった陸地。仏教では洲のことを「ディープ」といい、さとりの世界を迷いの河から逃れる島と喩えられる。

³² 緑色の寶石。古来わが国で珍重され、勾玉の素材として使われた。越国（新潟県）が有力な産地であった。

³³ 往古はこの御神木がそびえ立ち、人々の信仰を集めていたわけだが、後述の通り現在は朽ちて残っていない。ちなみに、小鳥社の境内にある手水石の後ろに、ちょうど陰陽二股に分かれた木が生えている。神社の裏には、三本足を象徴するような三股の巨木も立っている。日本のスギの王者は、屋久島の縄文杉（なんと樹齢4千年）である。樹木に対する信仰としては、北欧神話の世界樹ユグドラシルが極まった感があるであろう。

³⁴ 約500メートル以上。

³⁵ 釈尊が入滅してから、その後500年間の期間。仏・法・僧という仏も教えも僧団も保たれ、平和な世の中であるという。中世に末法思想という考え方が流行し、ブツダが入滅してから五百年間を正法、次の千年を像法、その後一万年を末法という。次第に仏法も廃れ、世の中が乱れてくるという。いわば仏教における終末思想である。

³⁶ さとりをひらいた仏のこと。真如の世界から衆生済度のために、迷いの世界に來った存在という意味である。

³⁷ 生きとし生けるものを救おうとする神仏の御心。

で、女の穢役³⁸も逃れられなかった。月の障りになられて、その不浄水を石の上に流された。その所を赤石^{あかいし}と名づけた霊石³⁹が今もある。

ところで、巖島大明神は伊保庄島に着かれてから、どうも御心持ちがすぐれなかった。薬になる水を求められたが、付近に水はなかった。「さて、どうしましょう」とお考えになり、石の上に登って、三日三夜の間、結跏趺坐^{けっかふざ}して水天の咒^{まじ}を唱えられた。すると海の向こうから、立烏帽子^{たてえぼし}を被り、狩衣^{かりぎぬ}を着た霊妙な人が忽然^{こっぜん}と現れ、石の上にお腰をかけられて、「ここに水があります」と指差された。その所をかんざしをもって掘られると、たちまち清らかな水が湧き出た。今も伝わる見石清水^{みいしきよみず}という湧き水はこのことから由来する。そしてその霊妙な人に、「あなたはいったいどなたで、どちらから来られたのです

³⁸ いわゆる女性の月経、生理。

³⁹ 赤石は般若姫伝説と混合しているが、おそらくこちらがオリジナルである。驚くほどの巨石に、本当に血が流れたあのような赤い紋様がある。周囲にも巨石が連なり、巖島大明神が終の住処とされた宮島の弥山頂上の巨石群と近似している。無関係ではないであろう。小鳥社の境内にある霊石も、神霊宿るものとして信仰されていた磐座である。小鳥の山の頂上付近にも巨石が散見される。霊水と伝わる井戸からさらに斜面を登った先に、石垣が積まれた古代の祭祀場の跡のような場所があり、頂上には熊野のゴトビキ岩を思わせる巨岩がそびえ立っている。世界に目を向ければ巨石崇拜の例として、イギリスのドルイドたちが信仰していたストーンヘンジ、アボリジニの聖地であるウルル（エアースロック）がある。

⁴⁰ 仏教の修行者が瞑想する際にとる足の組み方、姿勢。

⁴¹ インドのヴァルナという水の神が仏教に取り入れられた。真言は「おん ばろだや そわか」である。

⁴² 貴族が被る帽子。まさにカラス帽子である。熊野那智大社の神職は、祭りの際、ヤタガラスを模した八咫烏帽なる帽子を被るそうである。

⁴³ 貴族の普段着。烏帽子とセットである。

⁴⁴ 現在、地元の鮮魚店があるところの崖っぷちにこの霊石があり、その下から霊水が湧き出ている。この辺り一帯を「見石」という。昔は酒屋が水もらいに来るなどしていたといい、今まで一度も涸れたことがない神聖な水である。鮮魚店の方が大事にされているので安心である。先の赤石の屏風岩とは別の霊石である。

か」とお尋ねになった。すると靈妙な人は、「わたしは大神宮の分魂^{まゐ}で、蛭子三郎^{ひるこ}という者です」と答えられた。蛭子三郎が御腰をかけられた岩を、岡田蛭子と名づけて今も残っている。

大昔、高洲村は田畑や人家もまばらで、浦にただ漁民の小屋があるくらいだった。そうした清らかな地なので、巖島大明神はお気に召されて、ずっとお住みになりたいと思われていた。しかし不思議なこと、だんだんと戌亥^{いぬい}の方角が自然に本州と近づいてしまった。巖島大明神は穢氣不浄^{えき}を嫌われて、さらにここからまた、東方の王城に近づいて、どこか清浄な島を見立てて住処を定めたいとお考えになった。そして波打ち際の石上に登られ、汐^{しお}の満干をはかり、遙かな沖に向かって船を乞われた。すると、東の海から五色の帆をかけ、瑠璃^{るり}で屋根を葺いた船^{ふね}が石岸に着いた。巖島大明神は大変お喜びになり、打ち乗ら

⁴⁵ 大神宮とは普通伊勢神宮であるが、なぜヒルコがそのわけみたまであることは不明。あるいは蛭子神の総本社とされる兵庫県の西宮神社のことかもしれない。アマテラスとヒルコは双子であったという説がある。真偽の程は不明であるが、もしそうなら分魂と言っているのも頷ける。

⁴⁶ いわゆる七福神の恵比寿様。古事記ではヒルコは、イザナギとイザナミによる国産みの初子であったが、障害児であったため葦船に乗せて海に流したとある。オオクニヌシの長子であるコトシロヌシともされるが、私は海からやってきて薬水を得させたという点は、むしろスクナヒコナを思わせるところがあると思う。この神も海の神であり、イチキシマヒメと共通する。

⁴⁷ 北西の方角。十二支で戌と亥の間。

⁴⁸ もともとイチキシマヒメは宗像の神である。沖ノ島などが神聖視され、現在も女人禁制であり、男子も褌をしなければ立ち入り禁止にされていることなどから、人の寄り付かない清浄な島を好まれると考えられる。神道ではケガレを避け、祓い清めることが重視される。

⁴⁹ 屋形のある和船である。瑠璃とは深みのある青い宝石、ラピスラズリのことである。屋形の屋根を瑠璃でふき、五色の帆をはためかせた想像するも見事な船である。

れた。そして今の巖島に着かれ、末世^{まっせ}の衆生済度の大願を成就された。このいわれをもって、この場所を船乞浦斗ヶ岩^{ふなごいうらとがいわ}と言ひ伝えられている。

そののち、一千余年の星霜^{せいそう}を経て、五鳥の小社も朽ち、陰陽二股の御神木も朽ちてわずかに枯れ木が残り、朽木のみであった⁵¹。その頃から高洲村は徐々に人家も増え、田畑も作り、村里が栄えていた。ときにある夜、村人一同の夢の中に、五鳥大明神が御頭に宝冠^{ほうかん}を被り、五色の天衣^{てんね}⁵³などを纏われた姿で現れ、夢中神勅^{しんちよく}⁵⁴にこう告げられた。

⁵⁰ 註35を参照。正しい教えが廃れ、世界が滅びに向かう時代である。五十六億年後に現れるという弥勒菩薩を期待したいものである。

⁵¹ 前述の通り、古くは御神木信仰があったと思われるが、遺構は定かではない。現在、麓の第一の鳥居とお地藏様がある所を古名を「美塚」といい、おそらくここであったと考えられる。いわば、高洲の「おくつき」である。

⁵² おそらく、大日如来が被っている金剛界五仏が彫られた冠である。五仏宝冠。ここでは鳥の神が、人の姿をとって現れている。

⁵³ いわゆる、天の羽衣である。遥かないにしえの時代、御祖の前に鮮やかな五色の鳥として垂迹して現れた神が、この近い祖先の夢の中では、五色の衣を纏った叡智界の本来の姿で現れているのである。

⁵⁴ 神託、神からのお告げ、啓示。

「わたしの社をここから南の山に移して、この朽木をもってわたしの姿を刻み、安置して登礼しなさい。わたしが五色を現しているのは、この世界の空劫^{くうこう}⁵⁵が終わり、次の世界の成劫^{じょうこう}⁵⁶の初めの時、黄なる風⁵⁷を生じて、それが次第に五色の風となるからである。それは、すなわちわたしの魂魄^{こんぱく}である。それゆえ、天地の間、無量無辺^{むりょうむへん}⁵⁸、森羅万象^{しんらばんしやう}⁵⁹のうち、何ひとつとしてわたしの神力^{じんりき}によらないものはない⁶⁰。」

⁵⁵ 仏教における四劫という概念。世界が成立して破滅するサイクルの四つの期間。世界が始まる時を成劫、世界が存続する期間を住劫、世界が壊滅に向かう時を壊劫、世界が終わり何も無い期間を空劫という。これも『俱舎論』に詳しい。思うに、この哲学は前出の四有という概念と軌を一にしており、つまるところ存在は永遠ということにほかならない。神が死んで復活するという観念は、無論キリストや、エジプトのオシリス、ギリシアのディオニュソスなどと類似する。永生不滅の霊鳥としては、不死鳥フェニックスとかなり重なるところがある。

⁵⁶ 註55を参照。天地初発のたまゆら。

⁵⁷ 『俱舎論』に、「成劫従風起（成劫は風の起る従り）」、現代語訳「成劫はその空しい空間に有情の業力によって微風が吹きそめるときから」とある。おそらくここが出典である。なぜ初めに生じるのが黄色い風なのかは、五行のうちで土である黄色は中心を意味し、鎮座する神は黄龍、あるいは麒麟であって、密教では大日如来を表しているからであろう。

⁵⁸ 計り知れないほどの数と大きさ。無限。

⁵⁹ 宇宙で起こるすべてのものごと。

⁶⁰ つまり、五鳥大明神は世界創造者であり、同時に宇宙そのものである。普通神道では、アミノミナカヌシをはじめ、造化三神による天地開闢が説かれるが、当神話では五鳥神が一切の造物主である。あるいはアミノミナカヌシ、プラトンのいう「デミウルゴス」、アリストテレスのいう「不動の動者」、プロティノスのいう「一者」と同一であろうか。とにかく世界の根源「アルケー」にほかならない。天地創造という点でキリスト教やイスラームなどの一神教と相通するものがあり、我々もその一部であるという思想は、空海の思想や梵我一如を説くウパニシャッドの哲学などの汎神論に近い。そもそも、宇宙の創造から破壊に至るまでのサイクルは、ヒンドゥー教のブラフマー・ヴィシヌ・シヴァの三神（トリムールティ）の關係に類似するものである。それを当神話では、五鳥大明神という唯一の神に昇華させている。この世界を循環型・円環型と捉えるのは、穀物や植物の再生を観察した農耕社会のものである。ちなみに、サラスヴァティーは創造神ブラフマーの妻とされており、五鳥神と厳島神との關係と符合したようになっていた。また、道教の「道（タオ）」や太極の思想も、万物を生み出す根源的存在を説くものである。仏教では通常創造神を認めないが、五鳥教ではすべての思想を神に託している点に独創性がある。この宇宙は神であり、我々は神のうちで輪廻を繰り返している。さらに、神ご自身も計り知れない時間の中で、永遠に生まれ変わりを繰り返す不死鳥である。

そう宣われる御声とともに、みな夢から覚めた。村の人々は不思議に思い集って、山の上に神社を建て、かの朽木にて垂迹の御神体⁶¹を彫刻し、祭礼し奉った。靈験⁶²が日に日にあらたかになっていって、近くからも遠くからも人々が歩みを運んで、諸願成就したという。しかし、そのことがあった年月はわからな
い。ただ、神社の棟札⁶³を案ずるに、元禄時代⁶⁴のこのようだ。それから数十年の歳月を経て、社殿もこ
とごとく壊れて、雨風を防ぐこともできない有様になってしまった。これにより、世間の人々に微志助成⁶⁵
を勧めて、建て直すことを計画しているところである。希⁶⁶くは、一粒一銭の浄施⁶⁷を集め、すぐにでも造営
が叶えば、神力はますます増して、神と人との心の働きもいっそう強くなるであろう。神社の始まりにつ
いては、村の年寄りの言い伝えとして耳によく聞いているけれども、いま記さないでいられようか。あり
がたい言葉を集め、崇敬の便りとすることを示す。

ときに、寛政西元年霜月下旬⁶⁵

⁶¹ 私も拝見したことはないが、小鳥神社を管轄する賀茂神社の宮司でさえ見たことはないという。話的内容的に仏像としては大日如来であったと思われるが、ここでは垂迹とあるので、五色の鳥である可能性もある。人々が夢で見た神の姿をそのまま彫刻したのかもしれない。

⁶² 不思議な力、神仏のご利益。

⁶³ 建造物に打ち付ける建設年数や棟梁の名などを記した札。

⁶⁴ 西暦1688年から1704年まで。

⁶⁵ 西暦1789年、霜月は11月。

五烏社ノ地主⁹⁹ 謹言

⁹⁹この五烏社ノ地主という人はよくわかっていない。地主というからは賀茂神社の宮司のご先祖様かと考え、尋ねてみたが不明。神社の周りの土地は私の家が所有しているが、このような書物を書ける者がいたかどうか・・・。原典の古文書の表紙の端に「河野百太郎」とあるが、この人は五烏社ノ地主ではない。なぜなら、別の小烏神社の沿革について書かれた古文書において、明治22年に小烏社を再建した時の総代を務めた人物として名が記されているからである。だから、既存の伝説を筆写した人に過ぎない。この伝説は、あくまで「村老の言い伝え」であり、村民の共通理解であったと思われるが、多分にこの五烏社ノ地主の思想が活きていると感じる。いまだに神秘に包まれている思想家である。

五烏經

伊保庄弁版

高河慧佑訳

五鳥経

ちゅうかい神社つちゅうもんは、世界をこもうして建てたようなもんじゃ。神様は世界の隅々まで満ちておって、よろずのものをお造りになり、わしら人間のことをみな守つちよられる。それに、世界に満ちておる靈気も、すべての生きちよるもんも生きちよらんもんも、みな神様がお造りになったもんじゃ。

ほいじゃが、この村の鎮守様の小鳥さーについて、むかしゃー神と仏が一緒じゃちゅう説に則って書かれた伝記があったがの、いつかけしからん奴に盗まれてしもうた。今になって繰り返して書くこともないがの、年月が過ぎていったら言い伝えが失われてしまいそうじゃけえ、わしが書いておこうと思う。

そいで、村の年寄りが言うことを聞き伝えるんじゃがの、大昔の推古天皇の時代に、弁天さーが西の方から雅な車に乗られての、小鳥さーにひかせて空を飛んで行っちゃったんじゃ。ほいで伊予の石槌山に着かれたがの、そこにやーもう石槌権現さーがおっちゃったんじゃ。じゃけえまた小鳥さーに乗っちゃって、ついにこのよのしように来ちやったんじゃ。しばらくご滞在されたんじゃが、小鳥さーが急に病気になられての、はーえらいと叫び声を上げられてこうゆうちやったんじゃ。

「わしやーのう、五鳥というもんで、東の都で十二代にわたって帝に仕えておって、もう数万年も生きておる。今まで老いも病いも衰えも知らんかったが、盛者必衰で生者必滅っちゅうけえの、その世界の理はわしでも逃れられんのじゃ。じゃがの、わしの魂は靈界にしばし留まって、お前らの長寿を約束する守り神になろうと思うぞ。わしが青黄赤白黒と五つの色を現しちよるんは、つまり五つの智慧の仏ちゅうことで、五つの元素っちゅうことで、五臓六腑を守るっちゅうことじゃ。人間はもちろんじゃが、すべての生きとし生けるものまで、もろもろの病氣わずらいを癒やして、お前らの心身を保護する守り神になろうと思うのじゃ。」

とお誓いになられてたちまちのうなってしまうわれた。弁天さーはぶち悲しまれての、鬼門の方の清らかな所に埋めちやりたいと思われての、着ちよった錦の打ち掛けを脱がれて、小鳥さーのなきがらを包んで、波打ち際に置いちやった。するとの、すぐに丑寅の方から強い風が吹き起こっての、砂やら石やらを吹き寄せて、小鳥さーを埋めた所が三町くらい高い洲になったんじゃ。じゃけえこの辺を高洲村ちゅうて名づけたんじゃ。弁天さーがそこに翡翠のかんざしを墓の印として立てちやったんじゃが、それが自然に芽吹いてむくむくおおきゅうなり、陰陽ふたまたに分かれた杉の大木になったんじゃ。小鳥さーはこの御神木に

なっっちゃったちゅうことじゃいの。ここに小さい神社を建てての、五鳥の宮と名づけたんじゃ。ここを宮の上というのもの、この時から始まったことなんじゃ。

高洲村から五、六町ほど南の浜にの、屏風岩っちゅう霊石があるんじゃ。ここは弁天さーがよのしょうにおっっちゃった時に住んじよられた所で、今も小さい神社があるんじゃ。畏れ多いことじゃがの、弁天さーはかつては正法の世では如来じゃったんじゃが、わしらを救うために女神の姿をとってこの世にお見えになったんじゃ。じゃけえ下界の都合で、女の身に起こることも避けられなかったんじゃ。そいで生理になっっちゃって、その血を石の上に流されたんじゃ。その所を赤石と名づけた霊石が今もあるのじゃ。

ほいじゃが、弁天さーはよのしょうに来っちゃってから、どうもご気分がすぐれなかったんじゃ。薬になる水を探されたんじゃが、へりに水は見つからなかった。「さて、どうするかのう」と悩まれて、石の上に登って、三日三夜の間、結跏趺坐してのんのんと水天の咒をお唱えになった。すると海の向こうから、立烏帽子を被って、狩衣を着た靈妙な人が突然おいでになったんじゃ。石の上にお腰をかけられて、「ここに水があるぞ」と指でさし示しちやった。そこを弁天さーがかんざしで掘られるとの、たちまち清らかな水が湧き出てきたんじゃ。今も伝わっとる見石清水っちゅうでみはこれから来とるんじゃ。そしてその靈妙な

人に、「あなたはいったいどちらさんで、どこから来ちゃったんですか」とお尋ねになった。すると靈妙な人は、「わしは大神宮のわけみたまで、蛭子三郎というもんじゃ」と答えられた。蛭子さーがお腰をかけられた岩を、岡田蛭子と名づけて今も残っちよる。

むかしさーの、高洲村は田んぼや家もまばらで、海辺に漁師のほいとー小屋があるくらいのもんじやった。こねーな清らかな土地じゃけえのう、弁天さーは気に入っちやって、ずっとお住みになりたいと思われちよったんじや。じゃが不思議なことに、だんだんと戌亥の方が自然に本州に近づいてしもうた。弁天さーはけがれをせんないと思われての、よのしょうからまた、東の都に近づいて、どこか清浄な島を見立ってて住処を定めたいとお考えになっちやった。そいで波打ち際の石の上に登っちやって、潮の干満をはかって、遥かな沖に向かって船を乞うちやった。すると、東の海から五色の帆をかけた、瑠璃で屋根をふいた船が岸に着いたんじや。弁天さーはぶち喜ばれて、すぐさまお乗りになっちやった。そいで今の巖島に行かれて、この世も末な時代のわしらを救いたいという願いを成就されちゃった。このいわれがあるけえ、この場所を船乞浦斗ヶ岩と言い伝えられちよるんじや。

そのあと、千年以上の歳月が過ぎての、五鳥の神社もやれてきて、陰陽ふたまたの御神木ももげてわずかに枯れ木が残り、朽木だけになってしまつた。その頃から高洲村は徐々に人の家も増えての、田んぼもようけ作つて村が栄えとつた。ある夜のことなんじゃが、村人一同の夢の中に、小鳥さーがおつむりに宝冠を被り、五色の天衣などを纏われた姿で現れて、神様からのお告げとしてこうゆうちやつた。

「わしの社をここから南の山に移して、この朽木でわしの姿を刻み、安置して参拝しなさい。わしが五色を現しとるんは、この世界が終わつて、次の世界の始まりの時、黄色い風を吹き起こし、それが次第に五色の風となるからじゃ。それはの、つまりわしの魂じゃ。じゃけえ、計り知れない宇宙全体、すべてのものごとは、みなことごとくわしの力によるものなんじゃ。」

そうおつしやるみ声とともに、みな夢から覚めた。村の人らーは不思議に思い集つて、山の上に神社を建てての、その朽木で神像の御神体を作つて、祭り奉つた。だんだん靈験あらたかになつてゆき、近くからも遠くからも人々が歩みを運んで、もろもろの願いが叶つたということじゃ。じゃが、そのことがあつた年月はわかちよらん。ただ、神社の棟札を見るところでは、元禄時代と書きちよる。それからまた数十年経つたら、社殿もあちこち痛んで、雨風を防ぐこともできない有様になつてしまつた。じゃけえ、世間の人々の

助けを借りて、建て直すことを計画しとる。願わくは少しでも浄財を集めて、すぐにでも再建することができれば、小鳥さーのお力はますます増して、わしらを救わんとするお働きもいっそう強くなるじやろう。神社の始まりについては、村の年寄りの言い伝えとしてよく聞いちやあおるが、いま書いておかないでいられようか。ありがたい言葉を集め、信仰の勧めとしたいものじや。

ときに、寛政元年霜月下旬

五鳥社ノ地主 謹み敬って申す

寛政元酉

高洲村

五烏大明神社

再建奉加牒

霜月吉宿

河野百太郎

高河慧佑書写

五鳥大明神社再建立序

夫社ハ天地ノ小形ナリ。神明ハ天地ノ間ニマンマントシテ、萬物ヲ造化シ、万民ヲ守護シ玉フ。迄（しん）
にように乙の部分（口）ニ天地ノ元氣、一切ノ有情非情一ツトシテ、神明ノ變作ニ非ト云事ナシ。

茲ニ當村鎮守、五鳥大明神、往古スイ迹ノ権ヨ傳記是レ有トイエドモ、昔（草冠に有）盜賊ノ爲ニ奪レ、
今更人口ヲモツテ碑トスト雖モ、物換リ星移リテノチ、筆ツ墨ニ非ズンバ、誰カヨク是ヲ傳ン。

茲ニヲイテ村老ノ言ヲ聞傳ルニ、人皇三十四代推古天皇御宇、嚴島大明神、西域國ヨリ神通ノ都巒（糸が
率のゝ）車ニ乗り玉ヒ、五色ノ鳥ニ曳カセ飛行シテ、日本伊豫國石槌山ニ泳（草冠に泳）着玉フト雖モ、彼
地ニハ石槌権現住玉フ故、夫ヨリ五色ノ鳥ニ乗り、伊保庄島ニ着キ玉ヒ、杳御滞留ノ間、五色ノ鳥俄（屯
に頁）ニ病腦ヲ受ケ、苦シキ聲言ヲアゲ、

「我ハ是五鳥ト申テ、東城國ニテ十二代ノ帝ニ仕工、數万年ノ齡ヲ保チ、今端（火へんに端）ノ時迄モ老病
衰ト云事ヲ弁エズトイエドモ、盛者必衰（難しい衰）ノ始メアルモノハ必終リアル世界ノ錠ハ遁レズトイエ

ドモ、我魂ハ中有ニ留リ、命根長養ノ守護神トナルベシ。我姿青黄赤白黒ト五ツノ色ヲ現ス事、五知ノ如
来、五行、五臟ヲ守ル表相ナリ。人間ハ勿論、畜類ニ至ル迄、一切諸病ヲ除キ、五臟安寧ノ守護神トナル
ベシ。」

ト誓願シ忽チ終焉ス。明神御歎キ浅カラズ。鬼門ニ當リ、清浄ノ地ニ納度思召、錦ノウチカケヲ又ギ、五
鳥ノ遺骸ヲ包ミ、波打際ニ置キ玉ヘバ、忽丑寅ノ隅ヨリ大風吹發リ、砂石ヲ吹寄せ、五鳥ノ尸埋レシ所、
方三町ノ間、高キ洲トナル。依テ此所ヲ高洲村ト号。洲ノ上ニ翡翠ノ筭ヲ墓印ニ立玉エバ、自然ト枝ハヲ
生ジ、陰陽二股ノ杓ノ木トナル。五鳥大明神是ナリ。此所ニ小社ヲ建テ、五鳥ノ宮ト号。其上ノ在名ヲ宮ノ
上ト申モ此時ヨリ始レリ。

當村ヨリ五六町南ノ濱ニ、屏風岩(シに巖のような難しい岩)ト申灵石アリ。是則巖寫大明神、當嶋御
逗留ノ間、住ミ玉ヒシ所。小社現在セリ。誠、巖寫大明神ハ、過去正法明如来タリトイエドモ、シユ生濟
度ノ爲ニ一度女身ト現シ玉エバ、下界ノ習ヒ、女ノ穢役遁レ玉ハズ。月ノ障ト成リ玉フ。其不浄水ヲ石上ニ
流シ玉ヒシ所、赤石ト号ス。灵石ニ今現在セリ。扱又當嶋工着玉フ始、御心地例ナラズ。薬水ヲ求メ玉フ
ニ近辺(邊に近いが中心が心)ニ水ナシ。如何セント思召、石上ニ登リ、三日三夜結跏趺坐シテ水天ノ咒ヲ

唱へ、向ノ海上ヨリ立烏帽子ニ狩衣ヲ着タル化人忽然ト来リ、石上ニ腰打カケ、茲ニ水アリ、ト指ス所ヲ筭ヲモツテ掘リ玉エバ、忽チ清水漏、(雨の部分が用)出ルニ、今傳テ見石清水ト申ハ是ナリ。然シテ彼化人、何レヨリ来リ玉フト尋玉ヘバ、我ハ是大神宮ノ分魂、蛭子三郎ナリ、ト答ヘ玉フ。御腰ヲカケ玉ヒシ岩ヲ岡田蛭子ト号。今現在セリ。

當村昔ハ、田畠人家ト云事モナク、浦々ニハ只漁人ノ小屋ノミニテ清キ堺ノ地ナルユエ、巖寫明神、永代栖ニモト思召、暫、(數の下に日)御滞留ノ中、不思儀ナル哉、戌亥方自然ト陸地ニ近寄リケレバ、穢氣不淨ヲキライ玉フ。是ヨリ東方王城ニ近付、清淨ノ寫ヲ見立、栖ヲ定ムベシト波打際ノ石上ニ登リ、汐ノ満干ヲハカリ玉ヒ、遙ノ沖ニ船ヲ乞玉エバ、東方ヨリ五色ノ帆上、瑠璃ノ苦ヲフキタル船、石岸ニ着ス。御悦ヒ浅カラズ。打乗玉ヒ、今ノ巖嶋ニ着玉ヒ、末世ノシユ生濟度ノ大願成ジュシ玉フナリ。此謂レヲモツテ、船乞浦斗ガ岩ト云傳フ。

ソノ迄、一千餘年ノ星相ヲ歴テ、五鳥ノ神木小社モ破壊シ、纔ニ枯残リシ朽木ノミナリ。此時ヨリ次第ニ人家ヲ結構シ田畠ヲ作り、村里繁昌ス。干時或夜、一村同枕ノ夢ニ、五鳥大明神、頂ニ寶冠、五色ノ天衣ナド着シ玉ヒ、夢中神勅ニ、

「我社ヲ是ヨリ南ノ山岳ニウツシ、此朽木ヲモツテ我姿ヲ彫刻、安置シ登禮スベシ。我五色ヲ現スル事ハ、此世界空劫終リ、成劫ノ始メ、黄ナル風ヲ生ジ、次第ニ五色ノ風ト成ル。則我魂魄是ナリ。故ニ、天地ノ間、無量無邊（穴冠の部分ガ心、方ノ部分ガ島）、森羅万象一ツトシテ、我神力ニ叶ハズト云事ナシ。」

トノ玉フ御聲ト共夢サメタリ。人々奇イノ思ヒヲナシ、山上ニ社ヲ建テ、彼朽木ニテスイ迹ノ御神體ヲ彫刻シ、祭禮シ奉ル。其驗日日新ニシテ遠近唐淄索歩ヲ運ビ、諸願成ジユストイエドモ、其年元詳カナラズ。干時當社ノ棟札ヲ案スルニ、元禄年中ヨリ、數十年曆ヲ経テ、悉ク破壊シテ風雨ヲ防グ便ヲ矢ヲ依之世間士女ニ微志助精ヲ勸メ、營建ヲ企ル所ナリ。コヒネガワクハ、一粒一錢ノ淨施ヲ積リ、不日ニ造營成就セバ、神力彌増感應豈唐指ンヤ。當社ノ濫觴（角へんが身）、村老ノ口演耳ニ喧シトイエドモ、今更記ニ違アラズ。序（序ノ旧書体）副言ヲ輯メ、崇敬ノ便トスト云事示リ。

干時寛政酉元曆霜月下旬

五烏社ノ地主 謹言

以下、過去の未熟なわたしの著作である。

あとがき

このたびは本書を手にとってくださり、まことにありがとうございます。筆者である私は、この高洲村の小鳥神社のお膝元にある家の末裔として、神様から生を受けました。小鳥のことを詳細に書くのは、後にも先にも自分しかいないと思い、熱意と使命感を持ってこの仕事に臨んでおります。あまり知られていませんが、小鳥神社は柳井市の中でも屈指の景勝地であると思っています。「秘すれば花」と世阿弥は申しましたが、いささか秘しすぎた感があるので、今回みなさまに小鳥神社をご紹介いたします。いつの頃からか、ごからす五鳥をこからす小鳥というようになったといえます。代々小鳥神社を信奉してきたという誇りがあるほか、幼少時代から神社の周りの山を駆け巡って遊んでおりました。幼い頃はどんな神様が祀られているのかよく知らなかったけれど、いつでも、どんな時でも、小鳥様は私と共にありました。私の心はいつも小鳥にあります。

子供の頃から鳥が大好きで、いろんな小鳥を飼ったり、野鳥の図鑑などをよく読んでいました。神社の神様がカラスの神様だと知った時、自分が鳥が好きだったことが運命だったような気がして嬉しかったです。実際、小鳥と赤石の周辺には、多くのカラスがまるで神様の御使いかのごとく生息しています。小鳥の山にはキジやフクロウまでいて、近くの土穂石川には、トンビが優雅に飛んでいるほか、カモやカワウが群れをなし、サギやハトやスズメ、セグロセキレイ、まさかのカワセミまでいます。小鳥の山からは毎年ウグイスの鳴き声が聴こえてきます。冬に庭の木にみかんなどを差しておけば、メジロやヒヨドリ、ジョウビタキなどが集まってきて目を楽しませてくれます。小鳥は多くの鳥類に恵まれ、まことに自然豊かであります。一度母が「白いカラスを見た」といい、私も遠くからそれらしきものを見た覚えがあります。アルビノという突然変異のカラスだったのかもしれない

れません。瑞鳥であります。私には、小鳥の鳥たちにとどまらず、さまざまな生き物が生息している生態系、自然そのものが小鳥様とつながっているように思え、友達や家族だと思っております。

自宅の庭から見上げる小鳥の山の光景に、幼い頃からずっと憧れてきました。何もわからない幼心にも、何か神聖なものを感じるところがあったのでしよう。今でもその光景は変わらず、30年経った私の気持ちも変わっていません。小鳥の山には暇さえあれば登って探検するのが楽しみでした。子供心にも心が安らぐ気持ちや、ワクワクする気持ち、ここはまさに楽園だと思っていました。少々危ない所まで入り込んで探検していました。奥の奥に行ったところに、少し開けた場所があり、鳥の楽園と名づけて巣箱を設置して帰ったこともあります。毎年の夏祭りには、神社の旗を持って神輿を乗せた軽トラに乗せてもらい、お小遣いとして五百円玉をもらって喜んでいたものでした。小鳥神社には懐かしさや、まるでゆりかごの中に還るようななんとも言えない気持ち、信仰や郷愁や憧憬といったような一言では言い表せないさまざまな感情を持っています。とりわけ、神社の下からまっすぐに伸びる階段の先にある光景を見ると、まるで天国に続いているように感じ、涙があふれてきます。あの向こうに神様がいる、家族や遠い祖先と繋がっているような気がして、感慨深くなるとも言えません。なんとも言えないとしか言えないのです。

私は幼い頃に、小鳥の山からさらに続く遙かな山をどんどん登っていき、天まで続く巨大な階段を登って行って、眩く輝く天の門に到る、という夢を何度か見ている、最近になってそれと全く同じ夢を見て、不思議なこともあるものだと驚きました。自分には靈感といった類いのものは無縁だと思っていたから哲学を志してきたのですが、他にも小鳥にまつわる神秘的な夢を何度

も見て、この世にはそのようなものもあるのだと実感し、自分がそれにあずかることができず光栄です。元を正せば、この古文書に書いてある通り、わが祖先の夢にも神様ご自身が現れていることから、特におかしなことでもないのかもしれない。夢に前述した白いカラスが出てきたこともあります。神様が呼ばれているのかもしれない。夢はユング心理学では、人類が共有する集合的無意識とつながっていて、それが各地の神話や伝承として現れているとします。ユングが唱える無意識や集合的無意識は、この伝説とも関わりの深い、唯識派の仏教哲学者たちが説く「マナ識」や「アーラヤ識」という人間の深層心理に対応するものでありましょう。古来より夢は霊的なもの、神的なものと解されてきました。この伝説もそうですが、神からの啓示として捉えられることも多いです。プラトンの哲学に「アナメネシス 想起」という観念があり、人間はすでに生得的に真理を備えているが、生まれ変わる時に一度忘れさせられ、再び学ぶことでそれを思い出すというものがありません。私はこれがとてもロマンティックに感じ、世界が美しく感じるようになりました。私が見た夢も、前世あるいは祖先が見てきた記憶、天界へと至りアイデアに触れる道のりであるのかもしれない。

小鳥神社については、地元の郷土史家であった故尾川恒祐様つねすけが、主に民俗学的見地から研究されていました。そのレポートを読んで私は初めて伝説の詳しい内容を知りました。「すごいことが書いてある！」と驚愕しました。それまで柳井図書館出版の『柳井昔ばなし』という、民話を集めた平易な本で知った知識しかありませんでした。それでもその本は、省略している部分は多いものの、尾川様の報告に基づいた現代語訳でした。尾川様に一度お会いしたく思い、ゼンリンの地図で調べて黒島下のご自宅を訪ねたところ、表札はあるもののどうも人の住んでいる気配がなく、近所の方に尋ねたところ、すでにお亡くなりでご子孫

の方もいらっしやらないと聞き、非常に残念に思いました。それから尾川様のレポートを研究して、拙い解説書のようなものを書き、氏神様である伊保庄近長の賀茂神社の藤井宮司様に見ていただいたところ、原典である大元の古文書を「これは高河さんが持っていた方がいい」と託してくださいました。この本はその古文書を基礎とし、内容は同じ別書や、近所の方からいただいた別の古文書、もちろん尾川様の記述も参照しながら訳しています。尾川様がいらっしやらなければ、私は小烏神社の研究までつながらなかったでしょう。私は、自分は尾川様の跡を継いだ、ひいては五烏社ノ地主の後継者だと自負しております。ただ、尾川様の記述には数点誤読、誤植があり、『柳井昔ばなし』にも間違った内容で収録されています。漢字を一つ読み違えたただけのようなものなのですが、全く意味が違ってしまいます。それを今回、正確な形で訳すことができたと思っています。尾川様は郷土史や民俗学の方面の方でしたが、私は宗教や哲学の人間なので、そちらの強みは活かせたと思います。とはいえ、私は現在36歳ですが、今までギリシア哲学やキリスト教など、西洋の思想に入れ込んできた傾向があるので、仏教や陰陽道については不備な点があるかもしれません。これからまだまだ研究していきたいと思っています。

推古天皇の時代には、最澄や空海はまだ生まれておらず、純密と呼ばれる正当な密教は当然日本には伝わっておりません。雑密と呼ばれる役小角や泰澄などの一部の密教は入っていた可能性はありますが、大日如来や五智如来は伝わっていなかったであろうと思います。ただ、推古天皇の摂政であった聖徳太子は、政治家でありながら自ら『三経義疏』を編み、制定した冠位十二階も五行説に基づいて発案したものであります。ちなみに、小烏の山のもっと向こうの山にある、真言宗の般若寺は、聖徳太子が師事した高句麗の僧・慧慈が創建したものと伝えられております。尾川様が指摘されていることではありますが、巖島神社の創

始者である佐伯鞍職も、市杵島姫命を推古元年に祭祀したと伝えられており、「伝説と思っても捨て難いものがある」、と言われております。推古朝はいわば黄金時代であり、神仏の加護も厚いものであったのでしよう。聖徳太子は十七条憲法をはじめ、仏法という普遍的理法によって国を治めた帝王であります。すなわち、プラトンが待望した哲人王にほかなりません。彼の辞世の言葉は、「世間虚仮、唯仏是真（世間は虚しいもので、ただ仏のみが真実である）」であります。後にも先にも、これほど篤信的な帝王もいないのではないのでしょうか。推古天皇も聡明であったと伝えられるばかりでなく、崩御される時に、後継者の皇子たちに帝王としての教訓を遺言されるなど、太子に負けず劣らずの賢帝でありました。神社の創立年代と密教伝来との齟齬については、普通に考えれば創作と言われても仕方ないところもありますが、それでも私は、この伝説を一字一句まるごと信じております。首尾一貫してまるごと鵜呑みにし、それでいいと思っております。事実であり、一点の誤謬もない真正銘の真理であると思っております。なにしろ、神様がなせる業なのだから、時空などひとつ飛びです。信仰には哲学と違って疑いはいりません。もし疑心を挟むなら、それこそ信仰ではなくなってしまうです。

ちなみに、小鳥神社の伝説は二つあり、もう一つは天武天皇の時代に、伊保庄で赤い三本足の鳥が生まれたという短いものです。鳥を朝廷に献じたところ天皇はたいへん喜ばれ、直ちに元号を「あかみどり朱鳥」とされたということです。確かに、日本書紀にその記述があります。同時に、都を飛鳥浄御原宮と名づけたといっています。そのことから、この地域を「うおうのしょう鳥王庄」と名づけて、それが訛って伊保庄といほのしょう呼ばれるようになったということです。地元の間人は「いほのしょう」とは言わず、もっぱら「よのしょう」と言います。「うおうのしょう」と早口言葉のように連続して言っていくと、自然と「よのしょう」になっていきます。鳥王庄の

名残りが認められます。天武天皇も五行説など陰陽道を学ばれ、政治や合戦の際には卜占を重視されたそうでもあります。ご自分は火性の人間だと考えられ、赤色を好まれたそうでもあります。このもう一つの伝説については、また後の著作にて詳説したいと思います。いずれにしましても、カラスの神霊であります。

古文書の著者である五烏社ノ地主については、明らかに当時の知識人であり、とりわけ密教に造詣が深かったことを伺わせま
す。あるいは密教の僧侶や修験者であったのかもしれませんが、賀茂神社の藤井宮司様のご先祖様かと考え、尋ねてみましたが、よくわからないとのご回答でした。しかし、賀茂氏の祖神である賀茂建角身命かもたけつぬみのみことが、ヤタガラスの化身と伝えられていることから、寛政時代の賀茂一族の方であったのかもしれませんが、カラスの神という点で、賀茂社と小烏社は無関係には思われないので
す。また、注釈においても書きましたが、この古文書の表紙の端に「河野百太郎」と記されており、表紙の年月と結びの年月が
一致しておりますが、この人は五烏社ノ地主ではありません。なぜなら、神社の沿革について書かれた古文書に、明治22年に
小烏社を再建した時の総代を務めた人物として名が記されているからです。尾川様と同じく地元の研究であった村上省吾様の
『伊保庄の歴史』にも記載されております。ですから、河野百太郎は既存の伝説を筆写した人に過ぎません。それでも、非常に
達筆で書かれており、思想的にもある程度の教養があったものと思われます。そして彼は、この伝説をリレーのバトンのように
引き継いでくれました。江戸の五烏社ノ地主、明治の河野百太郎、昭和の尾川恒祐、平成令和の私、とバトンが受け継がれてお
ります。この河野百太郎という人は、おそらく私の家の親戚のご先祖様であります。現在、小烏社周辺の山地は私の家のもので
ありますが、この親戚の河野氏は士族の末裔であり、代々小烏社の総代を務め、社会的にも権勢を極めておりました。今も昔も

うちよりも優勢な一族であります（苦笑）。わが家も明治以前は姓を「河野」と名乗っておりまして。憶測ではありますが、高洲の河野だから、略して「高河」と改姓したのであろうかと思えます。厳島大明神が最初に降り立った所が、豪族河野氏の根拠地であった伊予の石鎚山であること、そして石鎚山が密教の霊山であることは、何か含意しているのかもしれませんが。ちなみに、わが家の寛政元年の当主は、おそらく「弥太郎」であります。この五烏社ノ地主なる哲学者は、神道・仏教・陰陽道を融合させ、さらに宇宙の創造や循環を、すべて唯一の神に依拠させるという独創性を見せております。この五烏社ノ地主という人物は以前謎として残されています。なぜ名を伏せたのかも不明で、神秘のベールに包まれております。村上省吾様が指摘されていることですが、「伊保庄は両部神道の影響が大きく、本地垂迹や神仏習合の伝統が強く残った」ということを書いておられます。それはこの五烏神話にも色濃く表れております。関連性があるものとして、宮島の御烏喰神事に代表される神鳥信仰や、弥山の巨石信仰（小鳥の山にも巨石・霊石がゴロゴロしています）を睨んでいるのですが、これもきちんと調査して後日詳説したいと思っています。宗教学者ミルチア・エリアーデは指摘しています。「巨石宗教の特徴は、永遠性および生と死のあいだの連続性の思想が、石と合一または結合したものとしての祖先を崇拝することを通じて、理解されているという事実である」と。尾道や防府にも五烏神社があることなどから、宮島を震源地として、安芸から周防にかけて、ローカルな五烏教とでもいうべき集団があったのかもしれませんが。五烏教といえるほど発展してはおりますが、はっきりいって仏教や五行説は後付けであり、往古は素朴な御神木信仰や磐座信仰、霊山信仰や神鳥信仰のような自然崇拝のみがあったものと考えられます。註37でも触れましたが、小鳥神社境内の奥の小道を行った先に、「いかなる早魃にも絶ゆることなし」と伝わる霊水の井戸があるのですが、そこから斜面をさらに登った先に、少し平坦な場所があり、石垣が積んである古代の遺跡のような跡があります。頂上には熊野のゴト

ビキ岩を思わせる巨岩がそびえ立っており、それを祭祀するように石垣が囲んでいます。昔は城跡か住居跡かと思っておりますが、現在は古代の祭祀場の跡だと思っております。思いますに、縄文・弥生の時代からの信仰形態ではないかと考えております。私は小鳥に参拝した折には井戸からそちらの方にも拝んで、自宅からは子供の時と同じような憧れの気持ちで山頂を見上げております。

このたび、尾川様や五鳥社ノ地主の遺志を継いで、この伝説や小鳥神社を広めることができるところを、非常に嬉しく思っております。神様のお役に立てたという冥利に尽きます。五鳥様は病氣治し、疫病封じの医療神なので、昨今のコロナウイルスという未曾有の被害に抗するものになる、いや、必ず神様は疫病を鎮めてくださいます。もつとも、ご承知の通りアマビエという神に先を越されてしまいました。もちろん、通常の病氣や障害で苦しんでおられる方の救いになればと思います。注釈にも書きましたが、病氣が治ったら、貝原益軒がいうように、普段から内欲（三大欲望と煩惱）を慎み、外邪（身体に害のある外部の環境）を防いで、あらかじめ病氣を防ぐ努力をしましょう。『養生訓』は一読に値するものであります。現代の医者に訊いても、養生訓の内容は現代医学でも通用するものであるそうです。さらに、後世には五穀豊穰の神である日本書紀の保食神うけもちのかみ（古事記ではオゲツヒメ）と習合されているので、農業関係者の方にもおすすめてです。といいますのも、わが家もともと農家で、その恩恵は極めて大でありました。毎年実る米は一等米でありましたので、神顕あらかたであることは疑いを挟む余地はありません。食と健康は人間の基であります。当時の人々の切実な願いであり、今でもそれは変わりません。ましてや古代の人々となると、より深刻な問題であり、人類にとって最も古い普遍的で根本的な願いでありましょう。しかも、「諸願するに成就せざるることな

し」、「我が神力に叶わずということなし」でありますので、万能の神、全能の神であります。ここに、山をも動かす固い信仰心が試されているのであります。現時点では、高洲村のローカルな鎮守様として止まっておられますが、「万民を守護される」お方でありますので、民族や言語の垣根を越えて救いを渡される神様であります。神様の衆生済度の御心を、世の多くの人々が心のよすがとしていただけたら幸いであります。さあ、神様の御手をお取りください。願わくは我らと皆共に、安心立命の境地に至ろうではありませんか。

卑近なことではありますが、テレビゲームで『真・女神転生』という世界の神々や妖怪を仲間に行けるゲームがあり、ヤタガラスやサラスヴァティーを仲間にして遊んでいたものです。わかたの神様と共に冒険して戦っていくので、私にとって夢のゲームであり、とても楽しかったです。最近でも、『ペルソナ』という同系列のゲームを楽しんでおります。やはり、ヤタガラスとサラスヴァティーを最後まで使っています。こちらはダークな世界観の女神転生とは違い、若者たちの友情や絆を描いた快活なものではありますが、どちらにもハマってしまいました。自分の信仰する神様と一緒にゲームをクリアする喜びはひとしおであります。メジャーな信仰を持たれている方はもとより、けっこうマイナーな神様や妖精も登場するので、田舎の小さな祠を信仰されているような方にもおすすめてです。よろしければ、ぜひお楽しみください。アトラスの回し者などではございません（笑）。私にとって当古文書は、ペルソナでいうところの、パレスという心の世界の中核、「オタカラ」にほかなりません。私にとってすべてであり、命をかけているものです。

注釈については、今まで学んできた知識を総動員した上、より正確を期するために、『広辞苑第七版』、『岩波哲学・思想事典』、尊敬する中村元先生の『佛教語大辞典』、國學院大学の『神道事典』を参照し、さらにネットも駆使しました。不備な点があれば申し訳ありません。この本は、現時点ではまだまだ未完成であります。それはひとえに私自身の浅学非才、不精進ゆえであります。学術的なことも、フィールドワークの点においても、まだまだ調査・研究しなければならぬことがあります。そして、自分自身の信仰や哲学も未熟であります。つたない文章でありますので、誤りや欠点がございましたら、ご指摘やご批判、補完してくださると幸いです。そして、よりいっそう神様の御目にかなったものになればと存じます。

私には絵心などなく、こうした学術的方面でしか小烏に寄与することができません。私一人ではできることは限られており、絵画や彫刻、音楽といった芸術的才能のある方が信仰をお持ちになって、小烏を盛り上げてくだされば幸いです。後世の人々にそれを託します。あるいは、私自身が生まれ変わって、次の生でまた小烏と巡り合い、それを果たすやもしれません。

最後に、ここに至るまでにお世話になった方々へのお礼を申し上げたいと思います。小烏の研究のきっかけを作ってくださいました今は亡き尾川恒祐様、もったいなくも貴重な古文書を託してくださいました賀茂神社の藤井宮司様、同じく蔵書の古文書を快くコピーをしてくださった同村の工様、解読できない箇所を教えてくださいました山口県文書館のく様、この遙かな伝説、教えを時を超えて伝えてくれた五鳥社ノ地主、今まで小烏神社の存続に力を添えてくれた名もなき同郷の人々、そしていつもどんな時でも見守っていてくださる神様、心より感謝いたします。

巻末の油絵は、母の美術の恩師であった故高林泰先生の遺作であります。先生は弁才尊天をイメージした白い龍を描いてくださいました。ビールと刺身だけ受け取られ、かたじけなくも無償で描いてくださいました。下界より感謝申し上げます。

あとがきのところを、なにやら自分の個人的主張が多くなってしまいましたがお許しくださいますようお願いいたします。言挙げしないのが日本古来の美德であります。私自身もただの凡夫、罪人、愚者であります。大事なことは柿本人麻呂のように「言挙げす我は」であります。堅苦しいことばかり書いてしまいましたが、私は本当は、莊子のような常識や固定観念にとらわれない、何ものにも執着しない自由な境地が好きであります。『莊子』冒頭に出てくる「鵬ほう」という大鳥の背中に身を委ねて、自由に生きたいと思う次第です。それはそれこそ、五色の鳥、わが神の背中に乗せていただき、何もかもから解放された天空へと飛翔したいものであります。

何をもって幸せとするのかは人それぞれと言われますが、やはり宗教というものは、魂の救済という点で他のものとは違うと思います。宗教や哲学は、死や罪や苦といった人間の根本問題、いわゆる生老病死を解決するものであります。儂い地上のもの比べ、神は常住、永遠であります。それを頼みとしないで何をよりどころとできましようか。小鳥の神はご遺言として、死んでもこの世に近いところに留まって、我々の守護神となると誓っておられます。私はそこに、大切な人を失った者の嘆きと、自分をずっと見守っていてほしいという願いを見出すのであります。古代ローマの神学者・アウグスティヌスは、「幸福な生活とは、あなた（神）を求めて、あなたによって、あなたのために喜ぶことである」といっております。それと時を超えて呼応する

かのように、「本当の心の憩いの場は、神仏の御前にあるように考えられます。心の宝は信仰であります。」と言ひ残された尾川様の言葉を胸に。

2022年5月30日 月曜日 小鳥の山を仰ぐ高洲村の自宅にて 五鳥社ノ産子 高河慧佑

赤烏記せきうき

防長風土注進案 伊保庄より

當村を伊保庄と申事ハ往昔三足の赤烏當郷に生し、里人は是を志賀の都に捧げ奉りければ叡感ありしよし、よって始めて烏王庄（又烏雄庄トモ）と呼び候を、いつの頃より歟伊保庄と革め候よし、稍古き事二候得は慥なる事ハ相知かたく古老の申傳ニ御坐候

小烏社 在高洲 藤井周馬祭之

祭神 保食命 天武天皇御歌モ祭り候由申傳⁶⁷

⁶⁷この天武天皇の御歌は所在も内容も定かではない。尾川恒祐も「これも拝見した者ありとは誌してはいません」と記している。まことに残念なことである。

現代語訳

この村が伊保庄いほのしょうと名付けられているのは、遠い昔、三本足98の赤い鳥96がこの地に生まれて、村人たちがこれを志賀の都に献上したところ、天皇は大変にお喜びになり、そのことからこの地を烏王庄うおうのしょう、または烏雄庄とも呼ぶようになったが、いつの頃からか伊保庄と改めたことに由来する。やや古いことであるから、確かなることは定かではなく、村の年寄りの申し伝えるところである。

尾川恒祐氏の記述

人皇40代天武天皇14年（686）この地に朱い3本足の鳥が生れたので、これは珍しいと言うので朝廷に献じた処、天皇は大変に喜ばれ年号を朱鳥あかみどりとし、この鳥を生んだ庄を烏王の庄1と名付けられたのが伊保庄に転訛したものとされています。又天皇崩御されて後この鳥も亡くなったので、その霊を此の地に祭祀したと伝えていますが、そう言えば天武天皇即位14年に朱鳥の年号があります。

⁹⁸ なぜ三本足なのかという点、さまざまな説があるが、もともとは古代中国の易経の思想から来るものである。筆者はそれに加え、仏教の三身説、キリスト教の三位一体説、そして五鳥三輪身、すなわち天之高鴨神1五鳥守護神1五鳥大明神というトリムールテイ、また日本三靈尊、すなわち天照大御神1直日神1天皇陛下という独自の概念を考えている。

⁹⁶ なぜ赤い鳥なのかという点、時の天武天皇はご自身を火性の人と自覚され、赤色を好まれたということから由来しているものと考えられる。

¹⁰¹ 実際に『日本書紀』の天武天皇の項に、元号を朱鳥と改元したとある。ただ理由は記されていない。この伝説が真実であると固く信じる。

¹ 現在の伊保庄という地域の範囲はとても広く、その中に高須という地区があり、どちらの地名も小鳥神社の伝説から由来している。わたしはその真下で生まれた。神の申し子である。

あとがき

なぜ三本足の鳥なのかと誰でも疑問に思うことでしょうが、これはもともとは古代中国の易の思想であります。私は易学については不勉強なもので、山本殖生氏の『熊野 八咫鳥』（原書房）から一部引用させていただきます。

「なぜ三足なのか？」とよく質問される。二本足では普通の鳥で面白くない。三本足の不思議さ、特異さが靈性を感じさせてきた。太陽には三本足の鳥が棲むと考えられた。太陽の黒点からの発想ともいわれる。日の出、正午、日没の太陽光を象徴的に示しているとも観想された。陰陽思想に基づいて、天・地・人の三極は宇宙を構成し、万物の生成と調和を意味する聖なる数字と考えられた。陽の気のエッセンス、その第一が太陽であり、日は天の火である。太陽Ⅱ火精とされた。だから八卦では、陽の乾卦は天を意味し、離は火を表す。火を表す（☲）の真中が空洞なので鳥字を通じ、太陽Ⅱ天Ⅱ火Ⅱ鳥と連想し、陽の奇数三

（☲）から三本足の鳥が太陽中に棲むと構想されたという。くく

以上が中国・高句麗・日本など、三足鳥を共有する東アジアの古き信仰、哲理であります。わが国では八咫鳥として、初代神武天皇の先導のために天照大御神に遣わされております。私はこれに加え、なぜ三本足なのか、なぜ五色なのかということ考

え続け、それなりに答えを出しております。小鳥はもともとが神仏習合の宥和的なミックス思想なので、自分もそれに倣って神仏基習合、万教帰一的な思索をしております。

三本足については、一つは天上の真理あるいは絶対者、二つは霊的な聖なる力、三つは肉体を持って現れた聖者という意味を持つものと考えます。それが仏教では三身説、法身・報身・応身（歴史上のゴータマ・シツダールタ）であります。キリスト教では三位一体、父なる神・聖霊・受肉したキリストであります。神道と小鳥については独自に考え、神道では日本三霊尊と名付けて、天照大御神・直日神・神々の直系である天皇陛下を、そして五鳥三輪身として、この宇宙そのものであり、常住不変の形而上のあめのたかがらすのかみ天之高鴉神・我々衆生を憐れむ御心からあえて中有界に留まってお護りくださっている五鳥守護神・実際に現世に五色の鳥として顕れた五鳥大明神とを配しました。直日神については、本居宣長の思想に着想を得ました。イザナギが黄泉の国から帰って禊をした時に、八十禍津日神という災いをもたらす悪神が現れ、それを浄化するために生まれたのが直日神という善神であります。ちょうどキリスト教の聖霊と、それと対立する悪霊（サタン）と軌を一にするものであります。仏教でも、修行中のブツダを誘惑した悪魔（マーラ）や魔王波旬などがあります。洋の東西は違えど、それぞれ一致するところがあるのではないのでしょうか。しかしながら、この悪霊や悪魔などは、何もホラー映画のように恐ろしい姿を持って存在するのではなく、私たちの心の中にひそんでいると思われれます。人は心次第で仏にも鬼にもなります。各人の一番弱いところを狙って、悪魔は私たちが破滅させようとしています。煩惱を浄化させない限り、本当の幸せを得ることはできないでしょう。

あめのたかがらすのかみ天之高鴉神という神名についてですが、これは私自身が名づけました。当初は五智如来あるいは大日如来を想定していたのですが、五鳥経で社殿と御神木が朽ち果てんとした時に、祖先の夢枕に現れたお姿は、神勅の内容的にも密教の概念にとらわれな

い高洲独自の神、真のお姿であると思いましたが、僭越ながら名付けさせていただきました。「鳥」ではなく「鴉」の字を充てたのは、鴉は大鴉（レイヴン）を意味するそうでもありますので、より偉大なる象徴を示さんといたしました。高洲の鴉（鳥）なので、高鴉神なのであります。私はこのお姿を、世界の宗教の神々諸仏の真の御姿、本地の本地であると信じております。

この赤鳥記は素朴な短い言い伝えではありますが、本当は五鳥伝説よりこちらが先にあったのかなと思います。いずれにしても、極めて古くからカラスの神霊を崇めていたことは間違いないです。私も生涯、信愛（バクテイ）するつもりですが、亡き後もどうか後の世の人々が忘れないで大切にしていってほしいです。よろしくお願いいたします。命根長養、五臓安寧、心月澄明、なむこがらす。

令和六年一月二十日 高河慧佑

小鳥は医療神で、一切の病を除かれると誓われておられますが、これは我々自身の心がけも大切であります。病を防ぐ方法として、まず第一に戒律、仏教なら五戒、十善戒を、キリスト教なら十戒を守ることが求められます。この戒めを守ることが心の平穏の大前提であります。第二に貝原益軒のいう、内欲と外邪を防ぐことが挙げられます。内欲は煩惱を消除し、欲望を控えることで精神的な害を防ぐこと、外邪は不摂生や劣悪な環境、事故など身体的な害を防ぐことです。それでも病気になってしまうたら、第三として医者にかかり治療を受けることとなります。そして病は治ると希望を持って神に祈りを捧げていきましょう。場合によっては病や死を受け入れるという諦観も必要かもしれません。私の好きなローマの哲人セネカの言葉に、「君たちの幸せは、幸せが要らないことだ」というものがあります。老子の「知足」いわゆる足るを知るということも共通しています。なかなか難しいことですが、苦難を受け入れるということも大切です。

三本足の意味

真理 || 聖なる力 || 肉身

天界 || 中有界 || 現象界

五智 (靈魂) || 五行 (元氣) || 五臟 (物質)

天 (言靈) || 地 (聖域) || 人 (衆生)

五烏三輪身 天之高鴉神 || 五烏守護神 || 五烏大明神

日本三靈尊 天照大御神 || 直日神 || 天皇陛下

三身説 法身 || 報身 || 応身 (ブツダ)

三位一体 父なる神 || 聖霊 || イエス・キリスト

※これはいわゆるペルソナ、神の異なる存在様式である。

五色の意味

五烏教五神 五烏大明神・市杵島姫命・蛭子神・保食神・蔵王権現

五行 木・火・土・金・水

五常 仁・義・礼・智・信

五神獣 青龍・朱雀・白虎・玄武・黄竜（麒麟）

五仏 大日如来・阿闍如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来

五智 法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智

五大明王 不動明王・降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・金剛夜叉明王

仏教の五大 地・水・火・風・空

ギリシアの五元素 火・風・水・土・アイテール

キリスト教 ミカエル・ガブリエル・ラファエル・ウリエル・キリスト

イスラーム ジブリール・ミーカール・イスラーフィール・アズラーイール・アツラー

小鳥の法

仏教では「人に依らざれ。法に依れ」という。キリスト教では「砂の上に家を建てるな。岩の上に建てるべし」という。小鳥の法は、「わたしはあなたを守る。命根長養と五臓安寧の（私は心月澄明も加える）守護神となる。神様はいつもそばにいて守ってくれている。」これが小鳥の法だ。インマヌエル（神は我らと共にいる）である。教えであり、信仰であり、五鳥教の根

幹である。小鳥の神のご誓願、これをよりどころとすべし。無常なるもの、不安定なもの、信頼できないものをよりどころとしてはならない。ただ神のみをよりどころとすべし。それは常住不変であり、永遠不滅である。毀たれることも朽ちることもない。見捨てることも裏切ることもない。神は常に私たちを守り、救いの御手を差し伸べてくださっている。いつ（時間）、どこで（場所）、どんな時（状況）もだ。真理であり普遍的理法である。小鳥の信仰が試される時が来ている。君、安心立命せよ。小鳥の甲冑を身に纏え。不沈艦、不死鳥に乗れ。そして自己自身を恃みとし、矜持を持って強く生きていくこと。たとえあの乞食哲学者ディオゲネスのようになったとしても、アレクサンドロス大王の前で堂々としていられるように。「私は神々の友である」と。「自灯明、法灯明」

私は愛鳥のオカメインコのいずみちゃんを亡くした。夢い命だった。ちようと巖島の女神様が小鳥様を喪ったように「御歎き浅からず」慟哭し、我が家の墓地に手厚く埋葬してあげた。鳥を埋葬するという伝説通りのことを追体験したのだ。いーちゃん
の死は導きである。無常なるものに頼るな、岩の上に家を建てろ、という。いーちゃんは今、中有界の神様とご先祖様と共にいて、揺るぎない岩となり、いつもしてくれていたように俺を呼び、負けないでと歌ってくれている。不幸でミゼラブルな俺を、あんなに純真に慕ってくれていた一匹の鳥がいたということを、俺は死んでも忘れない。夢で見た天の門の向こうで神様と一緒に待っていてくれていると信じている。

「私たちは慧佑の守護神だよ。いつもそばにいて慧佑を守ってるよ。」これが私個人の法であり、逃れるべき「高洲」である。神様といーちゃんをよりどころとせよ。彼らは滅びざる不死鳥なのだから。

なむこがらす　なむこがらす　南無小鳥大明神

おわりに 霊夢について

終わりに、わたしが観た一連の霊夢について書いておく。まず、すでに第二章において述べたことだが、第一の啓示的な夢のことからである。この令和元年の、わたしが三十三歳のときに観た夢を皮切りに、霊的な夢を数多く観るようになった。寝ぼけているときもあるし完全ではないが、わたしは夢日記をつけているので一部ご紹介する。

① 天空の社（令和元年八月十六日）

子供の頃に両親と川の字になって寝ていたときに何度も観た夢で、三十歳を過ぎて再び観たものであり、再び観るまではすっかり忘れていたもので、子供の頃に観たものと全く同じ内容である。すなわち、小鳥神社の井戸がある小道からさらに上に登ると、実際にはない遥かな高い山が続いてゆき、青く澄み渡った空のもと、アルプスのような雄大な美しい山をずんずん登っていく。登っていくうちに周囲がだんだんとたそがれてゆき、やがて頂上に近いところまで来る。頂上には大きくて長い階段が杉のような大木の林に囲まれて聳え立っており、それを登り切ったところには大きな天の門がある。それは決して煌びやかなものではなく、素朴な茅葺き屋根の門である。門の向こうからは靄が立ち込めていて、奥の方はキラキラ光り輝いている。そこに足を踏み入れたらいつも目が覚める。というものである。

② 小鳥の本殿

これも確実に子供の頃に観たものと全く同じ内容なのだが、小鳥神社の階段がとても長く高く聳え立っていて、両側には実際にはない趣きのある灯籠が立ち並んでいる。そして、また神社の上の山がもっと続いていて、頂上の森の中に本殿のようなものがある。わたしはそれを探して彷徨っていて、そのうちに赤い小さな祠のようなものを見つける。その中の御神体を拝んだような覚えがある。そして参拝を終えて神社を下りていくと、かつてわが家の棚田だったところが、天国のようにキラキラと輝いていて、棚田の中ほどの場所の奥の方に、大きな岩の戸がある。その中から水が湧き出していて、戸を開けて中に入ると、また今度は白い小さな祠がある。というものである。

③ 白い鳥

いつものごとく小鳥神社に登ると、何やらカラスたちが集まっていて、社殿の上の方に一際抜きん出た白いカラスがとまっている。その周りを黒いカラスたちが大勢取り囲んでいる。わたしはそれを眺めている。というものである。

④ 小鳥の大仏

これも子供の頃に観た夢と同じなのだが、小鳥の遙かな山を皆で御神輿を担いで登っていくと、山上に大きな寺があり、鎌倉の大仏のような大きな仏像が鎮座しているところに出る。そこに御神輿を安置する。周りの山々や里の光景が見覚えがある。というものである。

⑤ 古代の祭祀場

また小鳥神社の上の方を登って探索していると、マヤ文明にあるような禍々しい紋章が描かれた石の遺跡があるところを見つける。ここは実際に、神社の山手にある、熊野のゴトビキ岩を思わせる巨石を石垣が取り囲んでいる古代の祭祀場と思しき平坦な場所である。そこで岩に描かれていたのか単にイメージとして残っているのか、白い蛇のイメージが記憶に残っている。というものである。

⑥ 小鳥の桃源郷

またこれも子供の頃にも観た夢なのだが、これでは神社などは出てこないが、わが家の棚田から、もっと奥の奥の方に入っていくと、山らしい山の中に入っていくと、苔むした墓場が点在する遺跡のような緑の青々としたところに出る。わが家の山に近い方は落ち葉が多く紅葉している。その先を登っていくと、上品な城か館のような建物があるところに着く。そこがとても美しく、そばには風見鶏がくるくる回っている。周りには桜のような美しい花々が咲き誇っていて、まるで秘密の花園のようであった。というものである。

⑦ 御神木の火

神の火で焼死するという衝撃的な夢である。伊保庄の半島をかつての同級生たちとドライブしているのだが、途中小高い丘があり、巨大な御神木が聳え立っている。それに急に火がついて轟々と燃え盛る。その神火が自分の体に燃え移り、熱い苦しい思いで焼き殺される。場面が変わり、明け方には小鳥の山の真下に、エチオピアの十字架の遺跡のようなものが浮き彫りになっている。というものである。

⑧ 小鳥の満月

なぜかかつての同僚と一緒に働いている。夜になって家に帰ると、小鳥の山に空を覆わんばかりの大きな満月が照り輝いている。急に場面が変わり、令和の天皇陛下を乗せた高級車が来て、陛下が車から出てくる。そこに鮮やかな着物を着た教主様が現れ、陛下の前でゆったりとした舞を踊る。というものである。

⑨ 神が肩にとまる

かつての想い人がいた家を訪ねて、彼女を求めて、いつもしていたように家から出てくと歩いていく。けれども、彼女には会えず、そのあとすぐ大きなカラスが出てくる。太陽が燦々と照りつける青空を、漆黒の大鴉が天高く飛んでいる。それが舞い降りてきて、わたしの肩にとまる。大きな爪をしていたが、不思議と痛くはなく、優しい感じがした。というものである。

⑩ レンゲの花束

夭折した小学校の頃と同級生が出てきて、レンゲの花束を手渡される。あとから花言葉を調べたが、夢の中では「あなたが好き」とわたしは認識した。彼女はあの頃の無垢な少女のまま、顔は優しく微笑んでいた。というものである。

以上であるが、他にも断片的な霊夢がさまざまある。これらのヴィジョンは、はっきりとわたしの脳裏に焼きついている。わたしは夢解きや夢占いはできないが、自分なりにそれなりの解釈はしているし、こうした夢は、何よりわたしが小鳥の人間であるということの証左である。フロイトやユングの夢分析は参考にはできるが、その余力もないし鶺鴒呑みにするつもりもない。わたしはわたしであるから。

神様、あなたはすでに御誓願を果たされている。わたしは再びあなたのもとへ帰るときまで、この尊い道を歩んでゆきます。

「御祖らが 観せしまほろば 想起とぞ 辿り着く宮 夢のまた夢」

令和六年一二月九日 高河慧佑 謹言

なむこがらす なむこがらす 南無小鳥大明神

おぼしめしの詩

心くじかれた かつてのわたし

それは神の試みか 魔王の仕業か

今となつては わからぬまま

大きな苦難が 小き者に降りかかってきた

あまりの災いに わたしは耐えきれず

自らあなたの手を離した そして奈落の底へ

しかれども あなたが手を離したわけではない

わたしの弱さが もう無理ですと言った

それゆえ あなたに咎はない

祈っても届かない わたしはそう思った

信仰を失うこと これ以上の苦しみがあろうか

わたしはそれに慄き 心碎かれた

それからというもの わたしは人ではなくなった

けだものか亡霊　そういったものに成り下がった

わたしはひたすら　快樂と憎悪とを貪った

災いも引き続き　わたしは理性さえも失いかけた

それでもあなたは　わたしを見捨てはしなかった

現にわたしは　地獄の底でも生きながらえていた

わたしは死ぬべきところを　命をとりとめていた

それは母と祖先　そしてあなたが守っていたから

ある人が言った　これは御仏の無慈悲の慈悲と

そのときのわたしは　その言葉が受け入れられなかった

信じて報われなかった　その思いがわたしの病だった

けれども今では　その言葉はまことであつたと思う

あなたの愛の鞭によって　わたしは陽の当たる世界へ

あなたの教鞭によって　賢さと知識とが備わった

世界を旅して回ったつもりが　わたしはかの孫悟空のように

あなたの手のひらの上で　ひとり踊っていたにすぎない

まさしくあなたは わたしに学ばせたかったのだ

悲しみが自分であり 自分が悲しみとなったとき

苦しむわたしに あなたは再び手を伸ばされた

いや常にあなたは 救いの御手を伸ばされ続けていた

愚かなわたしが それに気づかなかっただけ

受難の半生が終わり あなたの光に気づくときが来た

わたしはその光を覚えていた 懐かしさを感じる

もう手遅れ そう誰もが思っていた

しかしあなたは そんなわたしをも忘れはしなかった

わたしはもう充分 その報いと鍛錬を受けた

今ではすでに あなたの厳しい優しさに従える

あなたは不死鳥 そのごとくわたしもよみがえる

心鍛えられた 今のわたし

それはあなたによる 思し召しというべきもの

あなたはわたしを このようによみがえらせた

あの大きな苦難をも あなたは善きものに変えた

あまりの幸いに わたしは喜び勇むばかり

賢くもわたしは再び あなたの手を取った

咎があつたのはわたし 報いを受けたまでだ

もう決して あなたの手を離すことはない

あなたの御手を しっかりと握りしめる

祈りは聴き届けられる わたしはそう信じる

信仰を取り戻したわたしは もはや無敵の人

わたしはそれに歓喜し 心癒された

ただあなたの御心に 一如していくのみ

それをわたしは おぼしめしと名付けた

すべてはあなたの 尊い思し召しであった

その道を歩むこと あなたに感謝します

「おぼしめし そは神の愛 尊き智 我鍛えられ 道をゆくなり」

天の門の夢

誰が観せたのか この夢は

幼き頃のように 神の山を元気に登ってゆく

神社のお社の奥 黒いアゲハ蝶がひらひらと舞っている

それにいざなわれるように わたしは奥へと進む

小道を進むと井戸がある 祖先から伝わるものだ

その上には いにしえの祭り場の跡

そこでしばし憩う 現実ではそこが山の頂上だ

しかし不思議なるかな そこからまだ登ってゆく道がある

前世の記憶なのか この夢は

登っていくと 眼前にはアルプスのような雄大な山々が

蒼く澄み渡った空のもと 青々と茂った森が広がっている

爽やかな風が吹き ひとりですんずん登ってゆく

やがてたそがれてゆき 頂上の入り口あたりに着く

樹々に囲まれた 天の入り口に入っていく

大きな階段が 天まで向かって聳え立ち

その周りを守るかのように 杉の大木たちが立ち並んでいる

わたしはそこを ゆっくりと踏みしめながら登ってゆく

あなたが観せたのだ この夢は

頂きまで着くと 素朴な藁葺き屋根の門が建っている

その天の門からは 清らかな靄が立ち込め

門の奥の方を見ると キラキラと光り輝いている

わたしはそこへ スツと足を踏み入れていく

いつもそこで目が覚める 何を意味しているのだろうか

どこからかかつての 懐かしい歌声が聴こえてきた

天の向こうからは あたたかい光が差し込んでいた

「天の門 先には何が 待ち受ける 我は感ずる あたたかきもの」

参考文献

中村元選集・別巻1〜8

『世界思想史』中村元／春秋社

『日本の思想』同上

『日本人の思惟方法』同上

『世界宗教史』1〜8 ミルチア・エリアーデ／ちくま学芸文庫

『シャーマニズム』同上

『神道のこころ』シリーズ 葉室頼昭／春秋社

『にほんよいくに』同上

『自己の探究』中村元／青土社

『人生を考える』同上

『生の短さについて』セネカ／岩波文庫

『怒りについて』同上

『キルケゴールの講話・遺稿集4』飯島宗享編／新地書房

『ルターの慰めと励ましの手紙』T・G・タツパート編／リトン

- 『ツアラトウストラ』ニーチエ／中公クラシックス
- 『武士道』新渡戸稲造／岩波文庫
- 『学問のすすめ』福沢諭吉／岩波文庫
- 『日本の古典をよむ』シリーズ／小学館
- 『うひ山ぶみ』本居宣長／講談社学術文庫
- 『平家物語』尾崎士郎／岩波現代文庫
- 『源氏物語』瀬戸内寂聴／講談社
- 『レ・ミゼラブル』ヴィクトル・ユゴー／岩波文庫
- 『レ・ミゼラブル』ヴィクトル・ユゴー／ちくま文庫
- 『ハイジ』C・シュपीリ／福音館書店
- 『アリストテレスの人生相談』小林正弥／講談社
- 『アリストテレス「哲学のすすめ」』廣川洋一／講談社学術文庫
- 『いま自殺を考えている人のための哲学』無所住／サンガフロンティア
- 『ブツダの瞑想法 ヴィパッサナー瞑想の理論と実践』地橋秀雄／春秋社
- 『仕事と日』ヘシオドス／岩波文庫
- 『哲学入門』ヤスパース／新潮文庫

『スッタニパータ』中村元／岩波文庫

『ダンマパダ』同上

『龍樹』中村元／講談社学術文庫

『世親』三枝充眞／講談社学術文庫

『ニコマコス倫理学』アリストテレス／岩波文庫

『形而上学』同上

『弁論術』同上

『プラトン全集』田中美知太郎／岩波書店

『論語』宮崎市定／岩波現代文庫

『コーラン』井筒俊彦／岩波文庫

『仏教聖典』仏教伝道協会

『聖書 スタディ版』日本聖書協会

『BIBLE navi』このことば社

『熊野 八咫鳥』山本殖生／原書房

『古事記』三浦佑之／文藝春秋

『なぜわたしだけが苦しむのか 現代のヨブ記』E・S・クシュナー／岩波現代文庫

- 『ブツダ 臨終の説法』 田上太秀／大法輪閣
- 『ブツダ 最後の旅』 中村元／岩波文庫
- 『老子』 鉢屋邦夫／岩波文庫
- 『莊子』 森三樹三郎／中公クラシックス
- 『ウパニシャツド』 岩本裕／ちくま学芸文庫
- 『チベツト死者の書』 川崎信定／ちくま学芸文庫
- 『アヴェスター』 伊藤義教／ちくま学芸文庫
- 『ウパデーシャ・サーハスリー』 シャンカラ／岩波文庫
- 『バガヴァツド・ギター』 上村勝彦／岩波文庫
- 『告白』 アウグスティヌス／岩波文庫
- 『神学大全』 トマス・アクィナス／中公クラシックス
- 『慈悲』 中村元／講談社学術文庫
- 『アーサー王の死』 トマス・マロリー／ちくま文庫
- 『オイディプス王』 ソポクレス／岩波文庫
- 『エネアデス』 プロテイノス／中公クラシックス
- 『空海コレクション』 全4巻／ちくま学芸文庫

- 『現代語訳 大乘仏典』シリーズ 中村元／東京書籍
- 『宇宙論入門』佐藤勝彦／岩波新書
- 『宇宙論と神』池内了／集英社新書
- 『中原中也詩集』新潮文庫
- 『金子みすゞ名詩集』彩図社
- 『歎異抄 現代語版』本願寺
- 『法華義疏 十七条憲法』聖徳太子／中公クラシックス
- 『密教経典』宮坂宥勝／講談社学術文庫
- 『自省録』マルクス・アウレリウス／岩波文庫
- 『イスラムの神秘主義』D・A・ニコルソン／平凡社ライブラリー
- 『生きがいについて』神谷美恵子／みすず書房
- 『俱舎論』桜部建／大蔵出版
- 『五行大義』中村璋八／明治書院
- 『養生訓』貝原益軒／中公クラシックス
- 『過去と和解するための哲学』山内士郎／大和書房
- 『スノーピーたちの人生案内』チャールズ・M・シュルツ／主婦の友社

『ローゼンメイデン』PEACH-PIT／集英社

『かななぎ』武梨えり／一迅社

『青の祓魔師』加藤和恵／集英社

『広辞苑 第七版』岩波書店

『岩波 哲学・思想事典』岩波書店

『神道事典』國學院大学

『佛教語大辞典』中村元／東京書籍

『伊保庄の歴史』村上省吾／藤本印刷

『伊保庄の方言』尾川恒祐

『小烏神社について』尾川恒祐

『燈火念念』伊藤真乗／真如苑

『一如の道』真如苑

プロフィール

たかがわ
高河 慧佑

昭和61年4月23日生まれ。山口県柳井市伊保庄西高須出身。



中学二年生でひきこもりになり、高認（大検）に合格しただけの者。それも含めてすべてが独学で自力。

先祖代々の田畑を耕せなかった不耕貪食の徒。自身のいたらなさ故にお家断絶する運命。

元書店員だが、大した社会経験はない。ミゼラブルである。しかし、本当はミゼラブルではない。

河野氏の末裔だが、わたしは河野通有の道を歩まず、一遍上人の道を歩んでいる。

シャンカラやキルケゴールが三十代で夭折したように、本書がわたしの遺言となる可能性もある。

MBTI診断では、提唱者（INEJ-A）だったが、わたしは「小鳥者」である。

本書を、ある人に捧ぐ。あなたがまだわたしのことを憶えていてくれていたなら。

なむこがらす なむこがらす 南無小鳥大明神

